

1. 教育地域科学部

I	教育地域科学部の教育目的と特徴	・・・	1 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・・・	1 - 4
	分析項目 I 教育活動の状況	・・・	1 - 4
	分析項目 II 教育成果の状況	・・・	1 - 78
III	「質の向上度」の分析	・・・	1 - 109

I 教育地域科学部の教育目的と特徴

1. 教育目的

(1) 教育活動を実施する上での基本方針

教育地域科学部は学校教育課程と地域科学課程から成り、実践的力量のある学校教員の養成、地域の創造と発展に貢献できる人材の養成を目的とし、教育科学や地域科学の学際的総合的な研究成果によって広く社会の発展に寄与することを使命としている。

(2) 達成しようとする基本的な成果

- ① 学校教育課程の目的は、「子供たちの探究心、思考力及び創造性を育み、地域と連携した教育環境を組織できる教員の養成」にある。この目的を達成するために、「教員養成スタンダード」を定めそれに基づく系統的な教育課程と指導体制のもとで教育活動を行う。学校教育課程では3つの「実践コア科目」として、教育実践研究 A（各教科・道徳の授業づくりに関わる実習科目）、教育実践研究 B（総合学習・特別活動・組織学習に関わる実習科目）、教育実践研究 C（生徒指導・教育相談に関わる実習科目）を設け、協働で実践する力の育成を図る。その上で、教科や学校種ごとに求められる専門的な知識・技能・指導力を、教職科目・教科専門科目によって涵養する。
- ② 地域科学課程の目的は、「地域社会の持続的な発展、地域文化の創造、共生と自治の実現に資する人材の養成」にある。これらの資質・能力を備えた人材を育成するために、地域政策領域に関わる専門領域（地域分析系・公共政策系・環境マネジメント系）と人間文化領域に関わる専門領域（生涯学習系・国際文化系・言語コミュニケーション系）を設けた。各領域・系では、コア科目の地域課題ワークショップ科目、スキルアップ科目を通して、地域社会のあらゆる分野で必要とされる協働による課題探究・解決能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力など実践的なスキルを涵養する。

(3) 大学の基本的な目標との関連

- ① 福井大学の理念のうち、「地域、国及び国際社会に貢献し得る人材の育成と、独創的でかつ地域の特色に鑑みた教育科学研究」に関連している。
- ② 福井大学の長期目標のうち、長期目標1「21世紀のグローバル社会において、高度専門職業人として活躍できる優れた人材を育成」、及び長期目標3「優れた教育、研究、医療を通して地域発展をリードし、豊かな社会づくりに貢献」に関連している。

(4) 教育研究等の質の向上に関する目標との関連

- ① 中期目標（教育の実施体制等に関する目標）の「質の高い教育を実現するため、教育内容・方法や成果を点検・評価するシステムを構築し、不断に改善を行う教育実施体制整備する。」と関連している。
- ② 中期目標（学生への支援に関する目標）の「社会を主体的・能動的に担っていく人間の形成を目指して、学生の成長を積極的に促す学習支援、生活支援、就職支援を行う大学づくりを進める」と関連している。

2. 組織の特徴や特色

教育地域科学部は、教員養成学部として、学校教育をめぐる今日的課題に対応した実践力や教科指導力を身に付け、子供の成長・発達を支えることのできる教員の養成を柱の一つとしている。また、実践的教師教育をはじめとして、福井の高い水準にある学校教育を支える役割を果たしている。県教育委員会との連携も密であり、「教員養成スタンダード」も教育委員会との協議を重ねて策定された。

一方地域科学課程では、地域文化の創造、多様な人々の共生、産業の活性化や自治体行政のレベルアップなど、これからの地域社会が抱える諸課題を分析し、解決の方向を見出すとともに、みずから地域の人たちと力をあわせて解決に取り組む能力と専門知識

を備えた人材の養成を目的とし、課題解決型の実践的教育を行ってきた。地域科学課程卒業者の就職率はほぼ100%であり、75%程度が福井県内の企業、団体、自治体に就職している。なお、平成28年度より地域科学課程をベースにした国際地域学部が設置され、よりグローバル化に対応した人材育成が行われる。

3. 入学者の状況

入学者選抜方法は、一般選抜と特別選抜（AO、推薦、私費外国人留学生特別選抜）が実施されている。入学定員は学校教育課程100人、地域科学課程が60人である。平成23年度から平成27年度入試における教育地域科学部の志願倍率は3.6～4.1倍であり、入学定員充足率は1.05～1.02倍となっている。

入学者に占める福井県出身者の割合は81%～88%であり、依然として地元志向の入学者が多い傾向にある。福井県外からの入学者は東海地区出身が主である。

[想定する関係者とその期待]

- ・ **福井県**：若者の県外流出を防ぐために県内企業への就職を促進するよう期待している。
- ・ **県内企業**：熱意・意欲を持ち、コミュニケーション能力と実行力をもつ人材の育成に期待している。
- ・ **在学生・受験生及びその家族**：出身地域に就職し、優れた教員、公務員、企業人として活躍できる能力等を涵養してくれることを期待している。
- ・ **学校関係者、教育委員会**：高い専門性と実践力を備えた教員を養成するとともに、教員研修機能を強化することを期待している。
- ・ **卒業生**：大学が、学校・行政・企業と密接な連携・協力関係を維持することを期待している。

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

●教員組織編成や教育体制の工夫とその効果

【基本的組織の運営】

- ① 学校教育課程は各教科に対応した5コース（9サブコース）と発達科学系の3コースから成る。また、地域科学課程は地域政策領域と人間文化領域から成る。学生現員は入学定員の1.05倍であり、充足率は適切である（資料1-1-1）。

資料1-1-1 学生定員と充足率

課程・コース等		入学定員	実入学者数	直近5年間の平均 入学定員充足率 (平成23~27年度)	
学校教育課程	言語教育コース	20	19	0.99	
	理数教育コース	20	20	1.01	
	芸術保健・体育 教育 コース	音楽教育サブコース	5	6	1.16
		美術教育サブコース	5	5	1.12
		保健体育サブコース	5	6	1.20
	生活科学教育コース	10	11	1.08	
	社会系教育コース	10	11	1.08	
	教育実践科学コース	7	8	1.14	
	臨床教育科学コース	8	9	1.09	
障害児教育コース	10	11	1.10		
地域科学課程 地域政策領域（地域分析系、公共政策系、環境マネジメント系）・人間文化領域（生涯学習系、国際文化系、言語コミュニケーション系）	60	60	1.03		
計	160	166	1.05		

(事務局資料)

- ② 教育目的の達成のため、学部の組織体制と人事計画は「学部及び研究科企画委員会」及び「運営組織専門委員会」において随時検討・整備されている（資料1-1-2, 3）。

資料1-1-2 企画委員会要項（抜粋）

福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会要項

(設置)

第1条 教育地域科学部及び大学院教育学研究科に、福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第2条 委員会は、学部及び研究科の企画・運営に関し、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 大学及び学部の中期目標・中期計画及び年度計画の検討及びその運営方針に関する事項
- (2) 学部及び研究科の将来構想の検討及びその運営方針に関する事項
- (3) 学部の施設利用に関する事項
- (4) その他学部及び大学院の企画・運営の基本に関する事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学部長
- (2) 副学部長 4名
- (3) 学部選出の評議員 3名
- (4) 教育学研究科教職開発専攻長

福井大学教育地域科学部 分析項目 I

(5) 附属教育実践総合センター長
 (6) 教育地域科学部教務学生委員会委員長
 (7) 教育地域科学部学校教育課程委員会委員長
 (8) 教育地域科学部地域科学課程委員会委員長
 (9) 教授会選出の教授 2名
 (10) 教授会選出の准教授又は講師 2名
 (11) 前各号に掲げる者以外の教育地域科学部の教員 若干名
 2 前項第 11 号の委員は、学部長が指名する。

※ 第 2 期中期目標期間（以下「第 2 期」という）中に企画委員会で新学部構想が検討され、平成 28 年度の国際地域学部の設置に繋がった。

（「福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会要項」より抜粋）

資料 1-1-3 運営組織専門委員会要項（抜粋）

福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科運営組織専門委員会要項

（設置）
第 1 福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会の下に、運営組織専門委員会を置く。
 （所掌事項）
第 2 委員会は、次に掲げる事項について審議する。
 (1) 教育地域科学部における人事計画に関する事項
 (2) 教育地域科学部の運営組織に関する事項
 (3) その他学部長が諮問した事項
 （組織）
第 3 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。
 (1) 学部選出の評議員 3名
 (2) 前号を除く企画委員会委員 3名
 (3) その他学部長の指名する教員 若干名
 （任期）
第 4 委員の任期は 2 年とする。ただし、再任を妨げない。
 2 委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。
 （委員長）
第 5 委員会に委員長を置き、第 3 第 1 号の委員をもって充てる。

（「福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科運営組織専門委員会要項」より抜粋）

③ 専任教員は、設置基準に定められた数を上回っており、教育を遂行するために十分な教員が確保されている。主要科目は専任教員が担当する体制をとり、多様な分野の学習機会を担保するために適任の非常勤講師を採用している（資料 1-1-4～6）。

資料 1-1-4 教員組織

H27. 5. 1 現在

課程名	教員数					大学設置基準 必要教員数		助手	
	教授	准教授	講師	助教	計	専任教員数	内教授数		
言語教育コース	4	3	2	0	9	52	15	0	
理数教育コース	9	3	1	0	13			3	
芸術・保健体育教育コース	(8)	(6)	(1)	(0)	(15)			(0)	
芸術保健・体育教育コース	音楽教育サブコース	2	3	0	0			5	0
	美術教育サブコース	3	2	0	0			5	0
	保健体育サブコース	3	1	1	0			5	0
生活科学教育コース	6	3	0	0	9			0	
社会系教育コース	5	3	0	0	8			0	
教育実践科学コース	3	5	0	0	8			0	
臨床教育科学コース								0	
障害教育コース								0	
小計	35	23	4	0	62	52	15	3	
地域科学課程	11	12	4	0	27	10	5	0	
計	46	35	8	0	89	62	20	3	

（事務局資料）

福井大学教育地域科学部 分析項目 I

資料 1-1-5 教員の専門分野

課程	講座	専門分野・領域
学校教育課程	言語教育講座	国語学, 国文学, 漢文学, 書道, 国語科教育, 英語学, 英米文学, 英語科教育
	理数教育講座	代数学, 幾何学, 解析学, 応用数学, 数学科教育, 物理学, 化学, 生物学, 地学, 理科教育
	芸術・保健体育教育講座	器楽, 声楽, 作曲, 音楽科教育, 絵画, 彫塑, 構成, 美術科教育, 体育史, 体育学, 運動学, 保健体育科教育
	生活科学教育講座	電気, 機械, 情報技術, 技術科教育, 食物学, 被服学, 保育学, 家庭科教育
	社会系教育講座	歴史学, 地理学, 法律学, 経済学, 哲学, 倫理学, 社会科教育
	発達科学講座	教育学, 教育方法学, 教育社会学, 教育心理学, 発達心理学, 障害児教育, 障害児心理, 障害児病理, 学校経営学
地域科学課程	地域政策講座	法律学, 政治学, 社会学, 経済政策, 経営情報学, 家庭管理, 地理学, 住居学, 生物学, 環境科学, 統計学, 情報技術
	人間文化講座	音楽学, 美術理論・美術史, 生涯学習, 博物館学・地域文化マネジメント, 生理学及び衛生学, 教育心理学, スポーツ科学・生涯スポーツ論, 中国語, 言語学, 英語学, 英米文学, 英語コミュニケーション, 独語, 仏語

(事務局資料)

資料 1-1-6 専任教員及び専任以外の教員の担当科目数 (平成 26 年度)

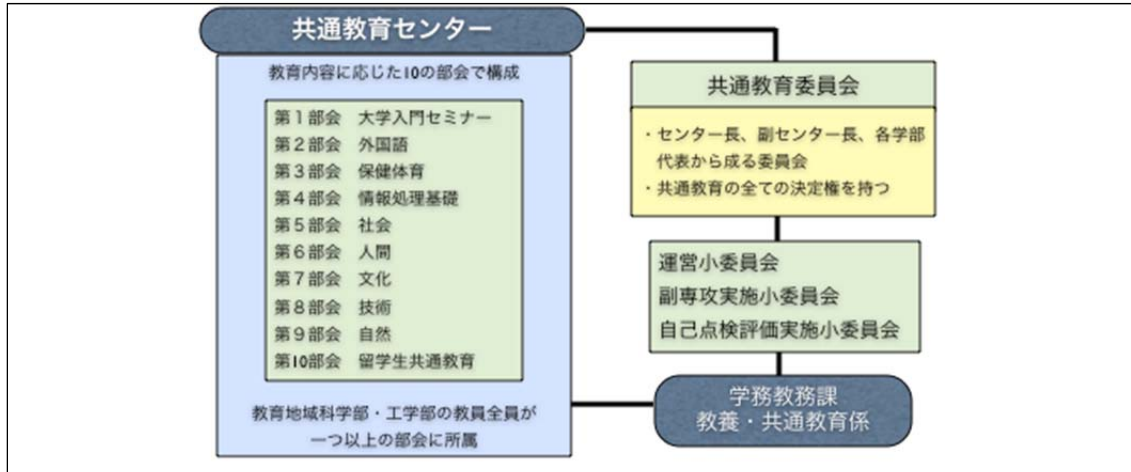
学科及び課程名	総科目数	必修科目					選択科目				
		科目数	専任教員担当の科目		専任教員以外が担当の科目	科目数	専任教員担当の科目		専任教員以外が担当の科目		
学校教育課程	602	174	149	教授	86	25	428	359	教授	195	69
				准教授	60				准教授	140	
				講師	3				講師	24	
地域科学課程	242	38	38	教授	31	0	204	180	教授	87	24

(事務局資料)

【学内での他学部との連携】

教養教育は「共通教育センター」によって実施されている。共通教育委員会の下、全教員が教養教育に関わる体制が構築され、工学部と連携した教育活動が行われている（資料 1-1-7, 8）。

資料 1-1-7 共通教育実施体制



共通教育センター規程（抜粋）

（目的）

第 2 条 センターは、教育地域科学部及び工学部の共通教育を円滑に実施するとともに共通教育について調査・研究及び企画することを目的とする。

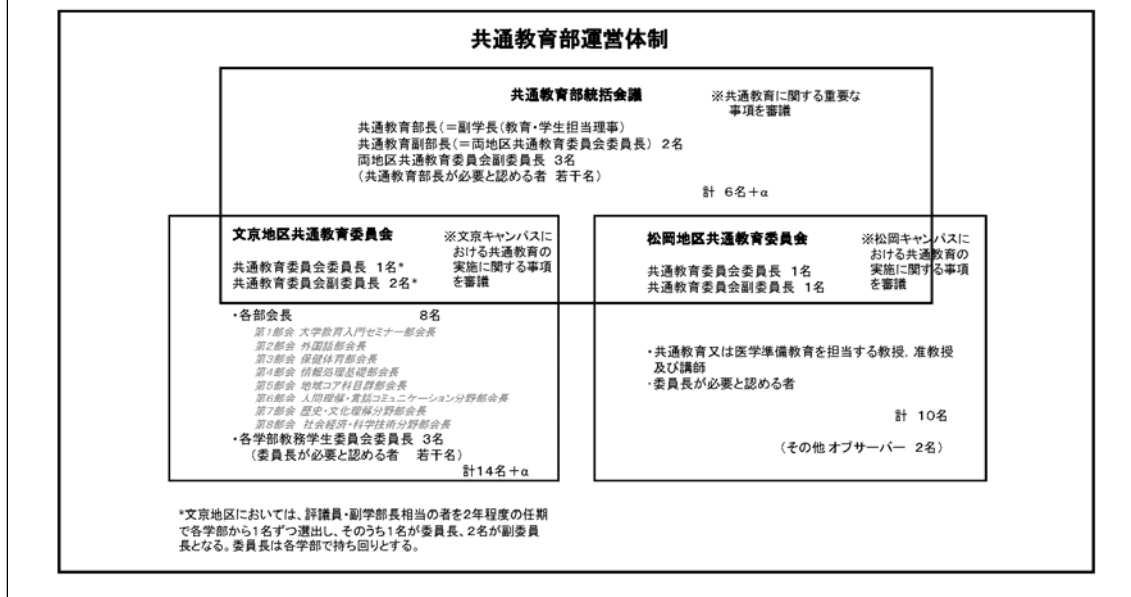
（組織）

第 4 条 センターは、文教地区すべての教授、准教授、講師・助教及び助手をもって組織する。

● 教養教育組織の改組

第 2 期中期目標期間（以下「第 2 期」という。）中に共通教育改革が検討され、平成 28 年度より全学組織の共通教育部が設置された。また、文京地区の共通教育には COC 事業に関連して地域コア科目が設けられた。

（新運営体制図）



（事務局資料）

資料 1-1-8 共通教育委員会要項（抜粋）

福井大学共通教育委員会要項	
(目的)	
第1	この要項は、福井大学共通教育センター規程（平成16年福大規程第51号）第8条第2項の規定に基づき、福井大学共通教育委員会（以下「委員会」という。）について、必要な事項を定める。
(審議事項)	
第2	委員会は、次の各号に掲げる共通教育に関する事項を審議する。
	(1) 教育の基本理念、教育目標、教育方法等に関すること。
	(2) 授業時間割、授業計画、履修登録等に関すること。
	(3) 予算の配分に関すること。
	(4) 非常勤講師の任用計画に関すること。
	(5) 非常勤講師の選考及び任用に関すること。
	(6) 副専攻制度の実施、改善及び副専攻の認定に関すること。
	(7) 部会の編成に関すること。
	(8) 自己点検・評価に関すること。
	(9) センターの管理運営に関すること。
	(10) 中期目標・中期計画に関すること。
	(11) その他委員会が必要と認めたこと。
(組織)	
第3	委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。
	(1) センター長
	(2) 副センター長
	(3) 各部長
	(4) <u>教育地域科学部及び工学部教務学生委員会委員長</u>
	(5) <u>教育地域科学部及び工学部選出の教員 各1名</u>
2	前項第5号の委員は、所属の学部長の推薦に基づき、学長が委嘱する。
3	前項の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
(委員長)	
第4	委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。
2	委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
3	委員長に事故があるときは、副センター長がその職務を代行する。
(議事)	
第5	委員会は、委員の3分の2以上の出席により成立し、議事は過半数をもって決する。
2	委員会は、委員がやむを得ない事情により欠席するときは、当該委員が指名した代理の者の出席を認め、前項の定足数に含めるとともに、議決に加わらせることができる。
3	<u>委員会の決定事項は、原則として教育地域科学部及び工学部教授会に報告するものとする。</u>

（「福井大学共通教育委員会要項」より抜粋）

【教員間の連携体制】

学校教育課程のコア科目については学校教育課程委員会が所掌し、教育実践研究実施委員会が実施する体制をとっている。以上の委員会は各コースの教員及び附属学校園教員が構成員となり教員の協働による指導が行われている（資料 1-1-9）。また、地域科学課程のカリキュラムの実施・改善、コア科目の地域課題ワークショップの実施については地域科学課程委員会が所掌し、多分野の教員の協働による指導が行われている（資料 1-1-10）。

資料 1-1-9 学校教育課程委員会要項・教育実践研究実施委員会要項（抜粋）

福井大学教育地域科学部学校教育課程委員会要項	
(設置)	
第1条	教育地域科学部に、福井大学教育地域科学部学校教育課程委員会（以下「委員会」という。）を置く。
(目的)	
第2条	委員会は、学校教育課程に関する次の各号に掲げる事項について審議するとともに、その企画・運営に当たる。

- (1) 教育実習及び介護等体験を含む教育実践研究 A-I, A-II, A-III, A-IV, A-V に関する事項
- (2) 生活科及び教職実践演習に関する事項
- (3) 幼稚園教諭免許科目に関する事項
- (4) 学校教育課程のカリキュラムの検討・改善に関する事項
- (5) 学校教育課程の履修方法に関する事項
- (6) 教育地域科学部長, 教育地域科学部教務学生委員会及び教育地域科学部及び大学院教育学研究科教育推進委員会からの諮問事項
(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 言語教育講座, 理数教育講座, 芸術・保健体育講座, 生活科学教育講座, 社会系教育講座, 発達科学講座及び附属教育実践総合センターの所属教員の投票により選出された, 上記講座所属の教授 2名
 - (2) 言語教育講座, 理数教育講座, 芸術・保健体育講座, 生活科学教育講座及び社会系教育講座の教員 各1名
 - (3) 発達科学講座及び附属教育実践総合センターの教員 2名
 - (4) 附属学校園教員 各1名
- 2 前項第1号の委員は毎年1名ずつ改選する。
 - 3 第1項第2号及び3号の委員は、当該各講座等で互選する。ただし、第1項第1号で選出された委員の所属講座等は、その人数分を控除した定数を選出する。
 - 4 第1項第4号の委員は、校長, 副校長, 教頭又は主幹教諭のいずれか1名を当該各校長が推薦する。ただし、当該委員は、原則として第2条第1号の事項に関する審議のみに参加する。
(任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

- 2 委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は前任者の残任期間とする。
(委員長及び副委員長)

第5条 委員会に委員長及び副委員長を置き、第3条第1項第1号の委員のうち、任期2年目の委員を委員長に、任期1年目の委員を副委員長に充てる。

(会議)

第6条 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(委員以外の者の出席)

第7条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(実施委員会)

第8条 委員会に次の実施委員会及び担当者会議を置く。

- (1) 福井大学教育地域科学部教育実践研究実施委員会
- (2) 福井大学教育地域科学部介護等体験実施委員会
- (3) 教職実践演習担当者会議

- 2 前項の実施委員会について必要な事項は、委員会が別に定める。

福井大学教育地域科学部教育実践研究実施委員会要項

(趣旨)

第1 この要項は、福井大学教育地域科学部学校教育課程委員会要項第8条に規定する福井大学教育地域科学部教育実践研究実施委員会(以下「委員会」という。)に関し必要な事項を定める。

(任務)

第2 委員会は、教育実習等の円滑な実施を図るため、次の事項を行う。

- 一 教育実践研究 A-I, A-II のうち、附属学校等における研究集会への参加、教育実習に向けての機器利用、教育実習校の振り分けにかかる部分の実施計画、指導及び成績評価に関すること。
- 二 教育実践研究 A-III, A-IV の実施計画、指導及び成績評価に関すること。
- 三 教育実践研究 A-V のうち、障害児教育実習、附属幼稚園教育実習にかかる部分の実施計画、指導及び成績評価に関すること。
- 四 教育実践研究 A の履修に関する特例申請について検討すること。

(組織)

第3 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 学校教育課程委員会から推薦された者 1名
- 二 言語教育講座, 理数教育講座及び生活科学教育講座の教員 各2名
- 三 芸術・保健体育教育講座教員 3名
- 四 社会系教育講座教員 1名
- 五 発達科学講座及び附属教育実践総合センターの教員 2名
- 六 附属学校園教員 各1名

- 2 前項第2号から第5号までの委員は、当該各講座等で互選する。

- 3 第1項第6号の委員は、当該各校長が推薦するものとする。

(「福井大学教育地域科学部学校教育課程委員会要項」, 「教育地域科学部教育実践研究実施委員会要項」より抜粋)

資料 1-1-10 地域科学課程委員会要項（抜粋）

<p>福井大学教育地域科学部地域科学課程委員会要項</p> <p>（設置）</p> <p>第1条 教育地域科学部に、福井大学教育地域科学部地域科学課程委員会（以下「委員会」という。）を置く。</p> <p>（目的）</p> <p>第2条 委員会は、地域科学課程に関する次の各号に掲げる事項について審議するとともに、その企画・運営に当たる。</p> <p>（1）地域科学課程のカリキュラムの実施・改善に関する事項</p> <p>（2）地域科学課程の学生の系選択及び履修指導等に関する事項</p> <p>（3）地域課題ワークショップ科目の実施に関する事項</p> <p>（4）地域文化課程及び地域社会課程のカリキュラムの実施、学生の履修等に関する事項</p> <p>（5）その他教育地域科学部教務学生委員会及び教育地域科学部及び大学院教育学研究科教育推進委員会からの諮問事項</p> <p>（組織）</p> <p>第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。</p> <p>（1）<u>地域政策講座及び人間文化講座の所属教員の投票により選出された、上記講座所属の教授 2名</u></p> <p>（2）<u>地域政策講座及び人間文化講座の教員 各3名</u></p> <p>2 前項第1号の委員は毎年1名ずつ改選する。</p> <p>3 第1項第2号の委員は、当該各講座で互選する。</p>

（「福井大学教育地域科学部地域科学課程委員会要項」より抜粋）

【学校・教育委員会等との連携】

- ① 教育実習を円滑かつ効果的に実施するため、学部教員、県及び市教育委員会関係者、教育実習校教員から構成される「教育実習等運営協議会」を設け、実施計画や教員養成に関する諸課題について協議し、連携の緊密化を図っており、関係者（卒業生）の期待に込めている（資料 1-1-11, 12）。

資料 1-1-11 教育実習等運営協議会要項（抜粋）

<p>福井大学教育地域科学部教育実習等運営協議会要項</p> <p>（設置）</p> <p>第1条 福井大学教育地域科学部における教育実習を円滑かつ効果的に実施するため、本学部に関係の教育委員会及び協力校等との連絡協議機関として、福井大学教育地域科学部教育実習等運営協議会（以下「協議会」という。）を置く。</p> <p>（任務）</p> <p>第2条 協議会は、教育実習等の実施計画等について協議し、連携の緊密化を図る。また、当該地域の教員養成に関する諸事情についても協議し、教員の資質の向上に努める。</p> <p>2 福井大学教育地域科学部教育実習協力校教員感謝状贈呈基準に基づき、対象者の推薦を受ける。</p> <p>（組織）</p> <p>第3条 協議会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。</p> <p>一 学部長</p> <p>二 学校教育課程委員会委員長</p> <p>三 附属学校園関係者（校園長、副校園長、副教頭）</p> <p>四 教育実習校担当教員</p> <p>五 教育実習に協力する県及び市町村教育委員会関係者</p> <p>六 教育実習協力校関係者（校長、教頭、教務主任等）</p> <p>七 その他学識経験者</p> <p>（会議）</p> <p>第4条 学部長は協議会を代表し、会務を総括する。</p> <p>第5条 協議会の運営に関し必要とする事項は、学部長が定める</p>
--

（「福井大学教育地域科学部教育実習等運営協議会要項」より抜粋）

福井大学教育地域科学部 分析項目 I

資料 1-1-12 教育実習等運営協議会開催状況（平成 27 年度）

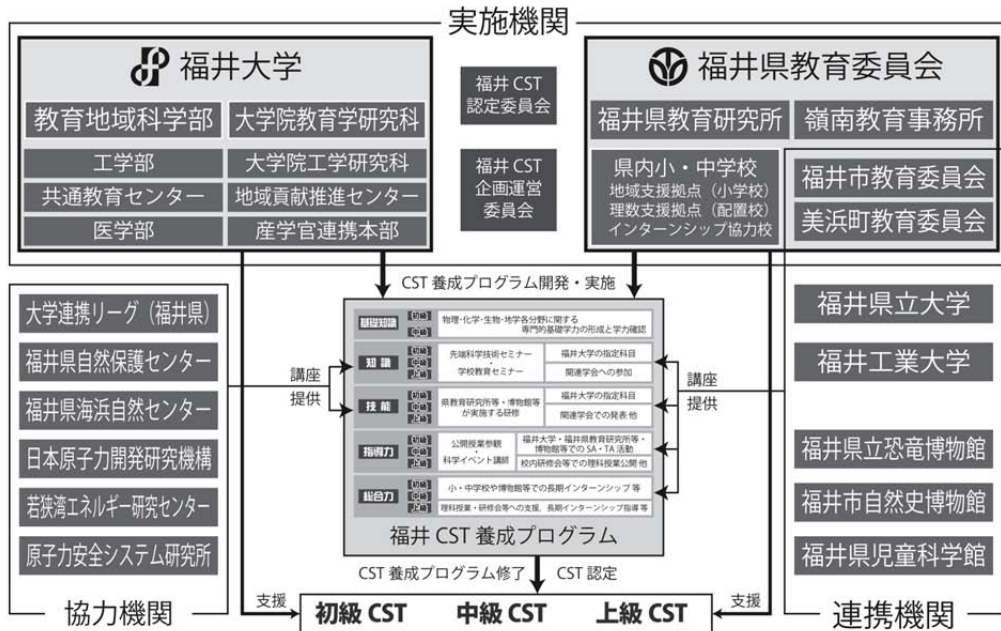
平成27年度福井大学教育地域科学部 教育実習等運営協議会（平成27年 4月20日開催）	
教育委員会・教育実習協力校出席者	福井大学教育実習関係者
福井県教育庁義務教育課 参事 福井市教育委員会 指導主事 木田小学校教諭 湊小学校教諭 日之出小学校教諭 円山小学校教頭 東藤島小学校教頭 清水西小学校教頭 明倫中学校教諭 光陽中学校教諭 明道中学校教諭 灯明寺中学校教諭 森田中学校教諭 社中学校教頭 足羽第一中学校教諭 附属小学校長 附属小学校教頭 附属小学校主幹教諭 附属中学校長 附属中学校副校長 附属中学校主幹教諭 附属特別支援学校校長 附属特別支援学校副校長 附属特別支援学校教諭 附属幼稚園長 附属幼稚園副園長 附属幼稚園教諭	教育地域科学部学部長 学校教育課程委員会委員長 教育実践研究実施委員会委員長 学校教育課程委員会副委員長 3年次教育実習校担当教員 (附属小) 担当教員 1名 (附属中) 担当教員 1名 4年次教育実習校担当教員 (木田小) 担当教員 1名 (湊小) 担当教員 1名 (日之出小) 担当教員 1名 (円山小) 担当教員 1名 (東藤島小) 担当教員 1名 (清水西小) 担当教員 1名 (明倫中) 担当教員 1名 (光陽中) 担当教員 1名 (明道中) 担当教員 1名 (灯明寺中) 担当教員 1名 (森田中) 担当教員 1名 (社中) 担当教員 1名 (足羽第一中) 担当教員 1名 (附属幼稚園) 担当教員 1名 3・4年次教育実習校担当教員（附属特別支援学校） 担当教員 1名 教務部長 教務課長 教務課課長補佐，教務課専門職員（教育実習）
協議事項	副免教育実習（協力校）の日程
①平成27年度教育実習計画について ②教育実習の手引の原稿について ③e-ポートフォリオの利用について ④教育実習成績評価票について ⑤使用教科書について ⑥実習校別事前指導について ⑦授業実習及び研究授業日程連絡について ⑧その他（事務連絡事項） ・複合機能プリンターの貸出について ・実習中の自動車通勤について	4月20日（月） 教育実習等運営協議会〔於：大学〕 5月8日（金） 「教育実習手引」原稿の提出 締切日 5月8日（金） オリエンテーション〔於：大学〕 実習校別事前指導日程連絡票の送付 実習開始までに実習校別事前指導 5月18日（月）～21日（木） 実習実施前の挨拶 出勤簿，実習日誌，プリンターなど持参 6月1日（月） 小学校教育実習開始 協力校訪問 研究授業日程連絡票の提出と参観者の連絡 6月12日（金） 小学校教育実習終了 協力校訪問 6月15日（月） 中学校教育実習開始 協力校訪問 研究授業日程連絡票の提出と参観者の連絡 6月26日（金） 中学校教育実習終了協力校へ訪問 7月7日（火） 小学校へ実施後の挨拶 7月21日（火） 中学校へ実施後の挨拶午後（成績評 価票，実習録，出勤簿，実習日誌受取り）

（事務局資料）

② 理数系教員養成拠点構築事業（以下「CST 事業」という。）を福井県教育委員会と共同で進め、学部生・大学院生のインターンシップを含む実践的な養成プログラムを実施し、好評を得る等、成果があがっている。理科教員としての高い専門性を涵養しており、教育関係者の期待に答えている。この取組は大学機関別認証評価（平成 27 年度受審）においても高く評価されている（資料 1-1-13）。

資料 1-1-13 CST (コア・サイエンスティチャー) 事業の概要

■ 福井大学と福井県教育委員会は、科学技術振興機構 (JST) の平成 21 年度「理数系教員 (コア・サイエンスティチャー: CST) 養成拠点構築事業」に採択された。事業名は「地域・学校拠点を活用する自己啓発型 CST 養成・支援システムの構築」であり、地域の核となる優れた理科教員を養成することを目的としてプログラムの開発と実施が行われてきた。この事業は平成 25 年度以降 COC 事業の一環として実施されている。



●学部生の初級CSTプログラム受講者と認定者数

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
新規受講者数	8	6	5	5	6	6
初級 CST 認定者数	-	3	4	5	5	6

※平成26年度認定者 1 名と平成27年度認定者 5 名を除く 16 名が正規教員として採用されている。

●プログラム受講者の感想（平成24年度CST業務成果報告書より抜粋）

- ・現職の先生方はとても時間に追われているように感じた。しかし、それを理由に教材研究や授業作りを怠ってはいけないと改めて感じた。現にお忙しいながらも日々努力している現職教員の姿を間近で拝見できた。教育実習では決して見るのでできなかったリアルな学校現場を知ることができた。
- ・先生方の授業を何度も見せていただきたくさん学ばせていただいた。説明の仕方ひとつにしる、ちょっとした問いかけなど、しゃべり方というものを見せていただいたと思う。また多彩な知識によって生徒たちの心をつかむという技も見ることが出来た。私もより多くの知識を蓄えておかなければならないと感じた。
- ・学級経営については、参観した学級それぞれに担任の先生の個性があり、実験の取り組み方、発表の仕方・話型などに違いが見られた。またそれらに加えて、学級のルール、掲示物、学級図書などから、それぞれの先生が重視していることが感じられた。このことから自分が担任だとしたらどのようなルールづくりや、学級目標、学級図書などを用意するのかを考え、教師になることを改めて見つめ直させられた。

（事務局資料）

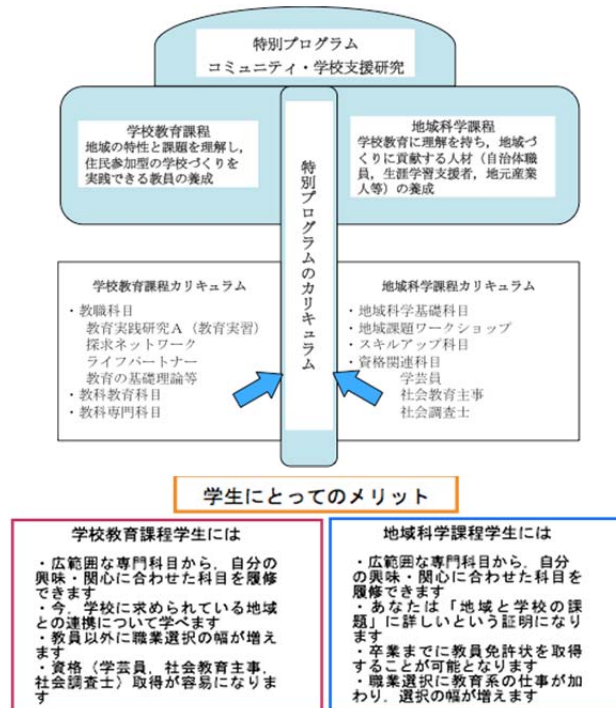
【教育プログラムとしての実施体制】

- ① 学生からの要望を受け、他課程の専門科目を系統的に履修できる特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」を平成24年度に開設した。このプログラムにより、他課程で得られる免許や資格の取得が容易になるなど、関係者（学生）の期待に応えた（資料1-1-14, 15）。

資料1-1-14 特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」

1. 「コミュニティ・学校支援研究」とは

学校教育課程と地域科学課程の学生が相互に交流できるような授業を増やして欲しいという学生からの要望を受けて、平成24年度から開始された新しい教育プログラムです。このプログラムは、両課程の良いところを合わせて、「学校と地域の課題」に専門性を持った学校教員と地域づくりに貢献できる社会人を増やしていくことを目的としています。特別プログラムへの参加募集は1年次後期に行い、2年次からプログラムの履修を開始します。プログラム履修者には、次頁以下の修了認定条件や卒業要件等が適用されます。この手引きに記載された履修上の注意や履修表をよく読んで履修に臨んで下さい。



（特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」履修手引きより抜粋）

受講者の感想（地域科学課程学生）

特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」のカリキュラムを通して、地域と学校教育現場の両者の視点でコミュニティを見ることができた。地域を作り活性化させていくためには学校が拠点となって役割を果たすことが求められ、子どもがより深く学ぶことができる教育のためには地域の協力が欠かせないことから、両者は密接に関わり合っていることが分かった。そしてそれを繋ぐ役割を果たす公民館主事、教師などのコーディネーターの存在はとても大きい。私はこのプログラムで経験したことを活かし、少しでも両者を繋ぐ役割を果たしていきたいと思う。

（平成 26 年度修了生課題研究報告書より抜粋）

（事務局資料）

資料 1-1-15 特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」受講状況（平成 28 年 3 月現在）

開始年度	学 年	課 程	所 属	希望免許・資格	取得免許・資格
平成 24 年度	卒業生	学校教育課程	美術教育サブコース2系	学芸員	学芸員
	卒業生	学校教育課程	社会系教育コース2系	学芸員	学芸員
	卒業生	学校教育課程	臨床教育科学コース3系	社会教育主事	社会教育主事
	除籍	学校教育課程	障害児教育コース5系	学芸員	（プログラム辞退）
	卒業生	地域科学課程	地域分析系	中学校社会	中学校(社会)二種免許
	卒業生	地域科学課程	生涯学習系	中学校家庭	なし(修了のみ)
	卒業生	地域科学課程	地域分析系	中学校社会	中学校(社会)二種免許
平成 25 年度	4年	地域科学課程	言語コミュニケーション系	中学校英語	なし(修了のみ)
	4年	地域科学課程	生涯学習系	小学校	なし(修了のみ)
	4年	地域科学課程	公共政策系	中学校社会	中学校(社会)二種免許
	4年	地域科学課程	生涯学習系	中学校社会	中学校(社会)二種免許
平成 26 年度	3年	地域科学課程	地域分析系	中学校社会	-
	3年	地域科学課程	公共政策系	中学校英語	-
	3年	地域科学課程	国際文化系	中学校国語	-
	3年	地域科学課程	公共政策系	中学校社会	-
平成 27 年度	2年	学校教育課程	国語教育サブコース(1系)	社会調査士	-
	2年	地域科学課程	国際文化系	中学校英語	-
	2年	地域科学課程	生涯学習系	中学校社会	-
	2年	地域科学課程	生涯学習系	中学校社会	-

（事務局資料）

- ② 地域共生プロジェクトセンター（資料 1-1-16）を核として、地域参画型の実践教育と専門教育を結合させて就業力を高める教育プログラムを実施するとともに、企業・地域体験型プログラムを展開し成果があがった（資料 1-1-17, P1-56 後掲資料 1-2-27, 28）。これらの授業支援システムとして就業力 e ポートフォリオを活用している（資料 1-1-18）。

資料 1-1-16 地域共生プロジェクトセンターの概要

- 地域科学課程では、平成22年度 就業力GP「世代間交流と地域参画活動が生み出す就業力」とそれに続く平成24年度 産業界ニーズGP「中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育力改革の強化事業」の採択を受けて「地域共生プロジェクトセンター」を設置した。

地域共生プロジェクトセンター

センターの目的

教育地域科学部における地域科学研究及び地域実践型学生教育に関わるさまざまな活動の支援を行うとともに、市民や自治体、市民社会組織等と連携して地域共生社会の形成に貢献する役割を果たします。

センターの活動内容

1. 地域実践型学生教育プログラムの推進

現在行われている地域実践型学生教育プログラムをセンターの「プロジェクト」と位置づけ、支援します。

新しい地域実践型の授業プログラムの開発を行います。

2. 地域科学研究の推進

- ・本学部教員と地域科学研究を行うための活動スペースを提供します。
- ・地域の研究・教育に対するニーズと学部教員の研究シーズとの橋渡しをします。
- ・地域の方々と共同研究プロジェクトの立ち上げを行います。

3. 地域活動団体等への活動支援と、これら団体と学部との交流促進

- ・センター施設を限定的に開放します。
- ・交流機会を創出します。

4. 以上1～3に関わる、学部からの地域への情報発信を行います。

平成22年度から始まったプロジェクト

1. 地域実践型教育プロジェクト

- ・児童館における子どもの学習活動支援実習
- ・国際交流イベントを通じて多文化共生社会の実現を目指すプロジェクト
- ・福井市東郷地区まちづくりに学ぶプロジェクト
- ・地域史料・古文書の整理・活用プロジェクト
- ・社会調査で探る地域課題
- ・学生発信！駅前プロデュース in FUKUI

2. 協働プロジェクト室利用プロジェクト

- ・地域連携ネットワークによる子育て・発達障害者支援プロジェクト
- ・学生発信！駅前プロデュース in FUKUI

施設（教育地域科学部3号館の一部を管轄）

（1F）交流スペース・作業室 （2・3F）会議室（4F）協働プロジェクト室（学部内公募による貸与）

（音楽実習室B・C）利用用途・団体、利用時間限定

組織

附属地域共生プロジェクトセンター長 教育地域科学部教員の兼任で構成（地域科学課程教員およびプロジェクトに参加する教員） 庶務は教育地域科学部支援室総務係担当

(<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/edu1/outline/symbiotic.html>)

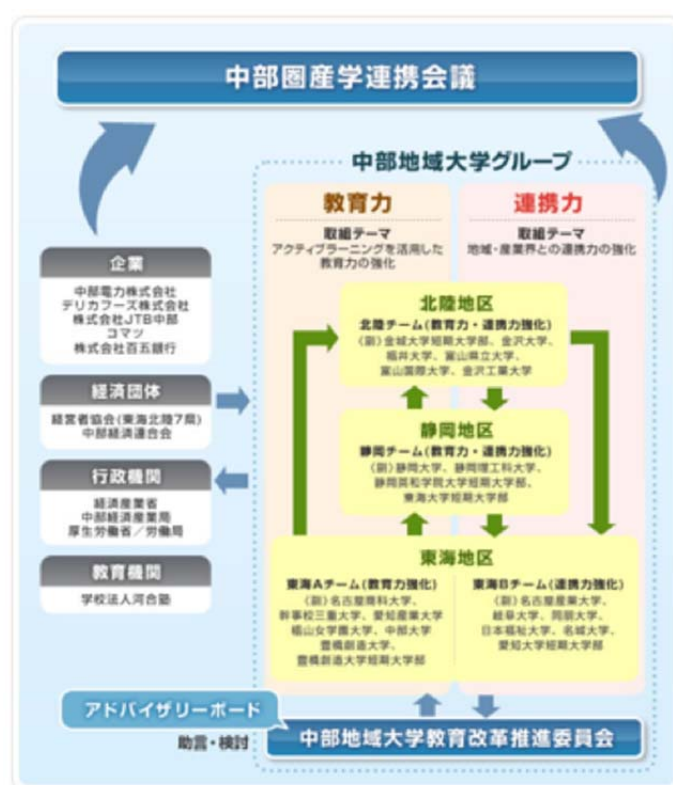
(福井大学教育地域科学部 HP より抜粋)

資料 1-1-17 産業界ニーズ GP の概要

産業界ニーズ GP 「中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育力改革の強化事業」

産業界のニーズに対応した人材育成の取組を行う大学・短期大学が地域ごとに共同して地元の企業、経済団体、地域の団体や自治体等と産学協働のための連携会議を形成して取組を実施することにより、社会的・職業的に自立し、産業界のニーズに対応した人材の育成に向けた取組の充実が図られるよう、幅広い職業人養成に比重を置く大学の機能別分化に資することを目的としている。

選定された中部圏 23 大学では、所属する全大学が、①アクティブ・ラーニングを活用した教育力の強化、②地域・産業界との連携力の強化、という 2 つのテーマを遂行し、共に成果を生み出す過程で、前に踏み出し、考え抜き、チームで働く教育改革力の強化を図る。23 大学は、地理的近接性とテーマの近接性により 4 つのチームに分かれ、チームごとに連携 FD を行い成果を共有するとともに、中部圏産学連携会議の下で中部地域大学グループが一体となって 2 つのテーマについて連携や交流を進める。福井大学は、北陸（福井・石川・富山）地区の 5 大学とともに、北陸チームを構成し、交流と討議を通じて共に教育力・連携力の強化を図る。



■ 成果の例

- ・地域科学課程において、現場ヒアリングとグループワークを中心とした授業構築と教材等の作成により、初年次学生向け教育の改善を図り、後年次の課題探究型アクティブ・ラーニングのための準備作業が充実した。
- ・研修会や交流会等を通じた中部地区の GP 参加大学や中部地区以外のアクティブ・ラーニング先進大学との交流、情報交換により、新たなアクティブ・ラーニング手法や授業カリキュラムの考え方に接し、授業改善や新カリキュラム構想の参考となる知識を得ることができた。
- ・地元の経済界との意見交換を行う機会が設定され、経済界と連携したカリキュラムについて、考え方を共有することができた。

(事務局資料)

資料 1-1-18 就業力 e ポートフォリオシステム (入力画面)

「資料提出」新規登録

活動記録追加 Windows Internet Explorer

活動記録情報を選択・入力して下さい。

分類 就職活動
 タスク 合同説明会
 優先度 S
 期間 2012年04月14日～2012年04月15日
 種別 資料提出
 タイトル
 所要時間 時間 分

活動概要

添付ファイル1 選択 取消
 添付ファイル2 選択 取消
 添付ファイル3 選択 取消
 添付ファイル4 選択 取消
 添付ファイル5 選択 取消

レビュー依頼 しない する
*「する」も選択した場合は必ず依頼先も設定して下さい。

依頼先 依頼先
 登録 閉じる

分類
 タスク
 優先度
 期間
 選択したタスクの情報が表示されます。
 種別は選択した種別が表示されます。

タイトル
 適切な名称を入力します。

所要時間
 実行した活動の所要時間を入力します。
 時間のみ、分のみ入力可能です。
 (例:1時間の場合、「1」時間だけ入力
 「0」分は入力不要)

活動概要
 実際に活動した内容を簡単に記入します。
 (文字数の制限はありません)

添付ファイル
 「選択」ボタンをクリックすると
 ファイル選択画面が表示されます。
 「参照」ボタンをクリックすると
 ファイルを選択する画面が表示されます。
 登録するファイルを選択して「開く」を
 クリックすると、ファイル選択画面の
 添付ファイルのテキスト欄にファイル名が
 挿入されます。
 「登録」ボタンをクリックすると
 活動記録追加画面の添付ファイルの
 テキスト欄にファイル名が挿入されます。

(「e ポートフォリオ学生操作マニュアル」より抜粋)

- ③ 活力ある地域社会の形成に寄与する人材の育成を目的として社会教育主事認定プログラムを実施しており、毎年 10 名前後の資格取得者を輩出し、教育関係者等の期待に応えている (資料 1-1-19)。

資料 1-1-19 社会教育主事に関する科目の単位取得証明書発行者数 (人)

課程	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
学校教育課程	2	0	0	1	0
地域科学課程	12	8	9	16	11

(事務局資料)

【国際性】

語学センターを中心として、主に共通教育における英語のカリキュラム改革を推進している。「グローバル人材育成推進事業」に基づき、平成 25 年度からは、さらに高度な実践的英語教育を実施しており学生の満足度も高く、第 1 期中期目標期間 (以下「第 1 期」という。) に比して、向上した (資料 1-1-20, P1-85 後掲資料 2-1-10)。また、「グローバル人材育成推進事業」の短期留学プログラムにより学部生の留学も増加している (資料 1-1-21, 22)。

資料 1-1-20 語学センター概要

福井大学語学センター（平成23年度設置）

語学センターの業務概要は以下のとおりです。

1. 共通教育（教養教育）の一部として実施される必修の英語カリキュラムの改革と実施
2. 学生の一般的なコミュニケーション能力の上達を図るため、4技能を統合した基本的なコミュニケーションタイプクラス（シラバスにオンライン学習を組み込み、それを活用することを含む）の担当
3. 福井大学における「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（GGJ）」事業で示されているTOEICの目標スコア達成のためのサポート
4. 福井大学の3学部・3大学院研究科における、基礎的な英語教育及び各学部・研究科に合わせたESP（English for Specific Purposes）教育開発のサポート
5. 共通教育（教養教育）担当の教員が行っている英語授業のサポート及び強化支援
6. 地域の企業・住民の方々に対する英語カリキュラムの開発及び提供
7. 留学生と日本人学生が会話、レクリエーション、アカデミックな目的のために集い合うことのできる「グローバル・ハブ」の運営
8. 学生が自律的に学習できる言語開発センター（LDC）の運営
9. 近隣の高等教育機関における学生の英語能力向上への協力

(<http://www.lc.u-fukui.ac.jp/ja/page/p3.html>)

(語学センターウェブサイトより抜粋)

資料 1-1-21 留学制度の概要

将来、専門性を武器にグローバルな環境で活躍する「グローバル人材」を目指す上で最も効果的な手段の一つとして、「海外留学」という選択肢があります。留学を通して得る様々な衝撃体験により、視野を広げ、自らの価値観を見直し、何事にもチャレンジする精神等、グローバル社会を生き抜く力を身に付けることができます。社会人になってからでは時間の制約が多く実現が難しいといわれる海外留学、福井大学での在学中に、是非機会のある限りチャレンジしてください。

☞ 福井大学の海外留学プログラム

福井大学では、大きく分けて以下の2タイプの留学機会を提供しています。

短期海外研修プログラム

- ・ 数日～3ヶ月程度
- ・ 長期休暇中に実施することがほとんど
例) 語学研修, 文化体験・交流, インターンシップ, 研究・発表など

学術交流協定校への交換留学

- ・ 半年～1年
- ・ 学期中に留学
- ・ 海外大学の学部・研究科授業を履修（+語学研修）

個人で計画、手配する留学と比べ、福井大学が提供する留学プログラムに参加する場合、以下のような様々なメリットがあります。

短期海外研修プログラム類型					
分類型	主な研修内容・目的		対象学年(目安)	語学レベル(目安)	重点的強化スキル※
0	語学研修型		全学年	全レベル	基礎的知識・教養(初・中級) コミュニケーション能力(初・中級)
1	文化体験・交流型	文化体験・交流型	学部1、2年	全レベル	基礎的知識・教養(初級)、コミュニケーション能力(初級)、異文化に対する理解・自己アイデンティティの確立(初級)
2	教養・専門型	グローバル教養型	学部2～4年	TOEIC 400点	基礎的知識・教養(中・上級)、自己学習力・問題解決能力、コミュニケーション能力(中・上級)、異文化に対する理解・自己アイデンティティの確立(中・上級)
3		専門分野型			専門分野の講義や実験への参加、関連企業への訪問等を通して専門分野への理解を深める
4	実践・研究型	実践・インターンシップ型	学部4年～ 博士前期2年	TOEIC 600点	専門的知識・能力(中・上級) 創造力、社会的責任・使命感
5		研究・発表型			学会への参加や共同研究、発表などを通して高度専門職業人としての専門性や創造性を高める

※福井大学が育成を目指すグローバル人材の必須要素

- ・基礎的知識・教養, 専門的知識・能力
- ・創造力, 自己学習力・問題解決能力, コミュニケーション能力
- ・社会的責任・使命感
- ・異文化に対する理解・自己アイデンティティの確立

(http://www.u-fukui.ac.jp/international/study_abroad/short/outline/)

(福井大学国際交流・留学ウェブサイトより抜粋)

資料 1-1-22 学生の海外派遣状況(学部生)

学生の海外派遣状況(平成22年度～平成27年度)						
年度	国名	派遣先大学名	目的	期間	人数	合計
平成22年度	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	9月	1	22
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	交換留学	9月	1	
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	留学生用プログラム	9月	1	
	韓国	東亜大学校	語学研修	1月	4	
	ドイツ	ハンブルク大学	語学研修	1月	1	
	中国	西安外国語大学	留学生用プログラム	10月	1	
	カナダ	オカナガン大学	語学研修	1月	11	
	オーストラリア	(語学学校)	語学研修	2月	1	
平成23年度	カナダ	(語学学校)	語学研修	6月	1	34
	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	9月	2	
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	交換留学	9月	2	
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	留学生用プログラム履修	9月	1	
	中国	浙江理工大学	語学研修	1月	14	
	ドイツ	ハンブルク大学	語学研修	1月	2	
	カナダ	オカナガン大学	語学研修	1月	11	
カナダ	(語学学校)	語学研修	9月	2		
平成24年度	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	10月	1	52
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	交換留学	10月	1	
	アメリカ合衆国	クレムソン大学	留学生用プログラム履修	2月	1	
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	留学生用プログラム履修	10月	1	
	韓国	東亜大学校	語学研修	1月	3	
	ドイツ	ハンブルク大学	語学研修	1月	1	
	中国	上海師範大学	その他	1月	7	
	中国	浙江理工大学	語学研修	1月	2	
	アメリカ合衆国	その他	語学研修	2月	1	
	アメリカ合衆国	ポートランド州立大学	語学研修	2月	1	
	オーストラリア	モナシュ大学	語学研修	2月	1	
	カナダ	トロント大学	語学研修	2月	2	
カナダ	オカナガン大学	語学研修	2月	14		

福井大学教育地域科学部 分析項目 I

	カナダ	ロイヤルロード大学	語学研修	1月	3	
	タイ	キングモントク大学	留学生用プログラム履修	1月	2	
	タイ	スィーパトゥム大学	語学研修	1月	2	
	タイ	タマサート大学	留学生用プログラム履修	2月	4	
	アメリカ合衆国	その他	その他	10月	1	
	その他	その他	その他	8月	1	
	その他	その他	その他	4月	1	
	カナダ	(語学学校)	語学研修	9月	2	
平成25年度	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	9月	1	43
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	交換留学	9月	2	
	アメリカ合衆国	ポートランド州立大学	語学研修	22日	3	
	アメリカ合衆国	ピッツバーグ大学	KAKEHASHI Project	12日	7	
	韓国	東亜大学校	文化体験・交流	14日	2	
	ニュージーランド	オークランド大学	語学研修	22日	4	
	タイ	スィーパトゥム大学	語学研修	15日	3	
	タイ	タマサート大学	グローバル教養	15日	4	
	カナダ	トロント大学	語学研修	29日	1	
	カナダ	オカナカン大学	語学研修	42日	14	
	アラブ首長国連邦	RAK カラーン農場	研究室派遣に動向	21日	1	
ベトナム	キングモントク大学	留学生用プログラム履修	1月	1		
平成26年度	ドイツ	ハンブルク大学	語学研修	33日	2	38
	ドイツ	ハンブルク大学	交換留学	5月	1	
	タイ	キングモントク工科大学	グローバル教養	14日	1	
	タイ	タマサート大学	グローバル教養	15日	1	
	タイ	チャンカセム・ラチャパット大学	グローバル教養	14日	4	
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	交換留学	9月	1	
	アメリカ合衆国	ポートランド州立大学	語学研修	25日	1	
	ニュージーランド	ワイカト大学	語学研修	23日	2	
	中国	浙江理工大学	文化体験・交流	14日	3	
	カナダ	トロント大学	語学研修	29日	1	
	カナダ	オカナカン大学	専門分野	44日	19	
オーストラリア	ディーキン大学	語学研修	23日	1		
平成27年度	カナダ・ウガンダ	PGIC, KGIBC, UPA	ビビタ！留学 JAPAN	9月	1	32
	韓国	東亜大学校	文化体験・交流	14日	1	
	韓国	東亜大学校	交換留学	12月	1	
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	交換留学	9月	1	
	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	9月	1	
	アメリカ合衆国	ポートランド州立大学	語学研修	25日	10	
	ニュージーランド	ワイカト大学	語学研修	23日	3	
	ドイツ	ハンブルク音楽院	ビビタ！留学 JAPAN	26月	1	
	タイ	スィーパトゥム大学	語学研修	15日	3	
	タイ	タマサート大学	グローバル教養	15日	5	
	タイ	チャンカセム・ラチャパット大学	グローバル教養	14日	3	
オーストラリア	ディーキン大学	語学研修	26日	2		

(事務局資料)

●多様な教員の確保の状況とその効果

【教育目的を実現するための教員構成】

- ① 教科教育担当教員の2名のうち1名は実務家教員を採用することを学部の方針としている。平成27年度時点で、教員養成に関わる教員88人（特命を含む）のうち24人が教職、教育行政の経験を有し（平成21年度は80人中13人）、うち2人は県教育委員会との交流人事によるものである。また、三位一体改革の一環として、附属学校教諭のうち4名が教職大学院の准教授を併任し理論と実践の融合による新たな教師教育を推進している（資料1-1-23）。

資料1-1-23 附属学校の研究科併任教員（准教授）

平成25年度文部科学省特別教育プロジェクト経費「グローバル社会に必要な教師教育の改革をスピーディーに実現する連携事業の推進」事業の採択を受け、第2期中に教員養成の新たな全国モデルとなる学部・大学院・附属学校を融合した、いわゆる「三位一体改革」を推進した。この取組の一環として、教員研修機能を強化するため実務家教員の採用と平成26年度から附属学校園教諭の教職大学院教員（准教授）併任が進められ、教職大学院と附属学校での協働の実践研究を実施、理論と実践の融合による新たな教師教育を推進した。附属学校園については平成27年度に機能的に統合し「附属学校園」となった。

附属学校併任教員

年度	附属小学校		附属中学校	附属特別支援学校
平成26年度	青木美恵*	西村美貴穂**	森田史生	天方和也
平成27年度	同上	渡邊淳子***	同上	同上

※ 併任教員は教育実習指導及びインターンシップ指導において中核的な役割を果たしている。

※ *平成28年度に附属幼稚園に異動、**管理職資格保有・平成27年度公立校教頭として転出、

***：福井県授業名人認定者

(事務局資料)

- ② 男女共同参画の推進を図るため平成21年度で20.9%であった女性教員比率を平成27年度で30.5%（専任教員）まで高めた。女子学生の比率が高い本学部の実情に対応した教育が可能である（資料1-1-24）。

資料1-1-24 女性教員の割合

年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
女性教員数（人）	20	22	25	25	25	25
女性教員比率（%）	22.2	24.4	27.8	27.5	29.1	30.5

※教育地域科学部の他、附属教育実践総合センター、附属地域共生プロジェクトセンター教員を含む

(事務局資料)

●入学者選抜方法の工夫とその効果

【入学者確保】

アドミッション・ポリシーを定めるとともに、募集要項にも選抜基本方針と評価の視点を明記している。入学者は求める学生像に概ね沿ったものであり、選抜の適切性が窺える。適切な入学希望者を確保するために、毎年広報活動を行っている（後述）（資料1-1-25～27）。

資料 1-1-25 入学者選抜の基本方針

【一般入試（前期日程）】

学校教育課程	言語教育コース	必要な基礎学力を総合的に判定するために、大学入試センター試験を課します。さらに、募集するコースに応じた教科・科目の学力を重視した学力検査を実施し、専門分野の学習に必要な知識・能力を評価します。また、芸術・保健体育教育コースでは、実技検査及び面接（口述試験を含む）を実施し、専門分野の学習に必要な知識・技能及び意欲を評価します。	
	理数教育コース		
	芸術・保健体育教育コース		音楽教育サブコース
			美術教育サブコース
	保健体育サブコース		
	生活科学教育コース		
	社会系教育コース		
	教育実践科学コース		
臨床教育科学コース			
障害児教育コース			
地域科学課程		幅広い基礎学力を総合的に判定するために、大学入試センター試験を課します。さらに、教科・科目の学力を重視した学力検査を実施し、専門分野の学習に必要な知識・能力を評価します。	

【一般入試（後期日程）】

学校教育課程	言語教育コース	必要な基礎学力を総合的に判定するために、大学入試センター試験を課します。さらに、教育、文化、科学・技術、人間の発達に関わる課題を扱った小論文を課し、専門分野の学習に必要な論理的思考力や表現力を評価します。
	生活科学教育コース	
	社会系教育コース	
	教育実践科学コース	
	臨床教育科学コース	
障害児教育コース		
地域科学課程		幅広い基礎学力を総合的に判定するために、大学入試センター試験を課します。さらに、小論文を課し、地域社会に関わる課題を提示して論述させ、思考力・分析力・表現力を総合的に評価します。

【推薦入試 I】（大学入試センター試験を課さない）

学校教育課程	芸術・保健体育教育コース	音楽教育サブコース	大学入試センター試験は免除し、面接と実技試験を課します。書類審査を含む面接では、音楽及び音楽教育に対する理解や意欲について判定を行います。実技試験では、基礎的な音楽能力を新曲視唱により、表現の技能及び音楽性を選択課題となるピアノ実技あるいはピアノと声楽の実技により行います。
		保健体育サブコース	大学入試センター試験は免除し、保健体育の学習指導の基礎となる学力および実技能力について判定します。論理的思考力や表現力等については集団面接と個人面接で評価します。また個人面接では、実技能力に関して提出書類の競技歴や調査書等の内容の確認を行うとともに目的意識と意欲の判定を行います。
	生活科学教育コース	技術科教育サブコース	大学入試センター試験は免除し、書類審査、小論文、面接(口述試験を含む)により、当サブコースで学ぶための基礎的学力と技術教育への興味・関心、及び適性を評価します。

【推薦入試Ⅱ】(大学入試センター試験を課す)

学校教育課程	言語教育コース		大学入試センター試験での得点に加えて、調査書等に基づいて面接し、目的意識や意欲、思考力、表現力等を判定します。また、これまでの言語文化活動、芸術活動についても評価します。
	理数教育コース		必要な基礎学力を総合的に判定するために、大学入試センター試験を課します。さらに、理数教育コースの学生に求められる意欲・資質・適性などをみるために面接を課し、学習に必要な能力を評価します。
	生活科学教育コース	家庭科教育サブコース	大学入試センター試験により基礎的学力を総合的に判定し、調査書、推薦書、志願理由書及び面接によって、当サブコースの専門分野の学習に必要な論理的思考力や適性を評価します。
	社会系教育コース		必要な基礎学力を総合的に判定するために、大学入試センター試験を課します。さらに、社会系教育コースで学ぶために必要な意欲、資質、適性等を重視した内容の面接(面接用資料作成を課すことがある)を実施し、専門分野の学習に必要な能力を評価します。
	教育実践科学コース		大学入試センター試験によって、学校教育課程で学ぶために必要な基礎学力を総合的に把握するとともに、面接により、教育の現代的課題に関する問題意識、論理的な思考力・表現力、そして資質・意欲等を把握し、総合的に判定を行います。
地域科学課程			幅広い基礎学力を総合的に判定するために、大学入試センター試験を課します。さらに、面接を実施し、地域の諸課題に取り組む意欲・資質・適性等を評価します。

【AO入試Ⅰ】(大学入試センター試験を課さない)

学校教育課程	芸術・保健体育教育コース	美術教育サブコース	大学入試センター試験は免除し、第1次選考では、基礎的な学力と実技の能力を、提出書類、及びデッサンによって判定します。最終選考では、造形感覚考査、提出作品、課題レポート、面接により、専門領域における実技能力、表現力、文章力、学ぶことに対する意欲、協調性等を中心に第1次選考の結果と併せて判定を行います。
	臨床教育科学コース		大学入試センター試験は免除し、第1次選考では、書類審査、小論文、面接により、また最終選考ではプレゼンテーション試験により、当コースで学ぶための基礎的学力と臨床教育に対する興味・関心、適性を評価します。
	障害児教育コース		大学入試センター試験は免除し、第1次選考では、書類審査、小論文、面接により、また最終選考ではプレゼンテーション試験により、当コースで学ぶための基礎的学力と障害児教育に対する興味・関心、適性を評価します。

(事務局資料)

資料 1-1-26 アドミッション・ポリシー

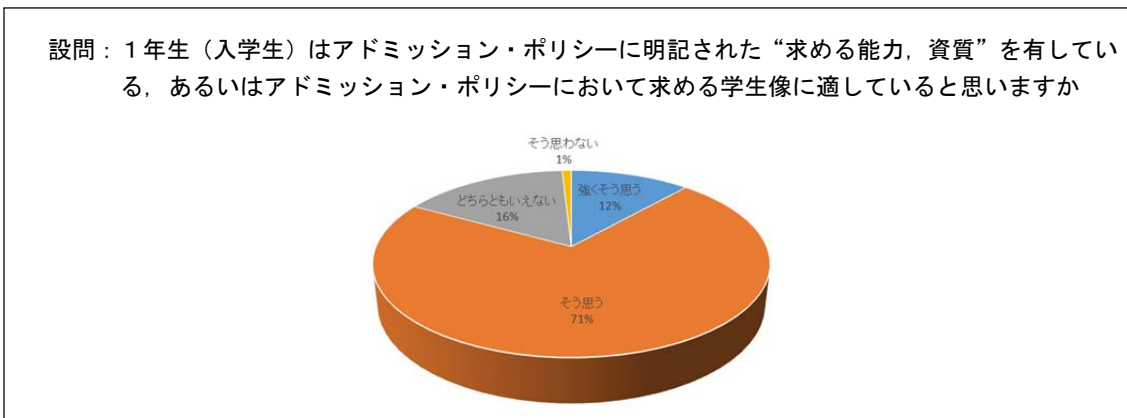
<p>■ 求める学生像</p> <p>1. 教育への情熱や地域社会への探求心を持ち、チャレンジ精神にあふれる人</p> <p>2. 子どもたちに共感し、個性的・創造的な活動に積極的な人</p>			
学校教育課程	言語教育コース	国語教育サブコース	<p>「は」と「が」の違いが説明できますか</p> <p>1. 国語教育・書写書道教育に関心があり、教師を志す人</p> <p>2. 国語学、国文学、漢文学、書道、国語教育などの専門分野を学びたい人</p> <p>3. 言語に興味を持ち、言語文化の理解や創造に意欲的な人</p>
		英語教育サブコース	<p>Open the door to the world with English !</p> <p>1. 英語教育に関心があり、真剣に教師をめざす人</p> <p>2. 英語学、英米文学、英語教育などの専門分野を学びたい人</p> <p>3. 英語が大好きで、英語コミュニケーション能力を身につけたい人</p>

理数教育コース	理科教育サブコース	理科の教育に深い理解と情熱をもつ教師をめざして 1. 理科教育に関心があり、小学校、中学校、高等学校の教師をめざす人 2. 自然科学に関する基礎知識を持ち、さらに深く学ぼうとする人 3. 理科の面白さを子どもたちに伝えるために努力を惜しまない人
	数学教育サブコース	数学の教育に深い理解と情熱をもつ教師をめざして 1. 数学教育に関心があり、小学校、中学校、高等学校の教師をめざす人 2. 数学に関する興味と知識を持ち、さらに広く深く学ぼうとする人 3. 子どもたちに数学の面白さと考える楽しさを伝える努力を惜しまない人
芸術・保健体育教育コース	音楽教育サブコース	音楽で子どもの未来と世界を明るく変えよう 1. 音楽活動が大好きで、音楽の仕組みや背景にも強い関心をもつ人 2. 音楽教育を通じた子どもたちの成長と社会の発展に貢献できる人 3. 柔らかな感性を持ち、目的達成に向けて粘り強く努力できる人
	美術教育サブコース	思いをつなぐ、心をつなぐ、それを支えるのが美術の力です 1. 美しいものに気づく感性と、旺盛な好奇心を持っている人 2. 制作に対する熱意を継続的に発揮出来る人 3. 常に外の世界に目を向け、そこから様々なことを学ぶ心を持っている人
	保健体育サブコース	スポーツの感動を子どもたちへ伝えるのは君だ！ 1. 豊かな運動経験と優れた運動技能を有する人 2. 保健体育・スポーツ事象について学び、深く考えたい人 3. 子どもたちと一緒に運動の楽しさや喜びを味わえる人
生活科学教育コース	技術科教育サブコース	生活や産業の諸課題を科学的に探求できる力量ある教師を目指して！ 1. 中学校「技術」、高等学校「工業」の免許取得を目指し、教師を志す人 2. 科学技術とその発展に強い関心があり、常に創意工夫を心がけている人 3. 電気・電子、機械、栽培、材料加工、情報などに興味・関心のある人
	家庭科教育サブコース	生活を科学的に探究できる人間性豊かな教師を目指して！ 1. 家庭科教育に関心があり、小学校、中学校、高等学校の教師を志す人 2. 21世紀の個人・家族をとりまく問題に興味・関心のある人 3. 衣食住や消費・環境について深く学び考えたい人
社会系教育コース		社会に対する好奇心を大切にしつつ、自ら学ぶ楽しみを持ち続ける人であれ 1. 社会の仕組みや成り立ちとともに、その多様性や変化に関心を持てる人 2. 社会の様々な問題に目を向け、論理的に物事を考えられる人 3. 学校の内外を問わず積極的に人々と交流し、主体的に行動できる人
教育実践科学コース		冷静な頭と温かな心で広い視野から教育実践について探究していこう！ 1. 教育学、心理学、社会学等の観点から、教育について学びたい人 2. 教育現場で起こっている諸問題について科学的に探究したい人 3. 自分自身や他者の経験を大切にしそこから学びを得ようとする人
臨床教育科学コース		気がかりな子どものかたわらにそっと寄り添える教師を！ 1. 人間や社会に対して強い関心を持ち、コミュニケーションを大事にする人 2. 教育現場で起きている諸課題に強い関心を持ち、積極的に考え行動できる人 3. 気がかりな子どもとその親に対して優しく接し、自らは厳しく律することができる人
障害児教育コース		障害を有する人たちに共感と科学を！ 1. 障害者と健常者の、人としての共通性について深く探求できる人 2. 障害者の視点に立って物事を考え、彼らとじっくり、丁寧に係わる人 3. 障害者のライフスパンを見ずえた支援に取り組める人
地域科学課程		地域に関する多様な研究と魅力的な地域づくりに取り組もう！ 1. 地域の特性と諸問題について、自ら進んで調査・分析を行う意欲のある人 2. 職業や世代、言語を異にする人々と積極的に協力し合うことができる人 3. 地域のさまざまな活動の企画や運営に率先して取り組む意欲のある人

※アドミッション・ポリシーには選抜基本方針と評価の視点（P22～23 前掲資料 1-1-25）も明記してある。

（事務局資料）

資料 1-1-27 入学者受入方法の適切性



(平成 26 年度教育地域科学部助言学生面談結果より抜粋)

【入学者選抜】

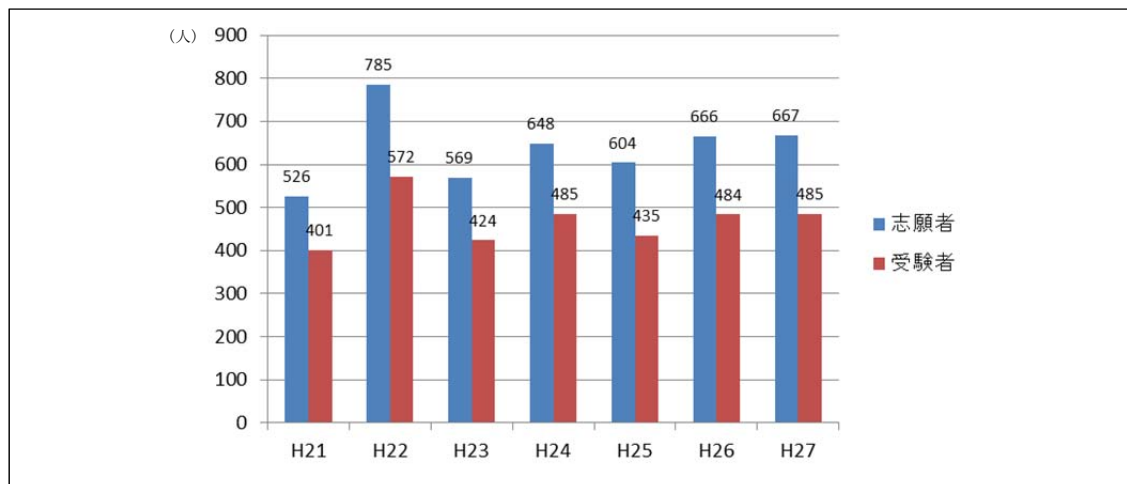
多様な入学者選抜を実施しており，それぞれの選抜は求める学生像に対応したものとなっている。志願者及び受験者数も，少子化による総進学者数が減少する中概ね増加した（資料 1-1-28，29）。

資料 1-1-28 学士課程の入学者選抜（平成 27 年度）

選抜の種類，方法等	募集人員	志願者数	受験者数
○一般入試・前期日程：センター試験と個別学力試験，実技検査，面接	86 名	244 名	209 名
・後期日程：センター試験と小論文，実技検査	32 名	348 名	166 名
○ 推薦入試Ⅰ：調査書，推薦書，志願理由書，実技検査，小論文及び面接の結果を総合判定（学校教育課程の一部コース）	6 名	27 名	27 名
○ 推薦入試Ⅱ：センター試験の成績，調査書，推薦書，志願理由書，面接の結果を総合判定	27 名	66 名	66 名
○ A0 入試Ⅰ：調査書，自己推薦書，志望理由書，実技試験，小論文，面接等を総合判定（学校教育課程の一部コース）	9 名	27 名	20 名
○ 私費外国人留学生特別選抜：個別学力検査等，日本留学試験，TOEFL の結果を総合判定	若干名	1 名	1 名

(事務局資料)

資料 1-1-29 志願者数と受験者数の年次推移（一般選抜+特別選抜）



(事務局資料)

●教員の教育力向上のための体制整備とその効果

【FD】

全学 FD に加え学部独自の FD 活動も展開している。教育力向上に資するものとしては、教育内容・教材開発研究会、ラウンドテーブル等に加え、平成 25 年度からは授業実践を省察する年度末学部 FD 研修会を実施しており、専門教育に対する学生の満足度も第 1 期に比べて向上している（資料 1-1-30～32, P1-89 後掲資料 2-1-19）。

資料 1-1-30 ファカルティ・ディベロップメント委員会要項（抜粋）

福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会要項

（設置）

第 1 教育地域科学部及び大学院教育学研究科に、本学部及び研究科教員のファカルティ・ディベロップメント（教育内容及び授業方法の改善を図るための組織的な取組をいう。以下「FD」という。）を推進するため、福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（所掌事項）

第 2 委員会は、次に掲げる事項を審議し、その実施に当たる。

- (1) FD の企画及び実施に関すること。
- (2) FD に関する情報を収集し、本学部及び研究科教員に提供すること。
- (3) FD に関する講演会及び研修会等を企画し、実施すること。
- (4) FD の自己点検・評価に関すること。
- (5) その他 FD に関すること。

（組織）

第 3 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 教授会選出の教員 2 名
- (2) 以下の各講座グループから各 1 名ずつ選出された教員 6 名
 - ① 言語教育講座及び理教教育講座
 - ② 芸術・保健体育教育講座及び生活科学教育講座
 - ③ 社会系教育講座及び発達科学講座（附属教育実践総合センターを含む。）
 - ④ 地域政策講座
 - ⑤ 人間文化講座
 - ⑥ 教育学研究科教職開発専攻

（「福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会要項」より抜粋）

資料 1-1-31 FD 活動の例

■ 全学FDの例

学生支援シンポジウム

障がい学生支援のこれから

日時：平成27年6月19日(金) 14:00~16:30
会場：福井大学アカデミーホール 【松岡キャンパスとTV会議】
対象：大学教職員、高等学校教職員、外部支援機関、保護者、一般参加費：無料(定員50名)

1. 講演「障害者差別解消法の施行に向けて」
講師 徳島文理大学 総合政策学部 教授 青野 透

2. シンポジウム
司会 保健管理センター准教授 細田 恵一
シンポジスト
「大学における合理的配慮 ～大学教員の立場から～」
教育地域科学部 教授 石井パークマン麻子
「将来の就職に向けた就職支援」
福井県発達障害児者支援センター・
スクラム福井 センター長 福田 雅介

3. 指定討論
4. 質疑

主催：保健管理センター 学生総合相談室
共催：高等教育推進センター 学部FD委員会

福井大学

【申込み・問合せ先】 学生総合相談室
TEL/FAX (0776) 27-9987
E-mail g_soudan@ed.u-fukui.ac.jp

■ 教科専門教員による教材開発セミナー及びワークショップ

教育内容・教材開発研究会

平成26年度第6回

教師の主体性や優しさって何だろう

「宮下は、教師の主体性や優しさというものをどう考えているのか」と先陣を踏んでくださった講師がいます。学習内容を自分なりに「楽」に教え、子どもが楽しく学べるように準備することが教師の優しさだと思っていた私に、「その主体性や優しさは本物から押し出されてきた人だからです。公立学校の教師や指導員としての私が、いまだに疑問ではありながらも「主体性や優しさ」についての思い込みを棄てることを求めよう。また、同僚の思い込みから抜け出す努力をする人と共に歩むことを求めよう」と励まされたの心、をどうしたか振り返ることがあります。

「自分が教えたことを『その人がしていることの中に見出して伝えている』という主体性や優しさを目指し、教育内容や教材研究をどのように行う可能性があるのか一編に書いてみましたか？」

平成26年12月19日(金) 教授会等終了後 (おおよそ17時から18時頃)

福井大学 文京キャンパス 教育系1号館 大会議室
講師：宮下 哲先生(教職開発専攻)

福井大学

■ 教員どうして授業実践の報告と検討をおこなう学部FD研修会

教育地域科学部・教育学研究科 平成27年度末FD研修会(参加者58人)

開催日時：平成28年2月19日(金) 9:00~12:00

開催場所：(全体会・分科会) 総合研究棟 I・13階大会議室

・プログラム

(1) 全体会(会場：総合研究棟 I・13階大会議室) 9:00~10:15 司会 FD委員会委員長

9:00~9:05 開会行事挨拶(学部長)

9:05~10:15 両新学部のコンセプトの説明・共有

・改組に伴い次年度から動き出す教育学部と国際地域学部について、コンセプト及び特色ある取り組みを参加者全員で理解し共有を図ることを目的とする。

①9:05~9:40 教育学部

・全体コンセプト(学部長)・新科目関係(学校教育課程教員)

②9:40~10:15 国際地域学部

・全体コンセプト(月原教員)・国際及び地域関係(教育地域科学部教員)

10:15~10:20 事務連絡

(2) 分科会(会場：総合研究棟 I 13階大会議室) 10:30~12:00

10:30~11:50 グループ・セッション

・コース・課程をまたいだ教員メンバーで小グループに分かれ、「今年の授業実践の振り返り」あるいは「次年度担当予定の新科目(目標等)」について語り聴き合い、4月以降の授業に反映できる事項について探る。

5~7名でグループ構成(FD委員は司会と記録も兼ねる。時間があれば自身の報告)。

●教員自身の実践での取り組み・成果・挑戦等をA4紙1枚程度のメモに記し、グループメンバー数コピーしてFD研修会会場に持参。

●一人あたり10~15分程度で取り組み報告+質疑応答。

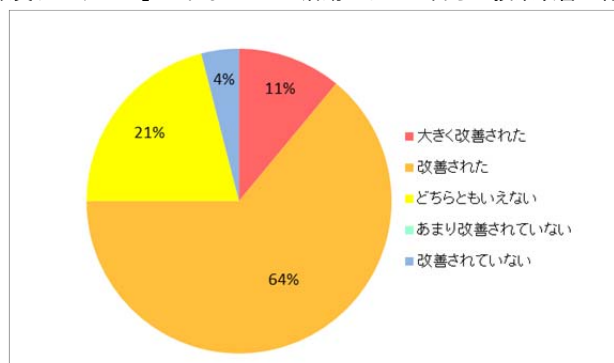
11:50~12:00 アンケート記入

■ 参加者の意見・感想等

・5名の先生方から興味深い授業紹介がなされ非常に盛り上がった。もっと説明を聞きたい、意見交換をしたい雰囲気であったが時間が足りないくらいであった。一人10分程度の発表に続き、意見・感想や質疑応答に移った。各教員の専門分野が異なるため質問が多くなってしまったが、(発表教員の授業内容・方法だけでなく、その教員の人柄や教育に対する熱意も)。反面「いかに学生に主体的な学習をするべきか」「どの程度教員が関わるべきか」という2点に関して自然とかみ合った議論ができた。

- ・学生からのコメントにどう応答するかも共通する論点となった。学生からリアクションペーパーを集め、それに一つひとつ返答している例も報告されたが、大人数授業を幾つも抱えている場合、これを継続するのは難しい。学生の声に応じているという感覚を学生に持ってもらうための様々な工夫が出された。学生が切実感をもって学べない内容を扱うときの工夫も共通する話題となった。これは一つの授業内で解決できる問題でないこともあるため、科目を跨いだカリキュラム全体としてどう調整を図るかという点が課題である。
- ・今回の議論で、アクティブ・ラーニングを成功させるためには、特に教員の意識的な関わり方が重要であり、そのためには教員のスキルアップや教員同士の連携を密にする、といった教員全体の資質を高めることの必要性について認識することができた。また学習領域や所属を越えた教員同士でも連携を行うことで、アクティブ・ラーニングをより学術的なものに発展させられるのではないかと感じた。(平成 26 年度 FD 活動報告書より抜粋)

【教員アンケート】これまでの FD 活動によって自らの授業改善が行われたか

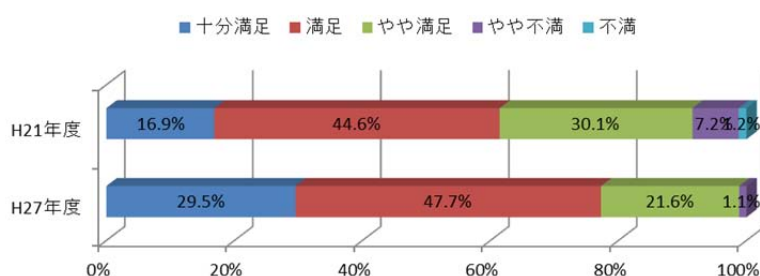


(平成 27 年度 FD 活動報告書より抜粋)

(事務局資料)

資料 1-1-32 学部教育に対する学生の評価

設問：専門の教育全般について、あなたはどの程度満足していますか。



※第 1 期末と比較して第 2 期末では学生の満足度（十分満足～やや満足と回答した割合）は 7.3%向上している。特に、十分満足～満足と回答した割合は 15.8%向上している。

(平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋)

【教員評価】

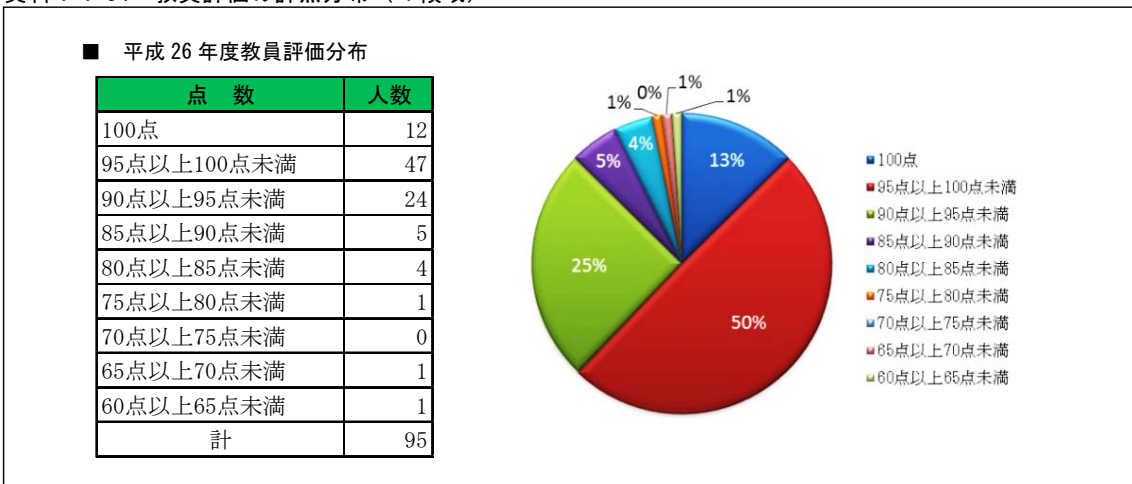
3年毎に教育，研究等を評価領域として教員個人評価を実施している。学部の評価基準に則り各領域の取組状況・実績について学部長評価・学長評価を行い，結果を処遇改善に反映させている。教員の評価点は概ね高く，これは教員が十分な教育活動を実施していることの証左である（資料 1-1-33， 34）。

資料 1-1-33 教員評価に係わる基本方針（抜粋）

教育地域科学部及び教育学研究科教員評価に関わる基本方針	
第 1	個人評価の目的については，国立大学法人福井大学教員評価規程第 2 条の「評価の目的」に従う。
第 2	個人の評価結果案は，被評価教員のみには通知される。ただし，学部長・研究科長及び福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科評価委員会（以下「学部及び研究科評価委員会」という。）委員は，各教員の評価結果案を知ることができる。
第 3	収集されたデータについて，新たに別目的に使用しようとする場合には，その都度，可否を教授会・研究科委員会に諮る。
第 4	評価対象者は，教授，准教授，講師，助教及び助手であって，評価対象期間中に 1 年以上在籍している者とする。ただし，助教及び助手の評価項目等については別に定める。
第 5	評価は，3 年毎に実施し，評価を実施する年度の前年度以前の 3 年間（本学における在職期間が 3 年未満の場合は，当該期間）を対象とする。
第 6	教員の活動実績等の総合データベースへの個人データ入力は，各教員自身で行うこととし，毎年，前年 4 月から 3 月までのデータを 9 月末までに入力する。
第 7	評価の領域は，①教育活動，②研究活動（芸術領域を含む），③社会貢献・国際交流活動，④管理運営活動の 4 領域とする。
第 8	4 評価領域の評価点の合計は 100 点とする。4 領域とも上限は 20 点として，残りの 20 点分については以下のとおり個別の領域に加配することで処理するものとする。 イ) 加配は，4 評価領域のうち評価対象教員が選択した 2 領域について，それぞれ点数を 1.5 倍することにより行う。 ロ) 加配の選択にあたっては，4 評価領域のうち①教育活動と②研究活動（芸術領域を含む）のいずれか一つを，必ず選択するものとする。この 2 領域を共に加配領域とすることは構わない。
第 9	本学部及び本研究科における教員の個人評価の基本は，自己評価に基づく同僚評価であり，その実施は福井大学教育地域科学部及び教育学研究科教員評価実施委員会（以下「学部及び研究科教員評価実施委員会」という。）が行う。
第 10	学部及び研究科教員評価実施委員会は，各教員の自己評価及び必要な評価資料に基づき，各評価領域の活動状況の評価を行い，評価原案を作成する。 2 学部及び研究科教員評価実施委員会は，前項の各教員の評価原案を学部長・研究科長に提出する。
第 11	学部長・研究科長は，第 10 で提出された評価原案に基づき，学部及び研究科評価委員会の議を経て，評価結果案を作成する。 2 学部長・研究科長は，各教員の評価結果案を，当該教員に通知する。
3	学部長・研究科長は，全学の評価委員会に対し，評価実施年度の 2 月末日までに評価結果案を提出する。
第 12	評価基準，評価項目その他教員評価実施のための具体的な方法については，学部及び研究科評価委員会が定める。

(事務局資料)

資料 1-1-34 教員評価の評点分布（4 領域）



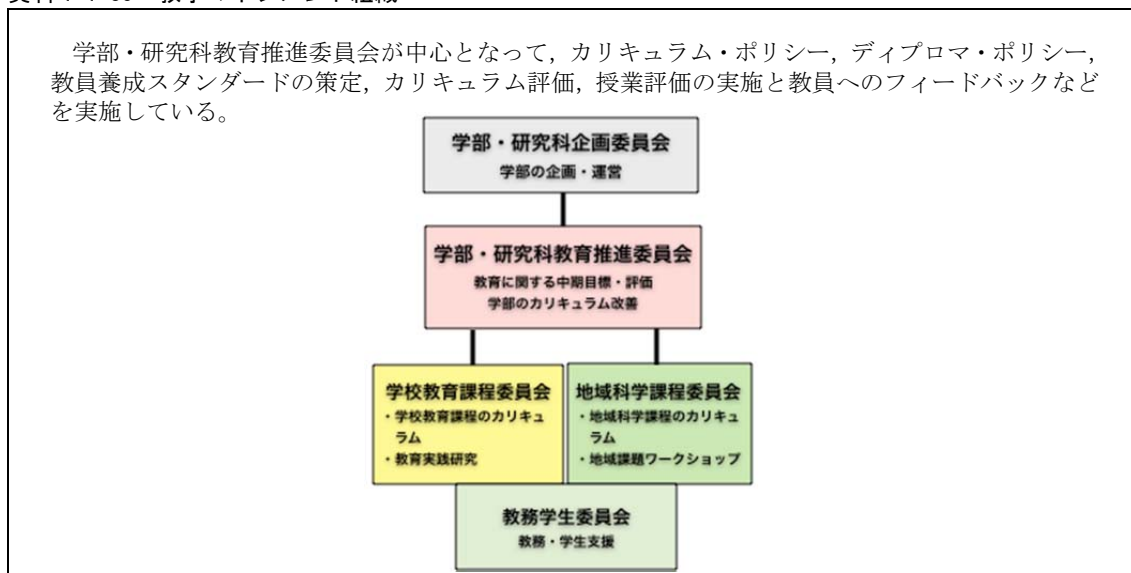
(事務局資料)

●教育プログラムの質保証・質向上のための工夫とその効果

【教学マネジメント体制】

教学マネジメントについては教育推進委員会が両課程委員会、教務学生委員会を所掌し、教育プログラム改善のための体制とPDCAサイクルを確立している(資料1-1-35, 36)。

資料 1-1-35 教学マネジメント組織



(事務局資料)

資料 1-1-36 学部・研究科教育推進委員会要項 (抜粋)

福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科教育推進委員会要項

(設置)

第1 教育地域科学部及び大学院教育学研究科に、福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科教育推進委員会 (以下「委員会」という。) を置く。

(目的)

第2 委員会は、学部及び大学院の教育活動に関し、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 教育活動に関する中期目標の設定と評価に関する事項
- (2) 教育関連 GP の申請に関わる事項
- (3) カリキュラム改善に関する事項
- (4) 学部卒業生及び大学院修了生のフォローアップに関する事項
- (5) 競争的配分経費に関わる教育プロジェクトの審査に関する事項
- (6) その他学部・大学院の教育活動に関する学部長からの諮問事項

(組織)

第3 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 教育担当の副学部長
- (2) 教育学研究科専攻・領域主任会副委員長 1名
- (3) 教育学研究科教職開発専攻専任教員 1名
- (4) 教育地域科学部教務学生委員会委員長
- (5) 教育地域科学部学校教育課程委員会委員長
- (6) 教育地域科学部地域科学課程委員会委員長
- (7) 教育地域科学部及び大学院教育学研究科就職委員会委員長
- (8) 教授会選出の教員 4名
- (9) 前各号に掲げる者以外の教育地域科学部の教員 若干名

2 前項第3号の委員は、選出母体の委員の互選による。

(任期)

第4 第3第1項第8号及び第9号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

2 委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5 委員会に委員長を置く。

2 委員長は、第3第1項第1号の委員をもって充てる。

(「福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科教育推進委員会要項」より抜粋)

【外部評価・第三者評価】

学部・研究科評価委員会が中心となって5年毎に外部評価を実施している。第2期では平成25年度に外部評価を実施し、本学部の取組について評価委員から高い評価を得た(資料1-1-37, 38)。

資料1-1-37 外部評価実施委員会要項

福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価実施要項	
(趣旨)	
第1	この要項は、本学部及び研究科を対象として実施する外部評価（以下「外部評価」という。）に関し必要な事項を定める。 (外部評価委員会)
第2	本学部及び研究科に福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価委員会（以下「外部評価委員会」という。）を置く。 2 外部評価委員会は、学外有識者若干名をもって組織する。 3 委員は、教授会の議に基づき、学部長が委嘱する。 4 委員の任期は、当該年度の末日までとする。 5 外部評価委員会に委員長を置く。 6 委員長は、委員の互選による。 (外部評価準備委員会)
第3	本学部及び研究科に、外部評価の実施に関する必要な事項を検討するため、福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価準備委員会（以下「準備委員会」という。）を置く。 2 準備委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。 (1) 学部選出の評議員 1名 (2) 附属学校担当の副学部長 (3) 福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科評価委員会（以下「評価委員会」という。）委員（ただし、学部長及び前各号の委員以外の評議員、副学部長を除く。） (4) 本学部及び研究科の教員 5名 3 前項第1号及び第4号の委員は、学部長が指名する。 4 第2項第4号の委員の任期は、1年とし、再任を妨げない。 5 準備委員会に委員長を置き、第2項第1号の委員をもって充てる。 6 準備委員会に副委員長を置き、委員の中から学部長が指名する。 (外部評価実行委員会)
第4	本学部及び研究科に、準備委員会が検討した事項に基づき外部評価を円滑に実施するため、福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価実行委員会（以下「実行委員会」という。）を置く。 2 実行委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。 (1) 評価委員会委員及び第3第2項第4号の委員 (2) 前号の委員が所属する講座（発達科学講座には附属教育実践総合センターを含む）以外の講座から推薦された教員 各1名 (3) 前各号に掲げる者以外の教育地域科学部の教職員 若干名 3 前項第3号の委員は、学部長が指名する。 4 第2項第2号及び第3号の委員の任期は、1年とし、再任を妨げない。 5 実行委員会に委員長を置き、学部長をもって充てる。

(「福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価実施要項」より抜粋)

資料 1-1-38 平成 25 年度外部評価結果

- 外部評価委員会開催日：平成 25 年 12 月 26 日
- 外部評価委員：松田 正久（愛知教育大学学長，日本教育大学協会会長）：委員長
 岩田 康之（東京学芸大学教授）
 小和田 和義（福井県教育庁企画幹-学校教育）
 西川 満（福井県高等学校長協会会長-武生高等学校長）
 青山 庸（福応会会長：同窓会組織）
 山下 裕己（福井新聞社論説主幹）

●福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価結果【委員長総括】

教育地域科学部・教育学研究科（教職大学院含む）のいずれの教育組織も，単位教育組織ごとに，アドミッション・カリキュラム・ディプロマの各ポリシーを定め，それにふさわしい学生を確保，教育し，社会に送り出していることは，福井大学の就職率が全国一であることから高く評価できる。

教育地域科学部の学校教育課程においては，「地域と連携した教育環境を組織できる教員の養成」，地域科学課程では「地域社会の持続的な発展，地域文化の創造，共生と自治の実現に資する人材の養成」を目的に，それぞれの課程委員会を中心に，学生第一のきめ細かい運営がなされている。

特に学校教育課程における 2011 年度から試行，2012 年度から本格運用が始まった「教員養成スタンダード」は，「教師になるにあたって目指すべき目標」と「目標に向かって行われた学習の成果を評価するための基準」を明確化したもので，「地域の視点からの学校教育」「実践科目群をコアに協働的な実践を促すカリキュラム構成」「世代継承サイクルによる学びの継承」などを特徴に共通スタンダードとコース別スタンダードから構成され，注目に値する。

（中略：研究科の評価）

学部入学者は，県内出身者が約 85%程度と地域依存性が高く，また卒業生の多くが教員だけでなく地域科学課程を中心に様々な職業を通じて県内に就職している現状がある。これは，まさに，多くの教員養成系大学・学部の特徴ともいえるもので，地域人材の育成に果たしている役割は極めて大きいと判断できる。

また，学部・大学院担当教員 102 人のうち女性教員が 28 人と，その割合は 27.5%となっており，男女共同参画の点から高く評価できる。

（外部評価報告書（平成 26 年 3 月）より抜粋）

【関係者の意見聴取】

- ① 全学的取組以外に，学部独自に関係者の意見聴取を定期的実施している。また平成 26 年度より卒業生アンケートを実施し，それらの結果に基づいて教育の改善・向上を図っている（資料 1-1-39）。

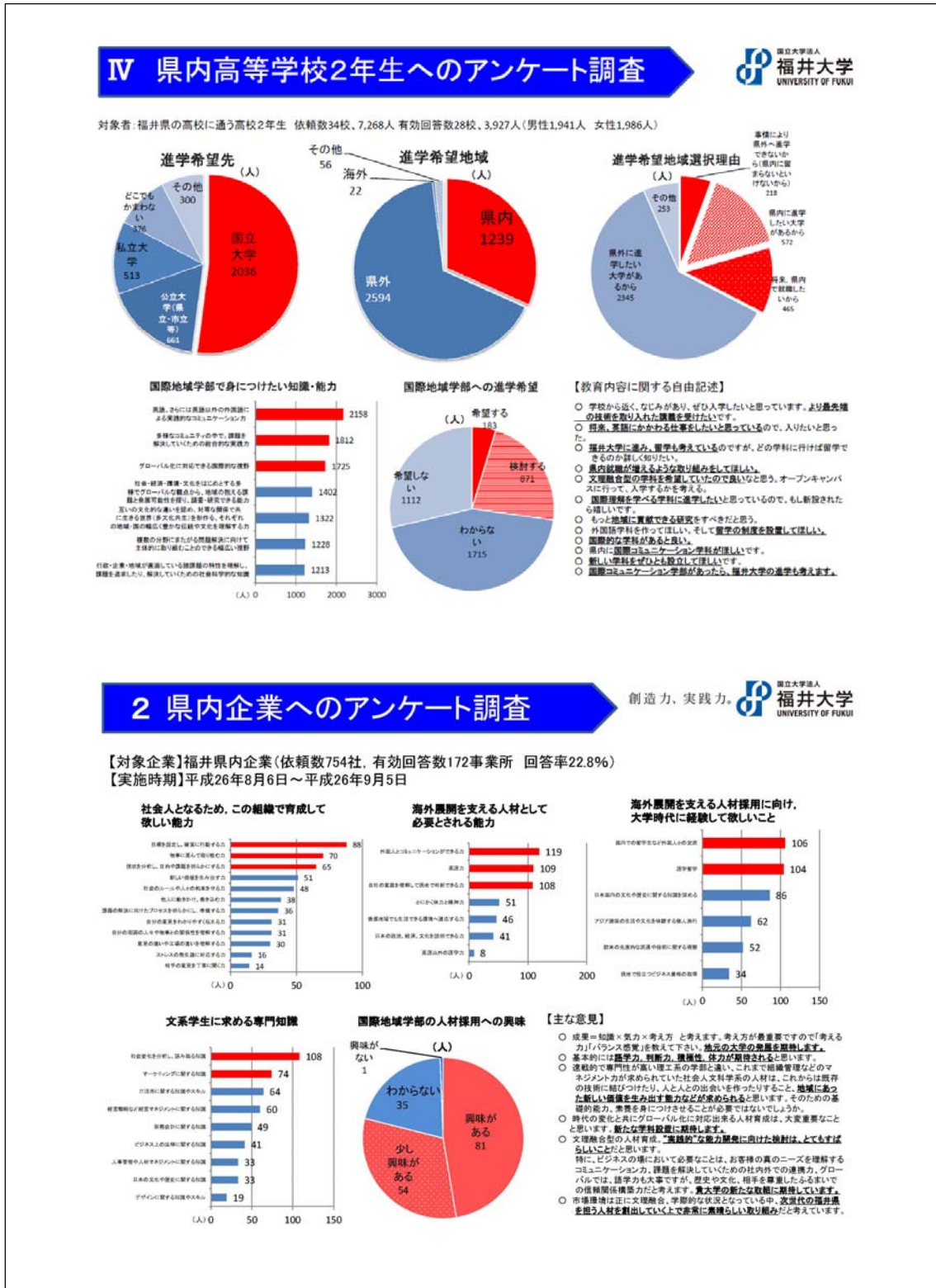
資料 1-1-39 関係者の意見聴取例

- ・学生生活実態調査（平成 22 年度，平成 25 年度：高等教育推進センター）
- ・カリキュラム評価アンケート（平成 24 年度～：高等教育推進センター）
- ・福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査（平成 22，26，27 年度）
- ・授業評価アンケート（学部・研究科教育推進委員会）
 「講義」に関するアンケート：平成 22 年度後期・平成 23 年度前期，
 平成 25 年度後期・平成 26 年度前期
 「演習・実験・実習および実技」に関するアンケート：平成 23 年度後期・平成 24 年度前期，
 平成 26 年度後期・平成 27 年度前期
- ・学部卒業生アンケート（平成 26 年度：学部教務学生委員会）
- ・卒業生に関する企業訪問調査（平成 20 年度～：学部就職委員会）
- ・学部長と学生との懇談会（平成 21 年度～：学部長，副学部長，教務学生委員会）
- ・学校教育課程・地域科学課程学生アンケート（平成 22 年度）→両課程学生アンケートの結果を受けて特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」を平成 24 年度に開設した（P1-13 前掲資料 1-1-14）。

（事務局資料）

② 関係者ニーズを調査する目的で県内高等学校2年生、県内企業及び自治体に対して意見聴取を実施した。その結果は新学部「国際地域学部」の平成28年度設置に繋がった(資料1-1-40, 41)。なお、平成28年度の新学部設置に伴い、地域科学課程は廃止され、教育地域科学部は教員養成に特化した学部として「教育学部」(学校教育課程)と改称し、組織も再編して新たな一步を踏み出すこととなった。

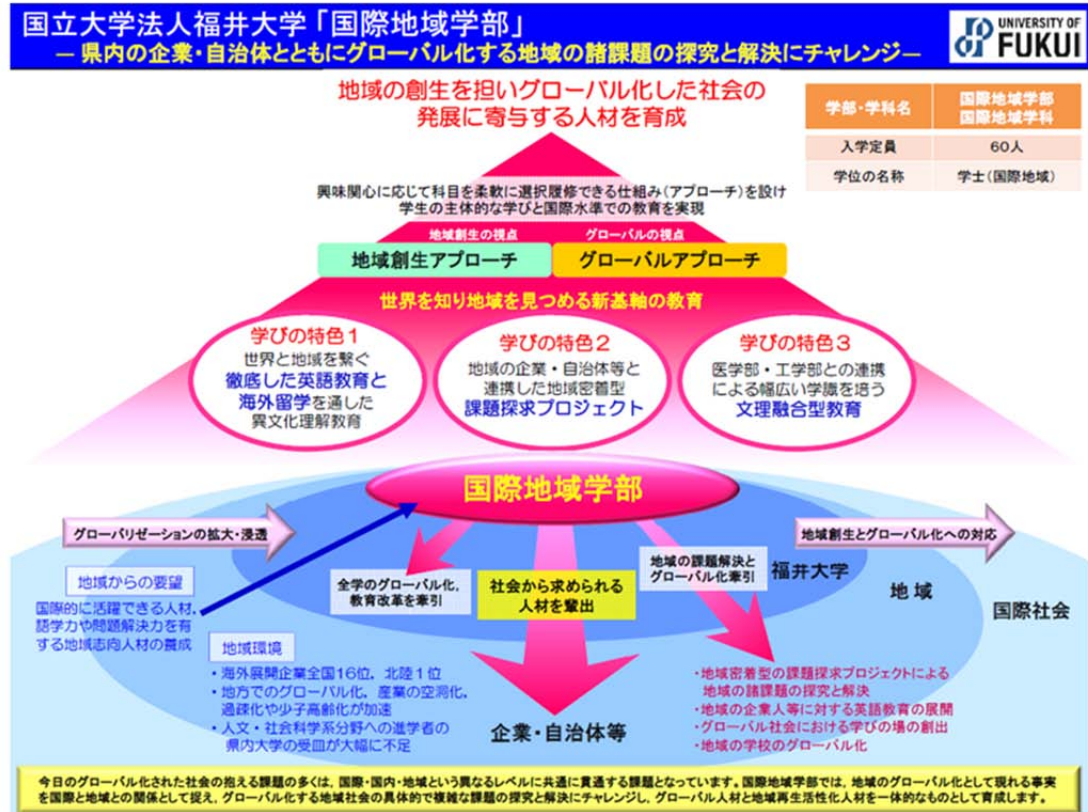
資料1-1-40 国際地域学部の設置に繋がった関係者意見(平成26年度)



(事務局資料)

資料 1-1-41 「国際地域学部」および「教育学部」の概要

■ 国際地域学部



■ 教育学部

新しい学校教育を担う教員を養成するため、
 教育地域科学部を教育学部へ

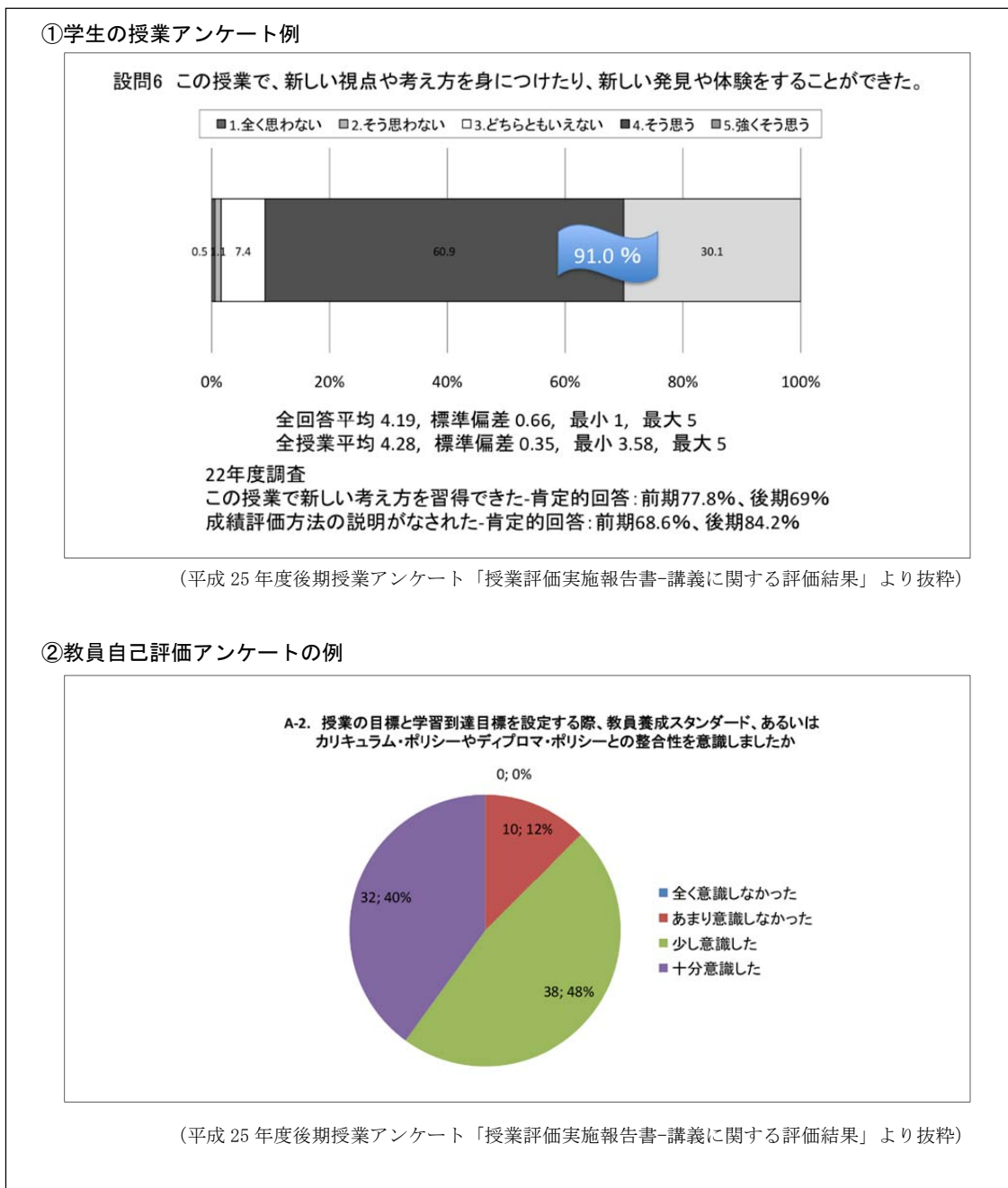


(事務局資料)

【教育改善の取組】

講義と演習・実験・実習および実技に関する授業アンケートを毎年交互に実施しており、平成 25 年度からは学生の評価を基に授業改善のための教員自己評価アンケートも実施している（資料 1-1-42）。また、年度末 FD 研修会では、教員同士で「授業実践の省察」を行い授業改善に結びつけている（P1-27 前掲資料 1-1-31）。

資料 1-1-42 授業アンケート及び教員自己評価アンケートの例



(事務局資料)

【教育情報の発信】

大学説明会，高校訪問説明会，出前授業等の活動を通して学部の教育内容等についての情報を関係者に提供するとともに，HP 上で学部教育と入試に関する情報を随時公開している（資料 1-1-43，P1-74 後掲資料 1-2-53）。

資料 1-1-43 高校訪問説明会実施状況（平成 27 年度）

実施日	高校名	教育地域科学部教員	帯同学生	参加者数(高校生)
6.27	丹南高校	学校教育 1，地域科学 1	美術 3 年	13
7.2	金津高校	学校教育 1，地域科学 1	障害児 3 年	37
7.7	武生高校	学校教育 1，地域科学 1	社会系 3 年	65
7.7	若狭高校	学校教育 1，地域科学 1	—	24
7.8	羽水高校	学校教育 1，地域科学 1	理数 4 年	30
7.8	美方高校	学校教育 1，地域科学 1	言語 3 年	21
7.9	丸岡高校	学校教育 1，地域科学 1	体育 4 年	14
7.9	武生東高校	学校教育 1，地域科学 1	理数 3 年	31
7.11	敦賀気比高校	学校教育 1，地域科学 1	障害児 3 年	14
7.14	三国高校	学校教育 1，地域科学 1	実践 3 年	5
7.14	藤島高校	学校教育 1，地域科学 1	生活 3 年	14
7.15	大野高校	学校教育 1，地域科学 1	言語 3 年	19
7.22	北陸高校	学校教育 1，地域科学 1	技術 4 年	12
7.23	仁愛女子高校	学校教育 1，地域科学 1	音楽 4 年	56
7.23	鯖江高校	学校教育 1，地域科学 1	生活 1 年	15
7.28	高志高校	学校教育 1，地域科学 1	理数 4 年	33
7.30	福井高校	学校教育 1，地域科学 1	理数 3 年	24
8.1	勝山高校	学校教育 1，地域科学 1	臨床 4 年	13
10.17	敦賀高校	学校教育 1，地域科学 1	保体 4 年	23

(事務局資料)

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

① 教育体制及び教員組織編成の工夫

教育目的の達成のため、適切な教員構成¹⁾に加えて、実務経験のある教員の配置が進められている。教員養成に関わる教員のうち、教職や教育行政の経験を有する教員の割合が増加した(平成21年度16%から平成27年度27%)。三位一体改革により、附属学校園と連携した運営が行われており、平成26年度より附属学校教員の4名が教職大学院准教授を併任し、実習指導や教員研修等において中核的な役割を果たしている²⁾。また男女共同参画の推進を図るため、第2期中に女性教員の比率を高めた(平成21年度20.9%から平成27年度30.5%)³⁾。

¹⁾ 資料 1-1-4 : 教員組織 P1-5

²⁾ 資料 1-1-23 : 附属学校の研究科併任教員(准教授) P1-21

³⁾ 資料 1-1-24 : 女性教員の割合 P1-21

② 教育委員会等との連携

「教育実習等運営協議会」を設け、県及び市教育委員会、教育実習協力校との連携の緊密化を図っている³⁾。また、県教育委員会と連携した福井大学コア・サイエンス・ティーチャー(CST)養成プログラムを実施しており⁴⁾、教育関係者の期待に応えている。この取組は大学機関別認証評価で高く評価された。

³⁾ 資料 1-1-11 : 教育実習等運営協議会要項(抜粋) P1-10

資料 1-1-12 : 教育実習等運営協議会開催状況(平成27年度) P1-11

⁴⁾ 資料 1-1-13 : CST(コア・サイエンスティーチャー)事業の概要 P1-12

③ 教育プログラムとしての実勢体制

就業力GP、産業界ニーズGPの採択を受けて地域共生プロジェクトセンターを設置し、地域参画型の実践教育と専門教育を繋ぎ就業力を高める教育プログラムを展開し成果を上げており⁵⁾、特に企業等関係者の期待に応えている。

学生の要望を基に両課程にまたがる特別プログラムを開始し、学校教育課程の学生は学芸員等の資格、地域科学課程の学生は教員免許の取得が容易になり学生の期待に応えている⁶⁾。また、県内高校生および自治体のニーズを調査し、地域科学課程をベースとする新学部「国際地域学部」の設置(平成28年度)に繋がった⁷⁾。

⁵⁾ 資料 1-1-16 : 地域共生プロジェクトセンターの概要 P1-15

資料 1-1-17 : 産業界ニーズGP概要 P1-16

⁶⁾ 資料 1-1-14 : 特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」 P1-13

資料 1-1-15 : 特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」受講状況(平成28年3月現在)
P1-14

⁷⁾ 資料 1-1-40 : 国際地域学部の設置に繋がった関係者意見(平成26年度) P1-33

④ 教員の教育力向上のための体制整備

FDや評価関連委員会を中心に学部を挙げて教育改善に継続的に取り組む体制が構築されており⁸⁾、平成25年度からは教員の授業実践を省察する「年度末FD研修会」を実施している⁹⁾。専門教育に対する学部生の評価も向上している¹⁰⁾。

⁸⁾ 資料 1-1-30 : ファカルティ・ディベロップメント委員会要項(抜粋) P1-26

⁹⁾ 資料 1-1-31 : FD活動の例 P1-27

¹⁰⁾ 資料 1-1-32 : 学部教育に対する学生の評価 P1-28

観点 教育内容・方法

(観点に係る状況)

●体系的な教育課程の編成状況

【養成する能力等の明示】

学部規程に基づき課程ごとにディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーを定め複数の媒体で学生に周知している(資料 1-2-1~4)。教員養成については県教委と協議の上「教員養成スタンダード」を策定した。スタンダードには教師に求められる能力等が示され教育関係者の期待に応える内容となっており、平成 25 年度に実施された外部評価において、高い評価を得ている(資料 1-2-5)。

資料 1-2-1 学部規程(抜粋)

福井大学教育地域科学部規程	
第 1 章 教育課程	
第 1 条 福井大学教育地域科学部(以下「本学部」という。)に学校教育課程, 地域科学課程を置く。	
2 福井大学学則第 2 条 3 項に規定する, 本学部における人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的は, 次のとおりである。	
(1) 学部	本学部は, 実践的力量のある学校教員の養成, 地域の創造と発展に貢献できる人材の養成を目的とし, 教育科学や地域科学の学際的総合的な研究成果によって広く社会の発展に寄与することを使命とする。
(2) 課程	学校教育課程 子どもたちの探求心, 思考力及び創造性を育み, 地域と連携した教育環境を組織できる教員の養成を目的とする。 地域科学課程 地域社会の持続可能な発展, 地域文化の創造, 共生と自治の実現に資する人材の養成を目的とし, 地域の諸課題について実践的な教育研究を行う。

(「福井大学教育地域科学部規程」より抜粋)

資料 1-2-2 ディプロマ・ポリシー

学部全体	<p>教育地域科学部は, 子どもへの深い理解と子どもの主体的な学びを組織する専門的・実践的な力量を備えた学校教員の養成, ならびに, 地域の特性と課題に対する関心と意欲をもち, 地域や国際社会の発展に貢献できる人材の養成を目的としている。この目的を達成するために策定された教育課程の方針と編成のもとで, 修業年限以上在籍し, 所定の単位を修得した者に対して, 学位を授与する。</p> <p style="text-align: center;">http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/diploma-curriculum-course.pdf</p>
学校教育課程	<p>修業年限以上在学し, かつ教育課程編成の方針に基づいて編成された科目を共通教育規程及び教育地域科学部規程において定められた所定の単位数を修得することにより, 教科や教職の専門的・実践的力量ならびに公教育の担い手としての自覚と責任感を備え, 以下のような能力を身につけたと認められる者に対して学位を授与する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 生涯にわたって学び続ける基盤 地域や学校における実践コミュニティの一員として, また学びの専門職として, グローバルな視点から地域に参画し, 他者と協働し, 生涯にわたって学び続ける基盤を有する。 協働的な学習や問題解決的な学習の指導と評価 子どもたちが活動的で協働的な学習, また教科の特性に応じた問題解決的な学習を行うことができるように, 教育の目的・目標・内容, 及び子どもの発達や地域社会に関する知識に基づいて指導と評価の計画を立てることができる。 教科における重要な概念と探究の方法に関する理解 子どもたちの知的・社会的・個性的な発達を支援するために, 各教科・領域における重要な概念と固有の探究方法, 及びそれらを子どもたちが学習していくプロセスに関して深い理解を有する。 民主的な集団活動の運営方法と道徳的な指導 子どもたちが平和で民主的な社会のあり方と人間らしい生き方について理解を深められるように, 集団活動の運営方法や道徳的な指導を行うことができる。

<p>学校教育課程</p>	<p>5. 子どもたちの個性に応じた成長と発達への支援 子どもたち一人ひとりの個性に応じた成長と発達を支援することができる。</p> <p>6. 学識形成の足跡を示す学習成果の公開 上記1から5の能力を裏付けるために、学識が形成された足跡を示す学習成果をまとめて、公開することができる。</p> <p>http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/diploma-curriculum-course.pdf</p>
<p>地域科学課程</p>	<p>修業年限以上在学し、かつ、教育課程編成の方針に基づいて編成された科目を共通教育規程及び教育地域科学部規程において定められた所定の単位数修得することによって、以下のような関心、意欲、知識及び能力を身につけた者に対して、学位を授与する。</p> <p>1. 国内外の地域の特性と課題に対する関心と意欲 一定の地理的空間において教育、文化、政治、経済、環境等の様々な要素が絡み合った複合的システムとして捉えられる「地域」について、その国内外の具体例が持っている特性と課題を解明し、実践的な活動を通して地域社会の発展や文化の創造に貢献することに高い関心を持ち、そのような貢献に向けて積極的に取り組む意欲を有する。</p> <p>2. 実践的課題解決力 外国語、調査・データ分析、行政運営等に関する基礎的実践的なスキルを有し、適切な情報収集・分析能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を用いてチームワークの中でリーダーシップを発揮しつつ課題の解決に取り組むことができる。</p> <p>3. 多角的・学際的基礎知識と個別専門知識の修得 地域の特性と課題を多角的・学際的な視点から探求するための幅広い基礎的知識を有するとともに、各系で目標とされている次のような専門的知識と能力を有する。</p> <p>【地域分析系】 地理学、社会学、生活経営学、情報技術、統計学等の専門知識を有し、社会調査法や統計分析を活用して地域社会や住民生活の諸課題を解明できる。</p> <p>【公共政策系】 法学・政治学、経済学・経営学等の専門知識を有し、地域政策の立案・遂行や地域社会あるいは企業組織等の合理的・効果的運営に寄与できる基礎的能力を有する。</p> <p>【環境マネジメント系】 環境マネジメント、生物学、環境科学等の専門知識を有し、様々な環境問題を理解する能力を持つ。</p> <p>【生涯学習系】 社会教育学、博物館学、芸術学、心理学、生理学、運動学等の専門知識を有し、市民の生涯学習の企画・運営および支援に寄与することができる。</p> <p>【国際文化系】 英米文化、ドイツ文化、フランス文化、中国文化等の専門知識を有し、複眼的視座から多様な価値観に根差した地域の文化的特性を理解することができる。</p> <p>【言語コミュニケーション系】 英語、中国語を中心に言語やコミュニケーション等の専門知識を有し、英語、中国語の実践的運用能力を用いて、各地域の特性の解明や多文化共生社会に寄与することができる。</p> <p>4. 変化が激しい時代状況に即した柔軟な思考力と課題対応力 多様な地域社会や文化のあり方について理解し、答えの得難い課題にも専門的知識・能力を生かして取り組むことができる。また、それを通じて地域間・文化間の共生や自治の実現等に貢献できる。</p> <p>http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/diploma-curriculum-course.pdf</p>

(事務局資料)

資料 1-2-3 カリキュラム・ポリシー

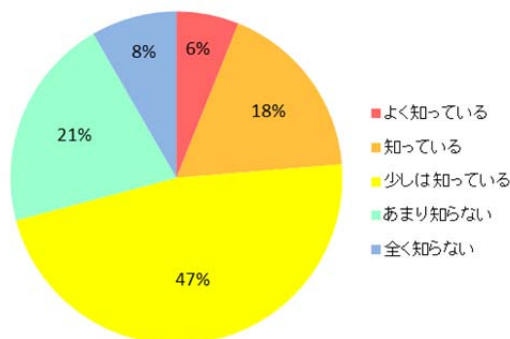
<p>学部全体</p>	<p>教育地域科学部は、学校教員の養成を目指す学校教育課程、ならびに、地域づくりの担い手の育成を目指す地域科学課程の二つの教育課程から構成される。学校教育課程にあつては、子どもの探究心、思考力および創造性を育み、地域と連携した教育環境を組織するための専門的能力を育成する。また、地域科学課程にあつては、地域社会の発展、地域文化の創造、ならびに、共生と自治の実現に貢献できる能力を身につけさせ、地域の諸課題を実践的に解決できる能力を育成する。</p> <p>以上を実現するため、次のような両課程共通の特徴をもった教育課程を編成する。</p> <p>1. 専門性と総合性を高めるためのバランスのとれた科目構成</p> <p>2. 各専門領域における課題を探究する力および問題解決能力の修得</p> <p>3. 各専門領域における実践的な能力の修得</p> <p>4. 協働的な活動、学習を通して民主的に合意を形成する力の修得</p> <p>5. 学習成果の共有による世代継承サイクルの構築</p> <p>さらに、2つの課程別のカリキュラムに加えて、両課程をつなげた教育プログラムを編成し、地域の特性と課題を理解して住民参加型の学校づくりを実践できる教員、ならびに学校教育に理解をもち、地域づくりに貢献する人材の養成をめざす。</p> <p>http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/diploma-curriculum-course.pdf</p>
-------------	---

<p>学校教育課程</p>	<p>学校教育課程では、公教育の担い手として多様な人々と協働しながら、学識に支えられた指導力により子どもたちの学習・発達を支援し、生涯にわたって学び続ける教師を育てるために、以下のような特徴を有する教育課程を編成し、実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 幅広い専門領域を担う教員組織と新しいカリキュラム開発 多様な教科内容、教科教育、教育学を専門とするスタッフが協働し、近年の重要課題を視野に入れた授業やカリキュラムを開発する。また、地域での実践を土台にグローバルな視点から学校教育のあり方について考えることを支援する。 実践と省察をコアに持つ協働的な学習 子どもたちの成長と発達を促す実践への参加と省察を繰り返す、専門職的な学習経験をコアに据えて、各科目の学習内容を理解させる。初年次より教師に求められる専門職的な学習を積み重ね、1年生から4年生までの学生が協働して学習することにより、その学習が深められるよう支援する。 教科の専門性を高めるバランスある科目配置 教科固有の内容と探究方法を、講義・演習・実験・実習・実技・卒業研究等を通して、バランスよく学習させる。また、教科が成立する根拠や意義、歴史的背景について理解を深め、教科の目的・目標・内容について考えさせる。各科目においては、カリキュラム・単元・授業・教材・活動の開発と提案・実践や、様々な記録に基づいた事例研究を行い、科目における学習内容を統合的に理解させる。 学習成果に支えられた世代継承サイクル 学識形成の足跡を示す学びの履歴・成果をまとめることにより、先行の世代の経験から学び、後の世代に自身の経験を伝えるサイクルを組み込んだ学習コミュニティを育成する。 専門職としての力量形成に資する評価 専門職としての教師の能力を多面的に評価するために、協働的な探究のプロセスやそこで育まれた能力を把握し、目標と学習そのものを問い直す学習個人誌を作成し、公開させる。 http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/diploma-curriculum-course.pdf
<p>地域科学課程</p>	<p>実践的力量のある学校教員及び地域の創造と発展に貢献できる人材を養成するとともに、教育学や地域科学の学際的総合的な研究成果によって広く社会の発展に寄与するという本学部の教育研究上の目的・理念に基づき、地域の特性と課題について実践的な教育を行う。この基本方針の下に、以下のような特徴を有する教育課程を編成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 総合的専門性と個別専門知識獲得のためのバランスある科目配置 多岐にわたる地域の特性と課題を理解することにより、個別の研究テーマをより深く分析できる能力を身につけさせるため、地域課題ワークショップ科目、スキルアップ科目、地域科学基礎科目、専門科目のバランスある配置に留意したカリキュラム編成を行い、総合的専門性と個別専門知識の連動的・複合的な修得を可能にする。 関心分野・課題の明確化 地域の特性と課題への問題意識と実践的な問題解決能力の基礎を培うため、1、2年次に、地域科学基礎科目、地域課題ワークショップ I 及び II を履修させることにより、学生の関心分野・探求課題を明確にさせる。 実践的スキルの修得 スキルアップ科目（英語コミュニケーション科目、調査・データ分析科目、行政運営基礎科目）を1、2年次において履修させることにより、高学年次における専門的な課題探求に欠かせない知的ツールを身につけさせるとともに、卒業後に様々な職場で必要とされる基礎的・実践的なスキルの修得を可能にする。 ワークショップ科目による課題探求・解決力の獲得 課題探求・解決のためのグループ・ワークと参加者全体での省察を行う「地域課題ワークショップ科目 I～IV」を各学年に段階的に配置し、専門科目の履修と連動させることにより、地域社会における様々な活動分野で求められる協働での課題探求・問題解決能力、情報収集・分析能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の修得を可能にする。 多面的履修と研究テーマの深化 2年次後期以降は6つの専門分野（系）のいずれかに所属させる。それと同時に、個々の学生の探求課題に即して他の系の専門科目も併せて履修することを可能にし、そのような多面的履修を含む各系における学習の成果を卒業研究へと結実させる。 グローバルな視野を有する高度専門職業人として備えるべき能力の育成 地域社会の発展、地域文化の創造、ならびに、共生と自治の実現に貢献できる能力を身につけさせるという教育課程の中で、国際的な交流を視野にいれた高度専門職業人として、地域社会の発展や地域文化の創造をグローバルな視野により捉え得るように配慮する。特に、人間としての自らの責務を果たし、他者に配慮しながらチームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担い、倫理的、社会的能力の修得を可能にする。 http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/diploma-curriculum-course.pdf

(事務局資料)

資料 1-2-4 カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの周知状況

設問:カリキュラム・ポリシー(教育課程の編成・実施の方針)とディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)は、それぞれカリキュラムの目的・内容・編成方針と卒業までに皆さんが達成すべき学修目標を明示したものです。これらはホームページ、シラバス、学生便覧などに掲載されています。あなたはカリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーを知っていますか？



教育地域科学部 回答数：443

(平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋)

資料 1-2-5 教員養成スタンダード

■教員養成スタンダード

平成 24 年度 福井大学教育地域科学部 教員養成スタンダード 共通

【A】本学部の教員が共有すべき使命

1. 公教育の担い手としての自覚を持った教師を育てる。
2. 子どもが社会の一員として主体的に生きていけるよう、子どもの学習・発達を支援する教師を育てる。
3. 多様な人々と協働し、社会と教育の受け手に対する応答責任を果たす教師を育てる。
4. 生涯にわたって省察的に学び続ける教師を育てる。
5. 学識に支えられた指導力を発揮する教師を育てる。

↓↑

【B】本学部の学生が目指すべき目標

1. 学習の専門職として生涯にわたって学び続ける土台を築く。
2. 実践コミュニティの一員として、他者と協働し、他者の実践事例や自身の実践から学ぶ。
3. 活動的で協働的な学習を子どもたちが行うことができるよう、適切な学習環境・生活環境をつくりだす。
4. 教科の特性に応じた問題解決的な学習を子どもたちが行うことができるよう、教科固有の様々な方略を理解し利用する。
5. 担当する教科における重要な概念と探究の方法を子どもたちが学習していくプロセスを理解しており、子どもたちがそれらを学ぶことで知的・社会的・個性的に発達するよう支援する。
6. 担当する教科における重要な概念と探究の方法を理解しており、子どもたちがそれらを意味あるものとして学ぶことができるような経験をつくりだす。
7. 教育目的・教育内容・子ども・地域社会に関する知識に基づいて、教科と教科外活動における長年に渡る探究的な学習を支える指導と評価の計画を立てる。
8. 子どもたちが民主的に集団活動を運営する実践的能力を発達させるよう、様々な文化的活動や集団活動をつくりだす。
9. 子どもたちが生き方を模索するプロセスを理解しており、平和で民主的な社会のあり方と人間らしい生き方について理解を深め、個性的に発達するよう支援する。

↓↑

【C】上記の目標を実現するために学生に保障すべき学習経験

1. 子どもたちの成長と発達を促す実践に参加する。
2. 実践と省察を繰り返す専門職的な学習のプロセスを経験する。
3. 教科が成立する根拠や意義、歴史的背景について理解を深め、教科の目的・目標・内容について考えさせる。
4. 教育内容と方法、および人間の学習・発達や教育の理念・歴史・制度に関する理解を統合的に発達させるために、総合的事例に基づいた事例研究を行う。

5. カリキュラム・単元・授業・学級集団の運営方法に関して実践的に理解を深めるために、カリキュラム・単元・授業・教材・活動の開発と提案を行う。
6. 学識を形成し発達の足跡を残していくために、学習個人誌を作成する。
7. 後の世代を育てることを通して発達し、また自身の発達を後の世代に伝えるために、世代継承サイクルを組み込んだ学習コミュニティを実現する。
8. 民主的な集団活動の運営が求められる協働的实践を行う。
9. 子どもの個別的なニーズを把握し受容的に関わる実践を行う。

↓↑

【D】 証拠となる学習成果物

方向性	内容
1. 自身の実践・学習を組織化する。 2. 物語（ナラティブ・ストーリー）として構成する。 3. 時間軸を意識し、過去・現在・未来の時間の流れに自己を位置付ける。 4. 専門職的实践のビジョンを意識する。	1. 過去の自身の学習個人誌 2. 教育実習の記録、各教科および道徳の指導案・教材・子どもの作品 3. 介護等体験の記録 4. 探求ネットワークの報告書 5. ライフパートナーの報告書 6. 学生からの評価、コメントに関するもの 7. 教職員からの評価、コメントに関するもの 8. 文献・論文リスト

↓↑

【E】 学習成果物の評価規準

1. 追究の継続性	専門職としての目標の達成のために、実践研究に十分に継続して従事してきている。
2. 追究の協働性	他者の追究を跡付け、理解し、援助してきている。
3. 追究するテーマの質	重要なテーマを追究し、深い分析を行い、学術的根拠に基づいた説得的な議論を展開できている。
4. 視野の広がり	広い視野のもとに自身の追究のテーマを位置付けている。
5. 追究の遂行性	実践と省察をデザインし、実行し、報告している。
6. 追究の重層性	1年時から積み重ねてきた報告群が証拠として含まれ、それらに随時言及しながら、自身の学習をストーリーとして描いている。
7. 専門職的实践のビジョン	自身の生涯に渡るライフコースを展望し、個性的な発達を遂げようとしていることがわかる内容になっている。

※共通スタンダードの他にコース別スタンダードもある。

■ 教員養成スタンダード策定の経緯

このスタンダードの策定に向けては、まず平成21年度に、教員養成スタンダードとして示す能力の定義・選択とその記述・評価の方法に関する研究が行われた。ここで先行事例の検討が行われる中で、能力概念の再定義とスタンダードの記述方法の提案が行われた（八田幸恵・遠藤貴広「福井大学教育地域科学部『教員養成スタンダード』の策定に向けて」八田幸恵〔研究代表〕『教師に必要な能力の定義・選択とその記述・評価の方法に関する研究—福井大学「教員養成スタンダード」の策定に向けて—』実践的な教師教育研究拠点の基盤形成 平成21年度福井大学教育地域科学部重点研究 研究成果報告書、2010年、1-11頁）。

実際の教員養成スタンダードの策定にあたっては、まず平成21年7月24日開催の教授会において、「『教員養成スタンダード』策定の基本方針」として次の3点が了承された。

- ① 細分化された行動目標の列記は避ける。
⇒スタンダードをコンピテンシーの形で記述する。
- ② 態度に直接的に働きかけることを避ける。
⇒使命感・倫理観等を講義で教え込むようなことはしない。
- ③ 現行のカリキュラムを活かす。
⇒現行の「教育実践研究」の延長線上に「教職実践演習」を位置づける。

その後、この方針のもとに教員養成スタンダード策定作業が進められた。そして、平成22年3月5日開催の教授会において、カリキュラム改革検討WG作業部会から提案された「福井大学『教員養成スタンダード』の策定方針（案）について」が「教員養成スタンダード 共通」の素案とともに了承された。さらに、この策定方針に基づき、平成22年度1年間かけて「教員養成スタンダード 共通」と「教員養成スタンダード 領域別」（各コース・サブコース別）を策定する作業が行われ、平成23年3月4日開催の教授会において「平成23年度版 教員養成スタンダード」が承認された。このスタンダードに基づいて平成23年度新設の「教職実践演習」の授業が行われた。

ただし「平成23年度版 教員養成スタンダード」は本学部内で策定した試行的なものだった。そこで平成23年度には、「教職実践演習」の試行実施と並行して、平成23年9月14日と平成24年2月8日に「福井県教育委員会と福井大学との教員養成スタンダード合同協議会」が行われた。この協議を経て平成24年度から本格運用されたのが、「福井大学教育地域科学部 教員養成スタンダード」である。

なお、この合同協議会では、教員養成スタンダードについての協議のみならず、これから教師に求められる能

力、その能力形成を支える教員養成カリキュラムと教員研修の在り方、それを実現するための教育委員会と大学との連携の在り方について、活発な議論が行われた。

これに加えて平成 23 年度末から、本学部の教員養成課程のカリキュラム評価に資する資料として、4 年生作成の個人最終報告書「教職学習個人誌」を載せた冊子『学びの専門職をめざして—教職課程の意味を問い直す学生たち—(教職実践演習実施報告書)』を公開している。「教員養成を担う大学の教職員が学生に何を提供したのか」ではなく、「教職課程で学生は何を学んだのか」「その意味を学生はどのように把握しているのか」を学生自身の言葉で示した同書は、「学びの履歴」「学習経験の総体」としてのカリキュラムの具体的な中身を示す証拠資料となる。それは、採用試験合格率や授業評価アンケート集計結果といった形で示される数値では把握できない質のものである。その意味で同書は、教員養成カリキュラムの「真正の評価 (authentic assessment)」に向けた取り組みに資する基礎資料となる。

(外部評価報告書 (平成 26 年 3 月) より抜粋)

■ 教員養成スタンダードに対する外部評価

福井大学教育地域科学部・教育学研究科の外部評価結果について (抜粋)

松田正久委員長

学校教育課程における 2011 年度から試行、2012 年度から本格運用が始まった「教員養成スタンダード」は、「教師になるにあたって目指すべき目標」と「目標に向かって行われた学習の成果を評価するための基準」を明確化したもので、「地域の視点からの学校教育」「実践科目群をコアに協同的な実践を促すカリキュラム構成」「世代継承サイクルによる学びの継承」などを特徴に共通スタンダードとコース別スタンダードから構成され、注目に値する。

(外部評価報告書 (平成 26 年 3 月) より抜粋)

(事務局資料)

【カリキュラムの体系性】

教育課程はカリキュラム・ポリシーに基づいて編成され、ディプロマ・ポリシーに示した資質・能力を涵養するために必要な授業科目を適切に配置している。教育課程は共通教育科目と専門科目から編成され、専門科目についてはカリキュラム・マップを作成公表し教育課程の体系性を明確にしている (資料 1-2-6, 7)。

資料 1-2-6 教育課程の体系性と特徴

教育課程の体系性と特徴

学校教育課程では、小学校・中学校の教員を区別なく包括的に養成。教科に関わる「言語教育」「理教教育」「芸術・保健体育教育」「生活科学教育」「社会系教育」の 5 コース、さらに子どもたちの発達と教育に直接関わる「教育実践科学」「臨床教育科学」「障害児教育」の 3 コースの計 8 コースからなる。これらいずれかのコースに属し、専門教科の学習に加え、小中学校 9 年間を見通したカリキュラム編成能力、「いじめ」、「不登校」、「科学技術離れ」など、今日の教育の抱えるさまざまな課題に対処する教員養成をめざしている。

実践教育の一つとして、学生による不登校児童援助活動 (ライフパートナー事業) や教育実習の前後を通したきめこまかな指導 (放課後チューター事業)、子どもたちの共同探求のコミュニティを支える探求ネットワーク事業など、教師としての実践的力量形成をめざしたプロジェクトにも取り組んでいる。

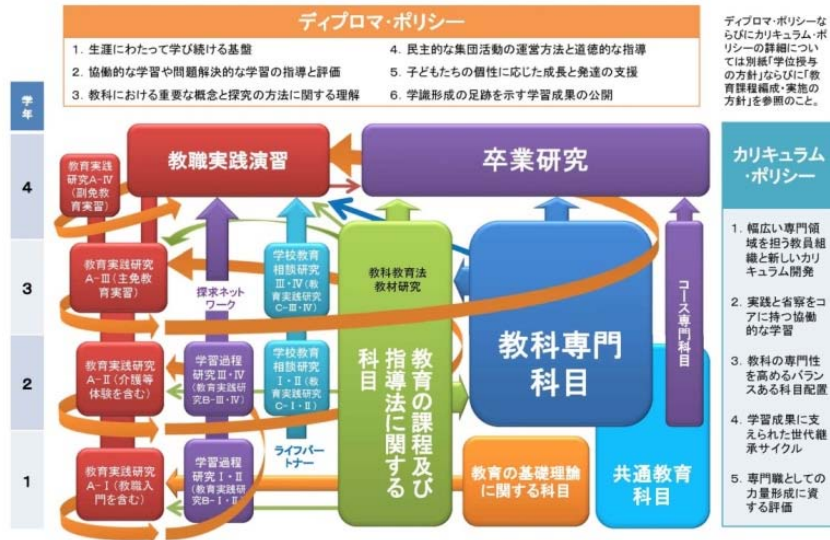
地域科学課程では、「地域分析系」「公共政策系」「環境マネジメント系」「生涯学習系」「国際文化系」「言語コミュニケーション系」の 6 つの系のいずれかに所属し、それぞれの系で開講される専門分野の授業科と学生の問題意識の醸成と課題探求・解決能力、コミュニケーション能力等の育成を目指す「地域課題ワークショップ科目」の「応用」「総合」を中心に履修し、快適な生活環境の形成、地域文化の創造、多様な人々の共生、産業の活性化や自治体行政のレベルアップなど、これからの地域社会が抱える諸課題を的確に分析し、解決の方向を見出すとともに、みずから地域の人たちと力をあわせた解決に取り組む能力と専門知識を備えた人材養成を目指している。

(事務局資料)

資料 1-2-7 カリキュラム・マップ

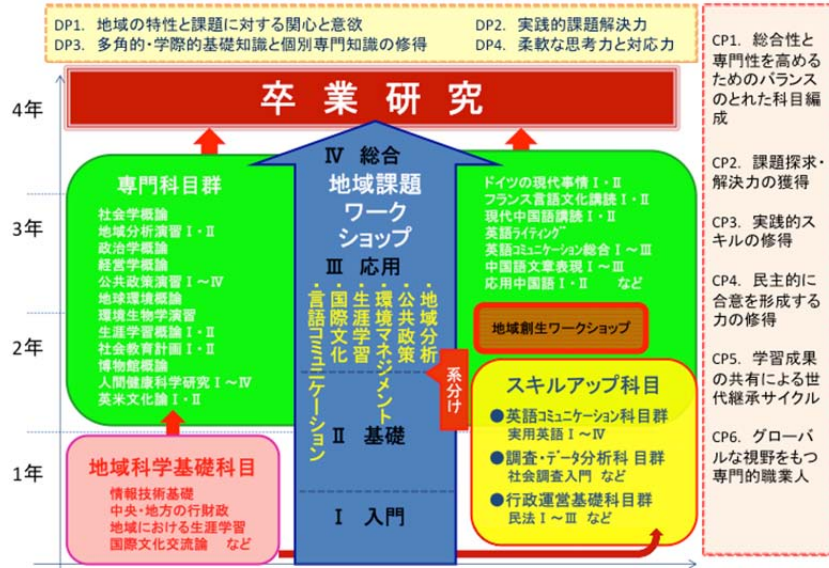
■ 学校教育課程

福井大学 教育地域科学部 学校教育課程 カリキュラム・マップ



■ 地域科学課程

福井大学 教育地域科学部 地域科学課程 カリキュラム・マップ

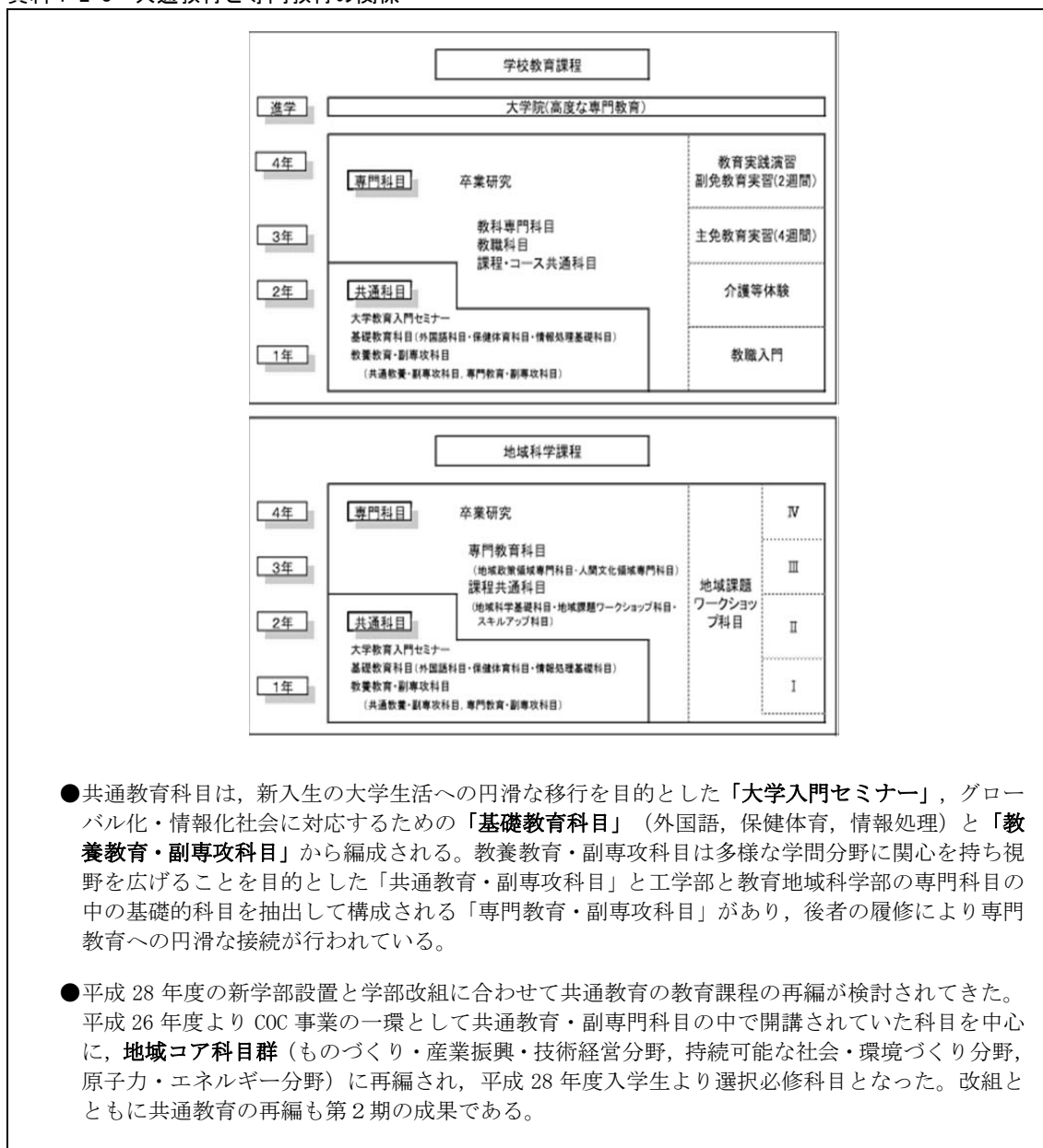


(事務局資料)

【専門教育と教養教育の関わり】

幅広い教養を涵養するための「共通教育科目」の履修が卒業要件となっている。専門教育では各専門分野における知識・技能を習得するために必要な科目を適切に配置している。共通教育、専門教育ともに学生の満足度は高く、第1期に比べて向上している（資料 1-2-8～12, P1-28 前掲資料 1-1-32）。

資料 1-2-8 共通教育と専門教育の関係



●共通教育科目は、新入生の大学生活への円滑な移行を目的とした「大学入門セミナー」、グローバル化・情報化社会に対応するための「基礎教育科目」（外国語、保健体育、情報処理）と「教養教育・副専攻科目」から編成される。教養教育・副専攻科目は多様な学問分野に関心を持ち視野を広げることを目的とした「共通教育・副専攻科目」と工学部と教育地域科学部の専門科目の中の基礎的科目を抽出して構成される「専門教育・副専攻科目」があり、後者の履修により専門教育への円滑な接続が行われている。

●平成 28 年度の新学部設置と学部改組に合わせて共通教育の教育課程の再編が検討されてきた。平成 26 年度より COC 事業の一環として共通教育・副専門科目の中で開講されていた科目を中心に、地域コア科目群（ものづくり・産業振興・技術経営分野、持続可能な社会・環境づくり分野、原子力・エネルギー分野）に再編され、平成 28 年度入学生より選択必修科目となった。改組とともに共通教育の再編も第 2 期の成果である。

(事務局資料)

資料 1-2-9 共通教育の授業内容の例

科目区分名	授業科目名	授業内容の概要等
大学教育入門 セミナー	大学教育入門 セミナー	高校から大学への勉学方法の転換を助け、大学生生活を健康かつ有意義に過ごすことのできるよう、学生諸君が自ら考え行動するためのヒントを与えると共に、大学生生活の初期の段階で、所属する学部の課程・学科などの担当教員による指導を受け、自らの専門分野を自覚し、また、より広い視野をもって大学での勉学ができるようになることを目的とする。
基礎教育科目	情報処理基礎	情報処理に関する基礎的知識と技術を習得することを目的とする。受講生はネットワークに接続されたパーソナルコンピュータに実際に触れながら、メールやウェブサイト閲覧、文書作成、描画、表計算などのアプリケーションソフトの利用を学ぶ。また、Web による受講登録・図書館蔵書検索・就職情報閲覧など学内外で必要な基礎技術の習得も目指す。
教養教育・ 副専攻科目	批判的思考を 伸ばす	現在およびこれからの社会では、自分で考え自分で問題を解決していく能力が強く求められている。試験などの場面だけでなく、生活の中で実際に行動し、実際の問題場面で問題が解決できる実践的な能力が求められているのである。このような能力の中核は、問題を自分で見つけ出し、これに対する最善の解決方法を見つけ、実際に問題を解いていく力、すなわち批判的思考や問題解決能力である。この授業は、このような能力、とりわけ批判的思考を伸ばしていくことをねらいとしている。

(事務局資料)

資料 1-2-10 卒業に必要な共通教育科目と専門科目の単位数

(単位)

課程・コース・サブコース			共通 教育 科目	専門教育科目		卒業 所要 単位数
				必修 科目	選択 科目	
学校教育課程 (教育学)	言語教育 コース	国語教育サブコース 1 系	38	62	36	136
		国語教育サブコース 2 系		52	46	
		英語教育サブコース 1 系		64	34	
		英語教育サブコース 2 系		56	42	
	理数教育 コース	理科教育サブコース 1 系		66	32	
		理科教育サブコース 2 系		56	42	
		数学教育サブコース 1 系		66	32	
		数学教育サブコース 2 系		54	44	
	芸術・保健体育 教育コース	音楽教育サブコース 1 系		66	32	
		音楽教育サブコース 2 系		62	36	
		美術教育サブコース 1 系		68	30	
		美術教育サブコース 2 系		58	40	
	生活科学 教育コース	保健体育サブコース 1 系		58	40	
		保健体育サブコース 2 系		46	52	
		家庭科教育サブコース 1 系		69	29	
		家庭科教育サブコース 2 系		59	39	
	社会系教育 コース	技術科教育サブコース 1 系		66	32	
		技術科教育サブコース 2 系		56	42	
	教育実践科学 コース	社会系教育コース 1 系		54	44	
		社会系教育コース 2 系		42	56	
臨床教育科学 コース	教育実践科学コース 3 系	46	52			
	教育実践科学コース 4 系	26	72			
障害児教育科学 コース	臨床教育科学コース 3 系	46	52			
	臨床教育科学コース 4 系	26	72			
地域科学課程 (地域科学)	地域政策領域 人間文化領域		60	38	125	
			34	53		

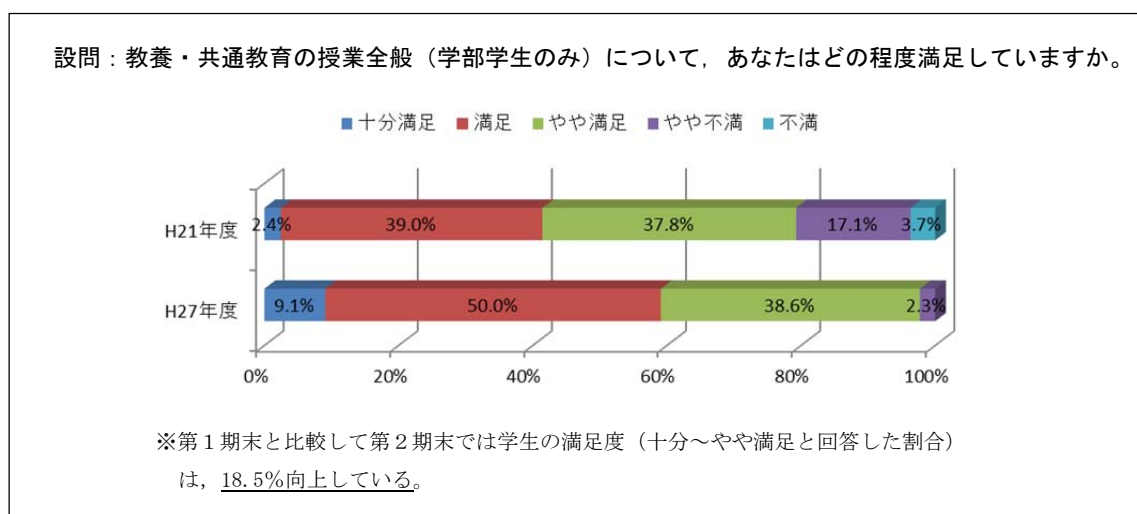
(事務局資料)

資料 1-2-11 主要専門科目の授業内容の例

科目区分名	授業科目名	授業内容の概要等
学校教育課程	教育学研究	教育学の基本的な概念や思想、歴史等について理解する。今日の教育をめぐる論点を確認し、それぞれの論点について自身の考えを深めるかたちで、教育の思想や制度について歴史に裏付けられた理解を得る。
	教育方法研究	本授業では現在の教育実践の問題を主に教育方法学の視点から議論する。実践的なメニューをこなしつつも、実際の教育実践事例を理論的に検討する中で、受講生全員が教育の方法と技術について明確な根拠を持って議論できるようになることを目指す。
	教育制度・経営論	この授業では、将来どのような教師になりたいのか、あるいはなるべきなのかを考える前提として、まず、教育や学校組織を成り立たせている制度・法律的基盤があることを様々な事例を通して確認する。そして、そうした基盤が教師個々のライフワーク、かれらが抱きがちな価値観や信念に及ぼす影響について考察できるよう意図している。
	発達心理学	人間の生涯発達に応じた、こころの葛藤や成長について学ぶ。その際、実際にロールプレイをしたり、グループディスカッションをしたりしながら、自ら探索的に学ぶことに力点を置く。したがって、単に知識を習得するのみでなく、他者の考えに触発されつつ自分の考えを創造するという、主体的な学びの姿勢を体得することを目指す。
地域科学課程	地域と環境	私たちの生活の基礎となっている地域の自然のあり方・特徴について理解を深めるとともに、普段何気なく見ている身近な地域の環境・風景はどのように形成されてきたものなのか？、その過程や要因について説明できるリテラシーを身に付ける。
	福井地域の歴史	前半の授業（長谷川）では、中世から近世における福井の政治・社会状況について、越前を中心に概説する。特に越前を代表する戦国大名朝倉氏や柴田勝家、また福井藩越前松平家などを取り上げ、その領域支配の特質と人びとの生活について理解することを目的とする。後半（木村）では、幕末から現代までの福井の政治・社会、及び福井の主要産業であった絹人絹織物業の発展とそれを取りまく社会状況について概説する。
	地域課題ワークショップ科目	地域創生をテーマとして、福井県内の行政機関や福井県内の中小企業をフィールドとして、調査・発表を行う。学内での学習だけではなく学外での調査・分析活動を複数の学生が協力しながら行うことによって、多岐にわたる地域創生に関する課題を理解するとともに、各学生の個別の研究テーマをより深く分析できる能力を身につけることを目標とする。
	スキルアップ科目	社会調査に関する入門的授業として、社会調査の意義、歴史、社会調査の種類、主要な方法と活用法、調査倫理などについて、基本的な知識と理解を得る。その上で、「世論調査」を素材として、調査の実際上の問題、調査結果の読み方、調査の社会的役割などを具体的に理解する。

(事務局資料)

資料 1-2-12 教養・共通教育に対する満足度



(平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識満足度調査」結果より抜粋)

【教育実践能力の育成】

学校教育課程では実践的能力を涵養するために教育実践コア科目を設けている。コア科目の履修により、学生は児童生徒との関わりを多く持つとともに実践を省察する機会（教職実践演習）が担保されており、学生からも好評を得ている（資料 1-2-13～16）。

資料 1-2-13 教育実践コア科目の概要



(事務局資料)

資料 1-2-14 「教育実践研究 A」年度計画

教育実践研究A & 教職実践演習 2014(平成26)年度実施計画 (異コース異学年型クラスター方式)				
1年次	2年次	3年次	4年次	4年次
教育実践研究A-I (教職入門を含む)	教育実践研究A-II (介護等体験を含む)	教育実践研究A-III (教育実習事前・事後学習)	教職実践演習	教育実践研究A-IV-V (副免許実習)
(前半) 学年別オリエンテーション【教職】				
			教科別オリエンテーション【教科専門】	
チーム協働探究テーマの設定—公教育の課題に関わる資料の検討を通して—【教職】			専攻専修コース別標準の検証【教科専門】	
実習校研究紀要の検討と前期チーム報告書の構想【教職】			教科専門学習個人誌づくり①【教科専門】	
大学生生活1ヶ月を振り返って【教職】 介護等体験説明会【実施委員会】 附属学校での授業参観①【教科教育(中)+教職(小)】			教科専門学習個人誌づくり②【教科専門】	
公教育の課題に関わる文献の検討と前期チーム報告書編集打ち合わせ【教職】			教科専門学習個人誌最終検討【教科専門】	副免許実習前打ち合せ(昼休み)
★ 教科専門学習個人誌報告会【教科専門】				
前期チーム報告書の検討【教職】				(5/23 附属幼稚園事前指導①)
附属中学校教育研究会【実施委員会】				副免許実習(小学校:8/2-13)(中学校:9/16-27)【実施委員会】
附属中学校における教育実践研究の検討【教職】			(7/5 附属幼稚園公開保育)	
模擬授業①【教科教育】				
模擬授業②【教科教育】				
e-ポートフォリオ説明会【e-ポート】 介護等体験オリエンテーション【実施委員会】 附属学校での授業参観②【教科教育(中)+教職(小)】				
模擬授業③【教科教育】				
模擬授業と授業参観②の振り返り【教科教育】			模擬授業と授業参観②の振り返り【教科教育】	
介護等体験事前学習【実施委員会+異社協】			e-ポートフォリオの活用と実習手引の検証【e-ポート】	
前期の振り返りと今後の課題の検証【教職】				
介護等体験事前学習【実施委員会】			教育実習事前指導(附属小学校:8/6-19)(附属中学校:8/6-25)(附属特別支援学校:8/27)	(8/21 附属幼稚園事前指導③)
介護等体験【実施委員会】			主免許実習(附属小学校:8/25-9/17)(附属中学校:8/26-9/18)(附属特別支援学校:9/1-9/30)【実施委員会】	副免許実習(附属幼稚園:9/1-12)(附属特別支援学校:9/1-12、9/16-30)【実施委員会】
後期オリエンテーション 新チームで教育実習と介護等体験の経験を融合【教職】				
実践者の成長を捉える 長期実践研究報告の検討①(1-2年生報告)【教職】				
実践コミュニティの展開を捉える 長期実践研究報告の検討②(3-4年生報告)【教職】				
生涯にわたる学習の展望【教職】			教育養成・領域別標準の再検証【教科教育】	生涯にわたる学習の展望【教職】
新たな協働探究の足場を確認する 課題図書①の検討①(1年生報告)【教職】			教科教育学習個人誌づくり①【教科教育】	新たな協働探究の足場を確認する①【教職】
新たな協働探究の足場を確認する 課題図書②の検討②(2年生報告)【教職】			教科教育学習個人誌づくり②【教科教育】	新たな協働探究の足場を確認する②【教職】
後期チームレポートの検討①(1-2年生報告)【教職】			教科教育学習個人誌最終検討【教科教育】	後期チームレポートの検討【教職】
★ 教科教育学習個人誌(3年生)報告会【教科教育】				
附属特別支援学校教育研究会				
附属小学校教育研究会				
教育実践研究の展開を振り返る チームでの協働探究の振り返りと公開クロソセッションの準備【教職】				
★ 公開クロソセッション①: 教職学習個人誌報告(4年生)と個人最終報告(1-2・3年生)(土曜午後集中)【教職】				
★ 公開クロソセッション②: 教科教育学習個人誌報告(4年生)と個人最終報告(1-2・3年生)(日曜午前・午後集中)【教職】				
今後の展望を捉える 公開クロソセッションの振り返り【教職】				
(卒業研究の査察)				

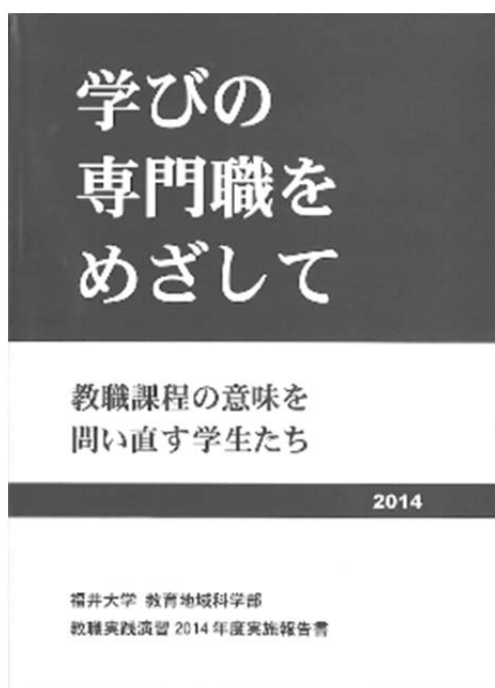
(事務局資料)

資料 1-2-15 学生の意見等(探求ネットワーク・ライフパートナー)と教職実践演習報告書

<p>■ 主な活動に係る学生の意見等</p> <p>○学習過程研究(教育実践研究B) 「探求ネットワーク」</p> <p>(概要) テーマごとに9つのブロックに分かれ多彩なプロジェクトを練り上げます。子どもたちの興味を引き出す活動を行い、子どもたちとの関わり方を学びます。</p> <p>・どんな活動をしましたか</p> <p>私は「わくわくキャンプ工房」というブロックで、子どもたちと一緒に木や竹など自然素材を使った工作に取り組みました。キャンプでは子どもたち自ら森で素材収集をし、チームでの工作にも挑戦しました。活動を通して、子どもたちは自然に親しむ楽しさを実感し、自主性や協調性をのびせたと思います。</p> <p>・活動を通して身につけたこと</p> <p>子どもはいろいろな面を持っているもの。時には叱られるようなこともありますが、そこだけを見るのではなく、個性と向き合うことの大切さを学びました。活動の後に、ある子どもから「厳しく叱ってくれたのは、私たちが思ってくれるからだよね」という手紙をもらい、真摯な思いは伝わることを実感しました。</p> <p>○学校教育相談研究(教育実践研究C) 「ライフパートナー」</p> <p>(概要) 学校教育課程の学生が2年次から4年次に受講できます。学校になじめない子どもの学習支援や心理的支援を行い、子どもの心に寄り添う力を身につけます。</p> <p>・どんな活動をしましたか</p> <p>2年次から1年間、授業に集中できない小学1年の児童を担当しました。その子との接し方で工夫したのは、小さな目標を立てること。例えば「問題を解く」という目標では、問題をノートに書くところまでは私がやるなど役割分担を行うことで目標に集中してもらいました。子どもの立場になり、寄り添うことで、その子の活動を支援しました。</p> <p>・活動を通して身につけたこと</p> <p>ライフパートナーは長い期間取り組むため、時間をかけて活動の記録をとり、それを振り返ることで子どもとの関わり方で良かったこと、悪かったことを考察できます。また、子どもを叱れるようになったことも大きな成果。感情的に怒るのではなく、なぜ叱られるのかを理解してもらうようにしました。</p>

(事務局資料)

■ 教職実践演習報告書



学生の報告内容を一部抜粋

第 I 部

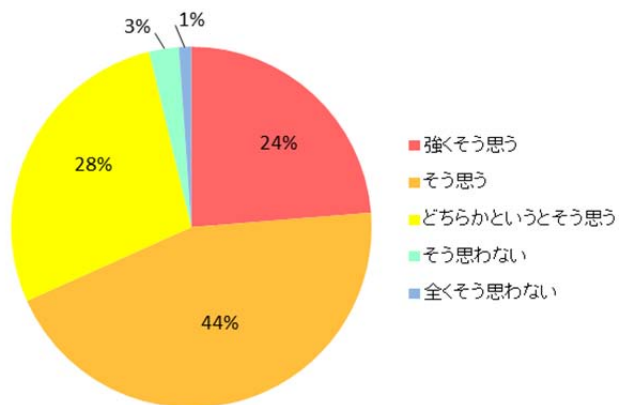
1. 軌跡 5年間の歩みをたどって
2. 教育における他者との関わり-今後の教師としての展望
3. 教師としての専門性を高める実践の在り方に関する一考察-中等教育の国語科を中心として
4. 4年間の学びと成長-ゼロから始まった教職への道
5. 学び続ける教師を目指して-成長させる教師, 成長する教師
6. 仲間の力と考える力-4年間の学びを経て
7. 子ども主体の授業-子ども理解の大切さ
8. 教職への歩み-4年間の学びを活かす
9. 私のパンドラの箱-理論不足が招いた悲劇・届かぬ学生の思い
10. 話し合いの場をつくる-ファシリテーターという観点から

※報告書の公刊は平成 23 年度より開始 (平成 26 年度版は全 368 頁)

(事務局資料)

資料 1-2-16 コアカリキュラムの評価

設問: 「教育実践研究 A~C」(学校教育課程) あるいは「地域課題ワークショップ I~IV」(地域科学課程) によって, 人間関係の構築力やコミュニケーション能力などが修得でき, 自分自身の成長に役立ったと思いますか?



教育地域科学部 回答数: 451

(平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」より抜粋)

●社会のニーズに対応した教育課程の編成と実施上の工夫

【教育改革課題への対応】

- ① 教育実践研究Cは、生徒指導・教育相談実習として位置づけられ、県内の不登校や発達障害などの気がかりな子を教育委員会と連携して学生が学校等で支援しており、子供の心に寄り添う力を涵養するとともに、教育関係者の期待に応えている（P1-49 前掲資料 1-2-15）。
- ② 3年次の教育実習は附属学校で実施される。附属小中学校には ICT 機器が整備されており、実習生はこれらの機器を活用して授業実践を行っている（資料 1-2-17, 18）。

資料 1-2-17 附属小中学校 ICT 機器の整備状況（平成 26 年度）

ICT機器等	電子黒板	タブレット端末	デジタル教科書
附属小学校	16台	162台	国語・算数：1～6年生， 理科・社会：4～6年生
附属中学校	3台	170台	-

（事務局資料）

資料1-2-18 教育実習におけるICT機器の活用（平成27年度附属小学校主免実習）



（事務局資料）

【社会人向けプログラム】履修証明プログラム

市民の学習・自治活動を支える学習支援コーディネーターの実践力形成を目的とした履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」を実施しており、受講者の評価も高い（資料 1-2-19～21）。

資料 1-2-19 履修証明プログラム開講科目（平成 25 年度より）

開講科目	授業時間数
cycle A 生涯学習・社会教育の理念と構成 生涯学習論	45
cycle B 社会教育の計画・展開・評価 社会教育計画	45
cycle C コミュニティ学習支援事例研究 社会教育特講	55
cycle D コミュニティ学習支援実践研究 社会教育演習	45

（事務局資料）

資料 1-2-20 履修証明プログラム履修状況

		H25	H26	H27
履修者数	1年目(cycle A,B)	5	9	9
	2年目(cycle C,D)		5	7
	合計	5	14	16
修了者数			5	6

※履修証明プログラムは2年で1サイクルのため、各年度の受講者数は、1年目と2年目の受講生の和となる。

(事務局資料)

資料 1-2-21 履修証明プログラム受講者の感想と評価

「公民館が教育事業を行う意義」福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」
【受講者】福井市社西公民館主事

この福井大学の講座での体験から得た思いは、まさに学びへの扉だった。学ぶために受講したのだが、最初の頃は実践記録を書くことも含め、正直言って少し苦痛だった。しかし、この場へ来て、仲間たちとそれぞれの実践や仕事上の苦労や悩み、または喜び、時には愚痴もあり、いろいろな話を聴き合っているうちに、違う感覚が芽生えてきた。日常業務や実務では得ることのできないこの空間が、少しずつ楽しく感じてくるようになった。「学ぶ」「楽しむ」「支え合う仲間」これらがこの講座には存在していた。共感してくれる仲間がいることは何よりの支えであり、この記録を書き上げる原動力になったように思う。私ひとりでは書き上げることはできなかった。

「広報誌づくりの取り組み-公民館だよりから地区広報誌へ」【受講者】越前市吉野公民館主事

公民館主事となって6年、平成25年度より福井大学履修証明プログラムに参加させていただき、初めて「自分の実践を時系列に沿って記録する」事に取り組みましたが、初めての経験でもあり、どのように書けばよいのか非常に迷いました。6年間勤務した岡本公民館から市教委生涯学習課に異動したばかりでしたし、現場から切り離された職場の中で、「実践」という言葉にとっても悩みました。事務仕事に追われる毎日の中、自分の実践と言える事柄が何もなかったからです。その結果、履修証明プログラムの最初の10ヶ月は実践記録の主題を絞りきれず五里霧中の状態でした。

それでも、何とか実践記録を書き進めていくうちに、わずか数年前の事が思い出せず過去の書類や広報誌などを読み返し確認したり、反対に完全に忘れていた事を思い出すこともあり、書くことが自分自身の良い振り返りになると気付かされました。この頃、すでに履修証明プログラムの1年が修了しようとしていましたが、ようやく“実践を記録”することの意味を少し理解できるようになりました。その結果、「公民館について何も分からなかった私が、地域の方々と共同作業を通じてワクワクした時間を過ごし、主事として少しは成長できたかなと思える“地域広報誌づくり”の実践こそ、自分自身にとって今残したい実践記録だと思えるようになりました。しかもすでに忘れていて、今しか残せない記録だと気付いたのです。

(福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」第4年次(平成27年度)報告書より抜粋)

受講者の評価

「社会人の大学等における学び直しの実態把握に関するアンケート調査」(平成27年12月、文部科学省高等教育局専門教育課・大学振興課)に履修証明プログラム受講者16人中14人が回答

設問：現時点において大学等で学び直しをして良かったですか(主なもの1つ選択)

- 1. とても良い 8人
- 2. まあまあ良い 5人
- 3. あまり良くない 0人
- 4. 良くない 0人
- 5. 受講を開始したばかりで判断できない 1人

(第3年次(平成26年度)報告書 67-74頁より抜粋)

●国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫

【グローバル人材養成】

- ① 短期留学推進制度を利用する学生と私費で留学する学生が一定数いる。グローバル人材育成事業による経済的支援により第1期に比べ短期留学が増加しており、留学先で取得した単位については一部正規の単位として認定している（資料1-2-22, 23, P1-18～20 前掲資料1-1-21, 22）。

資料1-2-22 他大学で習得した単位の認定

他の大学等において修得した単位、大学以外の教育施設等における学修、入学前の既修得単位等に対する教育地域科学部における単位の認定手続に関する申合せ（抜粋）

（趣旨）

1. この申合せは、福井大学学則（平成16年福大学則第1号。以下「学則」という。）第49条、第50条及び第51条の規定に基づき、「他の大学等において修得した単位、大学以外の教育施設等における学修及び入学前の既修得単位の認定（以下「単位の認定」という。）」に関し、専門教育科目の単位の認定に必要な事項を定めるものとする。
（単位の認定の対象とする他大学等における修得単位等）
2. 学則第49条、第50条及び第51条の規定に基づく、他大学等で修得した単位又は大学以外の教育施設等における学修は、次の各号に掲げるとおりとする。
 - （1）大学又は短期大学において修得した単位
 - ・在学中のものにあつては、協議に基づき当該大学等で修得した単位（単位互換協定により取得した単位を含む。）
 - ・外国留学によるものにあつては、外国の大学又は短期大学等で修得した単位
 - ・休学期間中に外国の大学又は短期大学等で修得した単位（短期語学研修により修得したものを除く。）
 - ・入学前のものにあつては、大学又は短期大学（外国の大学及び短期大学を含む。）において修得した単位（科目等履修生として修得した単位を含む。）
 - （2）大学、短期大学又は高等専門学校の専攻科における学修
 - （3）その他文部科学大臣が別に認める学修
（単位認定の申請）
3. 単位認定の申請は、次により行うものとする。
 - （1）学則第49条又は第50条による単位の認定を受けようとする者（以下「申請者」という。）は、「他大学等における修得単位認定願」（別紙様式1）に成績証明書、講義概要等を添えて、学部長に願ひ出る。
 - （2）学則第51条による単位の認定を希望する者（以下「申請者」という。）は、「入学前の既修得単位認定願」（別紙様式2）に成績証明書、講義概要等を添えて、原則として入学した学期の始めに、学部長に願ひ出る。
（単位認定の審査）
4. 単位認定の申請を受けた学部長は、教育上有益と認めるときは、次の手順によって、本学部において修得した単位又は科目とみなして単位の認定を行う。
 - イ. 学部長は、申請者の所属コースを担当する講座主任に単位認定について依頼する。
 - ロ. 学部長より依頼を受けた講座主任は、当該授業科目の関係教員に対し、当該科目について審査を求め、その審査結果を講座でとりまとめのうえ、学部長に報告するものとする。
 - ハ. 学部長は、当該科目の認定について、その審査結果に基づき、教育地域科学部教務学生委員会の議を経て、教授会に報告し、決定する。
 - ニ. 学部長は、認定した授業科目及び単位の結果を「単位認定通知書」（別紙様式3）により申請者に通知する。
（単位認定に伴う指導等）
5. 前3項により単位の認定を願ひ出るには、所属コースを担当する講座主任と事前に相談し、その承認を必要とする。単位の認定を受けた学生には、その後の履修計画について、助言教員をはじめ各講座において適切な指導を行うものとする。

（事務局資料）

資料 1-2-23 留学に伴う単位の付与（平成 25 年度～平成 27 年度）

単位付与区分	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
交換留学単位認定者数（卒業所要単位として）（人）	3	2	5
短期海外研修プログラム単位付与者数（卒業所要単位外）（人）	31	36	27

（事務局資料）

- ② グローバル人材育成の一環として、4 技能育成を重視した実践的英語教育科目を体系的に教養教育課程に配置し、習熟度別クラスにより一定の成果をあげている（資料 1-2-24, 25, P1-85 後掲資料 2-1-10）。

資料 1-2-24 共通教育における英語教育

【英語教育科目】
英語の履修課程は次のとおりです。

学部	1 年		2 年	
	前期	後期	前期	後期
教育地域科学部	英語 1	英語 3	英語 5	英語 7
工学部	英語 2	英語 4	英語 6	英語 8

教育地域科学部 7 クラス，工学部 24 クラスに分けて授業を行います。
クラス編成表を別途掲示しますので，そこに指定されたクラスで履修してください。
また，両学部の再履修生のためのクラスを別途開講します。

留意事項：

- 英語は，指定されたクラスで英語 1～8 まで履修してください。
- 英語 1～8 の授業は習熟度別クラス編成で行います。英語 1～4 はリスニングとスピーキングを中心としたコミュニケーション型な授業を行います。英語 5～8 はリスニングとスピーキングも行いますが，焦点はリーディングとライティングに移し，適宜 ESP も導入します。クラスワークだけでなく，授業外で行う e-learning 学習又は多読も取り入れます。
- 単位を修得できなかった者は，再履修によりそれを補わなければなりません。再履修者は，再履修クラス（SR, FR のクラス）で履修してください。再履修の必要がある者は，学期始めに教務課で，再履修を申請し許可を得て，これらのクラスで履修して必要な単位に振り返ることができます。
- さらに英語を学習しようとする者は，共通教養・副専攻科目第 2 分野「人間」のスピーキング I，II，リスニング I，II，ライティング I，II，リーディング，英語コミュニケーション総合演習 I，II 等を履修することができます。

（共通教育科目履修の手引き（文京キャンパス）より抜粋）

資料 1-2-25 英語力の自己評価

設問：本学では，皆さんが“グローバルな視野を持った高度専門職業人”となることを教育の大きな目標としています。福井大学での学修をとおして使える英語力（語学力）がどの程度身についた、あるいは卒業・修了時までには身につくと思いますか？

年度	十分身についた(つく)	身についた(つく)	ある程度身についた(ついた)	あまり身につけていない(つかない)	全く身につけていない(つかない)
H26	4%	14%	41%	29%	12%
H27	4%	16%	46%	28%	7%

※平成 26 年度と比較して平成 27 年度では十分身についた（つく）～ある程度身につく（ついた）と回答した学生の割合は、6.5%向上している。

（平成 26 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

●養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫

【教育方法の組み合わせ】

多様な授業形態を組み合わせた科目を配置している。実践コア科目及び地域課題ワークショップ科目を1年次から段階的に履修させており、実習・探究的活動を有機的に結びつけた実践的な授業を展開している。これらの教育方法の効果について学生から肯定的な回答を得ている（資料 1-2-26, 27）。

資料 1-2-26 授業形態の状況（平成 26 年度開講科目）

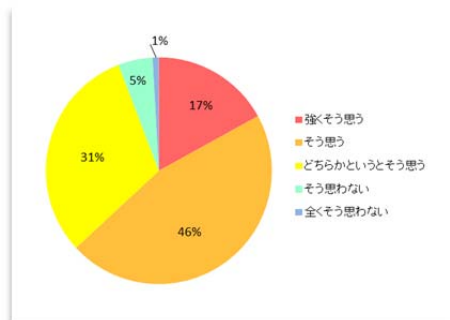
課程及び コース名	授業区分										合計 (総科目数)	
	講義		演習		実験・実習 (実技を含む)		講義と演習		講義と実習			
	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合		
学校教育課程	教職科目等	52	59%	4	5%	21	24%	11	13%	0	0%	88
	言語教育	41	58%	17	24%	13	18%	0	0%	0	0%	71
	理数教育	57	64%	20	22%	11	12%	0	0%	1	1%	89
	芸術・保健体育	30	22%	14	10%	94	68%	0	0%	0	0%	138
	生活科学	39	59%	12	18%	11	17%	0	0%	4	6%	66
	社会系	63	76%	17	20%	3	4%	0	0%	0	0%	83
	教育実践	7	47%	8	53%	0	0%	0	0%	0	0%	15
	臨床教育	11	61%	7	39%	0	0%	0	0%	0	0%	18
障害児教育	23	68%	11	32%	0	0%	0	0%	0	0%	34	
地域科学課程	157	65%	41	17%	0	0%	38	16%	0	0%	242	

※「割合」は総科目数に占めるそれぞれの授業区分の割合を示している。

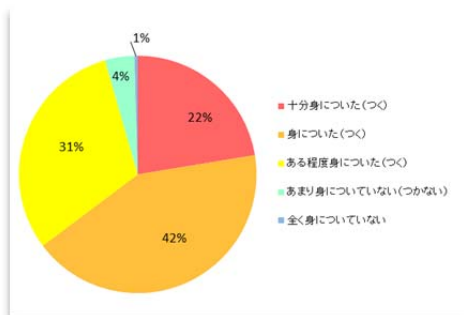
(事務局資料)

資料 1-2-27 多様な教育方法・履修形態の導入に対する学生の評価

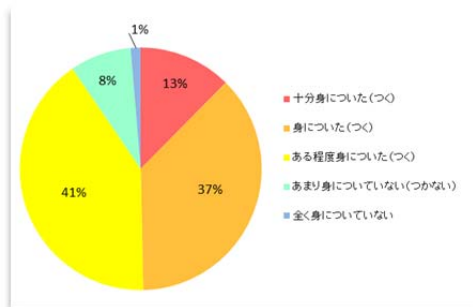
●教育地域科学部では、さまざまな教育方法・履修形態（アクティブラーニング型授業，少人数教育，統合型講習，実習など）を取り入れていますが、これらは教師あるいは地域で活躍人材として備えるべき能力を育成するうえで役立ったと思いますか？（回答数 447）



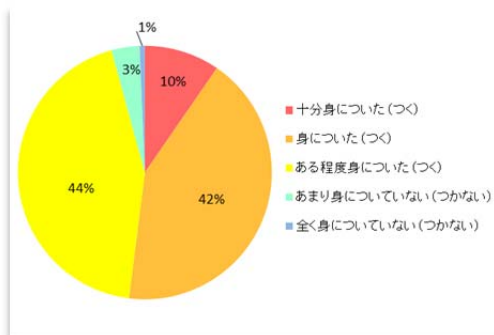
●日常的にコミュニケーションをする力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか？（回答数 451）



●プレゼンテーションをする力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか？（回答数 455）



●本学では、皆さんが“グローバルな視野を持った高度専門職業人”となることを教育の大きな目標としています。福井大学での学修をととして、課題探究・問題解決能力，自己学習力がどの程度身についた，あるいは卒業・修了時までには身につくと思いますか？（回答数 448）

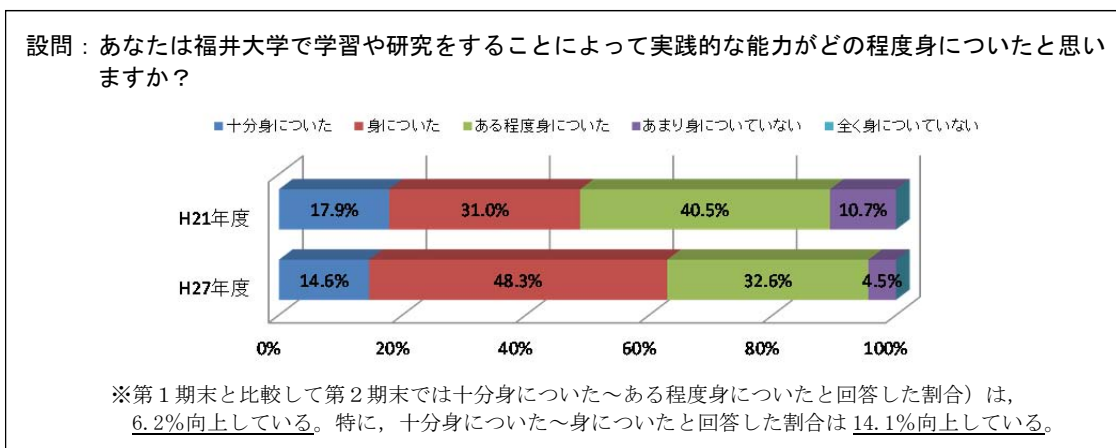


（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【実践的能力を育成する教育方法】

実践コア科目はいずれも体験・実践・探究を伴う授業であり、それらの活動を総括する報告書の作成と公表を課している。教育実践研究 A は全学年が異学年チームを組み実践に関して協働研究を重ねる授業である。教職実践演習ではそれまでの取組を省察し、1～3年次生と共有するという工夫を行っており学生の実践的能力を涵養している（資料 1-2-28, 29, P1-48～50 前掲資料 1-2-13, 14, 16）。

資料 1-2-28 実践的能力の自己評価



(平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋)

資料 1-2-29 教職実践演習報告書に記述された実践の省察

・教師としての専門性を高める実践のあり方に関する一考察（※言語教育コース 4 年）
 …当然ながら、国語教師には国語教師には教材に対する深い専門的知見がなくてはならない。それは教材研究で、学習者を「発見」し、有り得べき授業の在り方を模索するためのものなのである。これはすなわち授業計画（大まかな骨子）となるべき部分であり、授業構想の第一歩にあたる部分である。ということは、これが国語教師としてのスキルの礎になってくる。その上で、実際に授業を展開していく中で、タイミングを逃さず学習者に対する効果的なインターベンションを行ったり、元来の授業計画を変更する必要が生じた場合に、その場で授業を再構成したりすることで、回り道をしつつも、しっかりと縦糸に貫かれた学習活動が展開できるような「即応力」とでもいうべき力を涵養していく必要がある。それは通常、自らの授業実践をしていく中で、あるいはそれを基にした本来的な「省察」を行っていく中で身につけていくものである。しかし、トレーニングとして有効に働くであろうと考えられるのが、実際の授業現場に出向き、それを検討・分析する中で「代理的」に経験値を高めていくことだ。

・4年間の学びと成長（理数教育コース 4 年※）
 …「教師のプロフェッショナルたる所以は授業力にある」と一般的に言われているように、なにより授業力を高めるために多くの時間を割いた。子どもたちに分かりやすく説明するにはまずそれなりの知識を持ち合わせていることは当然だが、イメージをつかませるために教具を使ったり、分かりやすい言葉を選んで教えたりしなければならず、そのためにはやはり教材研究が重要になってくるのが改めて分かった。私はリアリティーとインパクトのある授業づくりに拘った。学習が生活の中の事象と結びついたとき、達成感や更に学びたいという意欲に繋がると考えるからである。

実際に私は昆虫の授業を行った。昆虫嫌いな子もいるとは思ったのだが、思い切って週末に自分で昆虫を捕まえて、授業で児童に観察させる活動を行った。実物を目の前にした子どもたちの目はとても輝いていたのが印象的だった。現場に入っても、時間が少ないながらも子どもたちの感性を刺激できるような「リアリティーとインパクト」を重視した授業づくりを行っていきたい。

※福井県教員採用試験に現役で合格

(教職実践演習 平成 26 年度実施報告書「学びの専門職をめざして」より一部抜粋)

【附属学校の活用】

附属学校の教育研究集会に3回参加することを教育実習の着手条件とし、実習の事前指導の段階で、児童・生徒との交流を行っている（P1-48 前掲資料 1-2-13）。また、附属小中学校は CST 事業拠点校として毎年数名の CST インターンシップ生を受け入れるとともに（P1-12 前掲資料 1-1-13）、学部生の卒業研究にも附属学校園が活用されている（資料 1-2-30）。

資料 1-2-30 附属学校園を活用した卒業研究

卒業年度	所属コース	対象学校園	卒業研究テーマ
平成 24 年度	生活科学教育	附属幼稚園	遊びにおける学びの姿 ～幼小連携の視点から～
平成 25 年度	生活科学教育	附属幼稚園	幼稚園における読みきかせ絵本選択に関する研究
平成 26 年度	生活科学教育	附属幼稚園	幼児教育における絵本の読みきかせについて
平成 27 年度	生活科学教育	附属幼稚園	3 歳児クラスにおける遊びの中のいざごさに関する研究
	生活科学教育	附属幼稚園	3 歳児における子ども同士のかかわりに関する研究
	臨床教育科学	附属小学校	幼児期及び児童期における入り混じった感情の理解の発達
	臨床教育科学	附属小学校	児童期及び青年期における性役割態度の柔軟性の発達とその関連要因 —子どもとその両親への質問紙調査に基づく分析—
	教育実践科学	附属小学校	授業における教師の認識に関する研究 —長期的な「見取り」を持つ教師の介入の分析から—

(事務局資料)

【多様な学修・研修機会】

初級 CST 受講生は 10 日間の学校インターンシップを行い、上級 CST の指導の下教材研究や授業実践を行っている。さらに博物館等でのインターンシップも行い、地域の科学啓発活動にも参加している（資料 1-2-31, 32）。また、合同研修会・シンポジウムにおいて、初級受講生が報告し現職教員から指導を受ける機会を設けている（資料 1-2-33）。

資料 1-2-31 初級 CST 学校インターンシップ参加者数

学校インターンシップ	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
小学校インターンシップ	4	1	2	2	2	4
中学校インターンシップ	4	5	3	3	4	2
合計	8	6	5	5	6	6

■ 受入れ側の評価コメント（管理職）

当初、時期的なことや担当者の学年を考えると、負担が大きいかと心配したが、大変意欲のある受講者だったので、安心して見守ることができた。短期間だったが、児童・教職員の中にもすぐに溶け込み、授業ばかりでなく、担当者の日常業務の中からも多くのことを学んだ実習になったと思う。

(平成 24 年度 CST 事業業務成果報告書より抜粋)

(事務局資料)

資料 1-2-32 初級 CST 博物館等インターンシップ参加者数

受入博物館等	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
福井市立自然史博物館	1	2	1	1	1	0
福井県立児童科学館	0	3	2	2	3	4
福井県立恐竜博物館	0	1	0	2	1	2
合計	1	6	3	5	6	6

■ 実施機関担当者の評価コメント

子どもや科学実験に関心が高く、教員にふさわしい学生がインターンシップに訪れたことを大変うれしく思っています。このような学生達に児童館職員も刺激を受けております。若い受講者達の考え方も参考にしながら、当館における科学教育、科学普及の在り方を考えていきたいと思っています。

(平成 24 年度 CST 事業業務成果報告書より抜粋)

(事務局資料)

資料 1-2-33 CST シンポジウム (初級 CST 受講者の発表例)

福井大学大学院教育学研究科 教育内容・教材開発研究会
シンポジウム&ワークショップ

第3回 福井 CST シンポジウム

科学を伝える

プログラム・要旨集

福井大学 文京キャンパス 総合研究棟 | 13 階

2014 年 11 月 29 日 (土) 13:20 ~ 18:00

主催 福井大学 福井県教育委員会

共催 福井大学大学院教育学研究科教育内容・教材開発研究会

後援 福井県小学校教育研究会理科部会
福井県中学校教育研究会理科部会

プログラム

総合司会 福井大学教育地域科学部 西沢 徹

13:00 ~ 13:20 受付

13:20 ~ 13:30 開会のごあいさつ
福井大学 理事 (研究・国際担当) 副学長 岩井 善郎

13:30 ~ 13:50 事業報告
福井大学 教育地域科学部 教授 (編集主担当) 浅原 雅浩

13:50 ~ 14:50 基調講演
「科学を伝える ~ノーベル賞授賞式に同行して~」
読売新聞大阪本社 宇治学研支局長 今津 博文

14:50 ~ 15:00 休憩

15:00 ~ 15:40 ショートプレゼンテーション 座長 福井大学教育地域科学部 山田 吉英

15:40 ~ 16:40 ポスター・ワークショップ

福井 CST

P-01 川原の石が丸くなるのが実感できる実験 (上級 CST 養成プログラム受講者)
~徳島大学が持つ「石」を使ったモザイク実験~
高松市立河野小学校 吉水 豊治

P-02 CST 活動報告と実教材開発 (初級 CST 養成プログラム受講者)
視覚的に印象を与える実験道具
福井大学教育地域科学部
○松本 拓也, 奥出 朱里, 竹内 一馬, 園 知代, 栗原 一嘉

P-03 電気回路に対する理解度の評価法の紹介 (初級 CST 養成プログラム受講者)
抵抗電気回路における概念評価テスト「DIRECT」の導入を中心として
*福井大学教育地域科学部学校教育研究科 福井大学大学院教育学研究科 玉川大学教育学部
○西行 大志*, 山田 吉英*, 小林 和雄*, 石井 恭子*

P-04 奥平しよによる解剖とその功業 (上級 CST 養成プログラム受講者)
あわら市立金津小学校 平田 幸憲

P-05 中学校化学的評法を用いた金属錯の酸化還元に関する検討 (初級 CST 養成プログラム受講者)
~「中学校理科：化学変化」酸化還元の実験への適用~
福井大学教育地域科学部
○若佐 幸弘, 笠川 裕史, 青山 絹代, 中田 隆二

P-06 中学校教員が行う教員研修 (上級 CST)
~教材開発の手法を伝える教員研修~
福井市立三箇中学校 月備 秀弥

※CST 合同研修会またはシンポジウムは年 2 回開催され、初級 CST 受講者も研究・実践報告を行う。

(事務局資料)

【教育現場と連携したプロジェクトへの学生の参加】

- ① 福井大学 EMP 実行委員会は、福井の街づくりと市街地の活性化を推進することを目的として活動している。公民館や社会教育施設とも連携し、毎年プロジェクトやワークショップ等を企画実施しており、学生が主体的に関わる学修機会となっている (資料 1-2-34)。

資料 1-2-34 EMP 実行委員会活動実績 (平成 22~26 年度) と報告書の例

■ EMP 実行委員会の概要				
EMP (Enjoy My town Project) 実行委員会は、大学生の若い感性で福井駅周辺の課題について考え、「歩きたくなる駅前」を創造し、自分たちのまちを活気づけることを目的として、平成 22 年度に地域科学課程の学生を中心に発足し、中心市街地の活性化プランを発表するワークショップの開催やフリーペーパーの制作等を行っている。これらの活動は、学部附属地域共生プロジェクトセンターの事業「地域に魅せよう学生のチ・カ・ラ」の支援を受けて実施されている。				
■ EMP 実行委員会活動実績				
年度	月	事業名	実施場所	参加者数
平成 22 年度	4	委員会発足、活動開始	福井大学	
	10	「学生発信！駅前プロデュース in FUKUI」開催	AOSSA	73
	11	「私たちが再開！女性が提案するふくい駅前プロデュース」にて、駅前活性化プランを発表	響のホール	約 50
	2	『学生発信！駅前プロデュース in FUKUI 提言書』発行		
平成 23 年度	4	ブログ開設		
	7	第 1 回福井駅周辺まちあるき WS「乙女ツアー」「芸術ツアー」開催	福井市街地	8
	8	フリーペーパー『Enjoy My town Paper』vol.1 発刊		
	11	第 2 回福井駅周辺まちあるき WS「浜町ツアー」「駅前ぶらり旅」開催	福井市街地	8
		フリーペーパーvol.2 発刊		
	12	フリーペーパーvol.3 発刊		
	3	フリーペーパー増刊号『Enjoy My town Personal Note』発刊		
		『2011 年度 Enjoy My town Project 報告書』発行		

福井大学教育地域科学部 分析項目 I

平成 24年度	5	福井県「ふくい“夢チャレンジプラン”」支援事業（地域活性化型）応募、採択	県国際交流会館	
	7	福井大学「地域に魅せよう学生のチ・カ・ラ」支援事業採択	福井大学	
		連続WS 第1回「まちあるき交流会」、第2回「発見しよう！駅前の魅力！」開催	順化公民館	10
	8	フリーペーパーvol.4 発刊		
	10	連続WS 第3回・第4回「伝え合おう！駅前の魅力！」開催	順化公民館ほか	10
		『中心市街地活性化全国リレーシンポジウム まちづくりフォーラム2012』パネリスト参加	響のホール	
	12	フリーペーパーvol.5 発刊		
	1	『2012年度 Enjoy My town Project 報告書』発行		
	3	企画者向けパンフレット『子ども発信！ふるさとプロデュース 魅力発見まちあるきツアー』発行		
平成 25年度	3	福井大学「地域貢献事業支援金」採択		
	7	連続WS 第1回「まちあるき交流会」、第2回「まちあるきツアー」、第3回「模型作り」開催	順化公民館ほか	10
	8	連続WS 第4回「子どもたちが考える理想の駅前」発表会・展示	福井市まちづくりセンター	
		フリーペーパーvol.6, vol.7 発刊		
		2013年度報告書発行		
平成 26年度	6	福井「夢チャレンジプラン」応募プレゼン大会（福井駅前歴史ミュージアムプロジェクトが事業に採択：福井市助成金20万円） ワークショップⅠ 子ども達と顔合わせ	順化公民館	15
	7	ワークショップⅡ まちあるき1回目（足羽山コース） ワークショップⅢ まちあるき2回目（西口・中央公園コース） ワークショップⅣ ミュージアム展示物の制作1回目 順化公民館主催「お堀の灯り」に参加 福井の偉人調べ学習	順化公民館 こども歴史文化館	15
	8	ワークショップⅣ ミュージアム展示物の制作2回目 福井駅前歴史ミュージアムプロジェクト開催	順化公民館 駅前ふく+	15
	9	福井夢アート展示（新栄商店街） 福井夢アート展示（アオッサ）	新栄商店街 アオッサ	
	12	フリーペーパー「Enjoy My town Paper」vol.8 発行		
	2	福井市NPO パネル展でEMP活動内容の展示	福井市NPO 支援センター	
	3	2014年度EMP活動報告書発行		
		この部分は著作権の関係で掲載できません。		
			福井新聞 平成26年8月29日	

■ 事業報告書の例

平成 24 年度 福井大学教育地域科学部附属地域共生プロジェクトセンター
「地域に魅せよう学生のチ・カ・ラ」支援事業報告書

企画事業名：「福井の未来を担う子どもの育成プロジェクト」

申請代表者の所属・氏名：福井大学教育地域科学部地域科学課程生涯学習系 3 年 松浦〇〇

所属団体名：福井大学 EMP 実行委員会

事業実施期間：平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月

企画事業の目的

本事業の目的は、福井駅前のまちづくり活動を通して、将来、福井の魅力自ら見出し、その魅力を身の回りの人、さらには県外の人にまで伝えることができる子どもを育成することである。福井の魅力を知り、地元へ愛着を持つことで、一度県外に出ても最終的には福井に帰ってくる人々が増え、県外で福井の魅力を発信できる人々が増えると考え。このような未来の福井を思い描く私たちは、まずは身近にある魅力を見出し、その魅力を伝えることを学ぶ第一歩として、順化地区の子どもたちに、まちあるきを通して身近すぎるため気づきにくい駅前の魅力に改めて気付いてもらうきっかけを提供しようと考えた。

事業実施内容

順化地区公民館と連携し、連続ワークショップ形式で行った。メインとなるワークショップは 4 回に分けて行い、各ワークショップは福井駅前周辺のまちあるきを中心とし、順化地区住民の方々、順化小学校、駅前周辺商店街の方々、まちづくり福井株式会社の協力のもと実施した。また各ワークショップのまとめ・情報発信として、ニューズレターの発行を 2 回行った。ニューズレターは順化地区以外にも配布した。事業終了後は、今年度の活動報告書と提言書を発行する

実施内容順化地区公民館と連携し、連続ワークショップ形式で行った。メインとなるワークショップは 4 回に分けて行い、各ワークショップは福井駅前周辺のまちあるきを中心とし、順化地区住民の方々、順化小学校、駅前周辺商店街の方々、まちづくり福井株式会社の協力のもと実施した。また各ワークショップのまとめ・情報発信として、ニューズレターの発行を 2 回行った。ニューズレターは順化地区以外にも配布した。事業終了後は、今年度の活動報告書と提言書を発行する

実施スケジュール

- 7 月 19 日 ワークショップ①「ホットケーキ作り交流会」（イントロダクション）
・今回の事業と一緒に活動する順化地の子どもたちとのホットケーキ作り交流会を開催
- 7 月 31 日 ワークショップ②「発見しよう！駅前の魅力！」
・順化地区のおんちゃん・おばちゃんガイドのもと、子どもたちと駅前を歩き、子どもたちが福井駅周辺の魅力をまとめ発表
- 8 月 24 日 ニューズレター①発刊
・探検隊の様子を写真や子どもたちや EMP メンバーの感想などで紹介、ワークショップ④の紹介も記載
- 10 月 1 日 ワークショップ③「WSIV 事前レクリエーション」
・まちあるきガイド練習など順化地区の子どもたちと一緒にワークショップ④に向けての準備
- 10 月 6 日 ワークショップ④「伝え合おう！駅前の魅力！」
・福井県内の子どもたちを対象とした、(1) 順化地区の子どもたちがガイドをするまちあるきツアー(2) 地域の魅力を伝え合う交流ゾーンの 2 企画を実施
- 12 月 3 日 ニューズレター②発刊・ワークショップ③④の様子・感想を記載、駅前のお店紹介
- 3 月 11 日 活動報告書発行・今年度の活動の概要、反省点などを記載
- 3 月 22 日 事業モデル提言書発行・地域の公民館との連携事業モデルを紹介

事業の成果

本事業は、福井の子どもたちを、まちの魅力を見出し、その魅力を自らの言葉にして語る福井人に育てることを目的としていた。そのために、身近な魅力を知り、その魅力を発信することを学んでもらおうと、順化地区公民館の子どもたちに、駅前周辺のまちあるきをする機会を提供し、最後に、子供達自身がガイドを務めてそのまちあるきで学んだことを他地区の子供たちに伝えるまちあるきも行った。これらの活動によって、順化公民館の子どもたちは、改めて福井の魅力を知り、その魅力をほかの人たちに伝える能力をつけたと考えられる。実際に、まちあるき後のインタビューで「今日のまちあるきで知った福井の町のことを、県外の人に案内しながら詳しく話すことが夢です。」と語ってくれた子どももいた。これらのことから、本事業は当初の目的を達成したと言える。しかし、今回の活動では順化公民館の子どもたちを主な対象としていたため、福井のほんの一部しか魅力を発信していくには育てることができなかった。今後は対象の子供たちを増やしていくことが必要であろう。

(事務局資料)

- ② E&C ギャラリーを利用して、文化芸術を創造し支える人材養成システムを立ち上げ、学生スタッフも参画して展覧会の企画・運営等に取り組んでいる（資料 1-2-35）。

資料 1-2-35 E&C ギャラリー主催企画展（平成 24～27 年度）

■ E&C (Edge & Center) ギャラリーは平成 21 年度より教育地域科学部美術担当教員らが主体となって運営しており、①地域社会の芸術文化振興、②展覧会企画（ワークショップ、ギャラリートーク等関連イベント含む）、③芸術家の活動支援、④アート情報拠点の構築が主なミッションである。E&C ギャラリーでは学生も含めたスタッフが展覧会の企画運営、広報等の活動を中心とした実践的な取組を続けている。

2012/05/09～06/03	小野忠弘展 vol.2 ドローイング作品を中心に一線のカー
2012/06/20～07/01	人物博覧会 I：ルドンから舟越まで A 氏コレクションより
2012/07/07～07/22	松村忠紀を見つけないくつかのモノ達／松村コレクション展
2012/09/01～09/30	丸山直文展 一風をあつめて一／人気作家による大型絵画展
2012/10/06～10/21	佐藤華連展「cage」／写真展
2012/10/24～11/04	高橋ひとみ展「蔓」／写真展
2012/11/10～12/09	中村滝雄展「鉄・表出 -CIRCLE-」／鉄のインスタレーション
2012/12/12～12/24	クリスマス小品展 小さな幸せをあなたに届けます-Merry Christmas-
2013/01/09～01/20	セッション展 11 - Part1／ 岩本宇司のドローイング、反保千佳子の立体、間所節夫のドローイング
2013/01/23～02/03	セッション展 11 - Part2／牧野浩之の油絵、松本和子の彫刻作品
2013/02/06～02/17	セッション展 11 - Part3／伊藤裕貴のドローイング、山田幸代のオブジェ
2013/02/20～03/03	福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 児童生徒造形展 2013 みんなみてみて！ぼくらのアート
2013/03/30～04/14	濱口由美展／染め作品を用いたインスタレーション
2013/05/01～05/12	カレル・ファンリットフェルド展／色彩豊かなコラージュ
2013/05/29～06/09	人物博覧会 II／版画作品とテンペラ作品
2013/06/27～07/07	アートデリバリープロジェクト内覧会／レンタル可能な作品のお披露目
2013/08/07～09/01	五十嵐彰雄展／ミニマルな抽象油彩画
2013/09/14～09/29	湊七雄版画展「重なる風景」／和紙を使った版画作品
2013/10/02～10/20	樞尾正次展／和紙を使った立体造形
2013/10/26～11/17	小林孝亘展「Dream, dreaming us - 私たちを夢みる夢」／絵画展
2013/11/23～12/08	山本一樹展 風の記憶／金属造形の作品展
2013/12/14～12/22	クリスマス小品展 掌の上の心
2014/01/11～01/26	藤村克裕展／立体と絵画作品。ミニマルでコンセプチュアルな造形
2014/01/29～02/16	熊野海展 bifrost／地元福井出身の若手作家。絵画の大作展
2014/02/19～03/02	萬未来子展／地元福井の若手作家。ドローイングインスタレーション
2014/03/08～03/30	深堀隆介展-越の水と金魚-／学生スタッフが企画を担当。3000 人の来場者
2014/04/19～05/11	池内晶子展／絹糸を使ったインスタレーション
2014/05/28～06/08	恩地孝四郎と「月映」展／恩地孝四郎、藤森静雄、田中恭吉の詩と版画
2014/07/05～07/27	市川平展／造形インスタレーション。福井市美術館でのサテライト展示も
2014/10/04～10/26	角文平展 -HOUSING-／立体作品・インスタレーション
2014/10/29～11/09	ナ・ヒュン展／フィールドワークを基にしたドローイングと映像作品
2014/12/13～12/26	クリスマス小品展
2015/06/13～07/12	現代美術への誘い-丸山コレクション展／移転リニューアル後初の記念展
2015/07/18～08/02	AD AND ART-アートディレクター 3 人展
2015/09/05～09/26	残ル身体／小林雅子と松永亨子の造形作品
2015/10/04～10/25	WArtist-越前和紙を拓く-／アートマネジメント講座受講生の成果発表展
2015/09/5～09/26	残ル身体
2015/10/04～10/25	WArtist-越前和紙を拓く-
2015/11/12～12/06	佐々木愛展「もうひとつの場所」
2015/12/13～12/26	クリスマス小品展 2015
2016/01/09～01/31	岡村桂三郎展
2016/02/07～02/28	ORIGIN-はじまりの鼓動

※平成 21 年度から平成 27 年度までに 74 件の主催・共催美術展と 28 件のレンタル共催展を企画・実施

(事務局資料)

●学生の主体的な学修を促すための取組

【アクティブ・ラーニング】

- ① 実践コア科目・地域課題ワークショップ I～IV・地域創生ワークショップでは能動的学習が取り入れられ、学生間での学び合いや自主的な学びにつながっており、アクティブ・ラーニング型教育プログラムを実施し、企業・地域体験型学習プログラムを展開していることは認証評価でも評価されている。地域科学課程では「グループワーク・ガイド」を作成し授業等で活用している（資料 1-2-36～39）。

資料 1-2-36 実践コア科目における能動的学習

① 学校教育課程

学校教育課程においては、「子どもたちの探究心、思考力及び創造性を育み、地域と連携した教育環境を組織できる教員の養成」という課程の目的を実現するために、課程内のすべてのコース・サブコース共通に、学部での早い段階から、子どもたちの成長と発達を促す協働的な実践に参加させるべく、「教育実践研究 A～C」の3つの「実践コア科目」を軸にしたコア・カリキュラムを1年次から4年次まで段階的に履修させる体制をとっている。これらの科目は、学校教育課程に所属する全学生が異なったコース・学年でチームを組み、介護等体験、教育実習、不登校・発達障害児支援、児童生徒の総合学習・特別活動支援等の実践的活動を行い、その成果に関する分析と省察を繰り返すという内容になっている。さらに、それらの授業の延長線上に4年次において履修する科目として「教職実践演習」を開講している。この科目は、4年生が教職課程における学習全体を振り返り、教科専門学習個人誌及び教職学習個人誌を作成することを内容としている。この学習個人誌は、個々の学生の4年間を通じた学習成果のエビデンスの役割を果たすとともに、その一部を毎年公刊することによって、4年次生の学びの履歴を残し、協働探求の成果や経験を後輩に伝えていくという世代継承サイクルを実現している。

② 地域科学課程

地域科学課程は、地域社会における諸課題を解決できる能力を養うことを主目的としており、そのための中心的なワークショップ型科目として「地域課題ワークショップ I～IV」を開講している。これらの科目は、1年次で履修する「ワークショップ I」（グループによる課題探求体験）1～2年次で履修する「ワークショップ II」（諸課題への問題発見的アプローチ）、2～3年次で履修する「ワークショップ III」（諸課題への実践的・分析的アプローチ）、3～4年次で履修する「ワークショップ III」という段階的・発展的な内容となっている。これらの科目は、各学生がグループワークの中で自ら企画立案し、課題について情報収集や調査・分析を行い、得られた情報や探求成果を分かりやすい表現で発信できるようになることによって、社会人として求められる課題探求力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力等の汎用的能力を獲得することを目標としている。そのため、基本的に複数の教員が独自に作成したテキスト等を用いて学生グループの指導にあたりるとともに、課程全体及び各コース等において毎年地域課題ワークショップ各科目に関する報告書を作成している。さらに、ワークショップ IIIに関しては課程全体で報告会を実施し、受講生がその成果を公開の場で発表するとともに、翌年度の受講予定の学生が参考にできるよう配慮している。

(事務局資料)

資料 1-2-37 「地域課題ワークショップ I」の概要

■ スケジュール例（平成 26 年度）

	開催日時	教室振り分け	授業内容 *GW=グループワーク
ガイダンス	4月11日(金) 10:30-12:00 (2限)	1教室に集合	①ガイダンス(授業の目的・進め方・成績評価等) ②2つの大テーマ(「地域の活性化」「地域生活の課題」)に受講生を分ける(約5名×6班×2グループ)
テーマを決め学ぶ			
1回目	4月18日(金) 13:00-16:15 (3・4限)	最初は1教室に集合。 ③以降は2教室に分かれる。	①進め方の確認 ②【GW手法の解説と体験】GWの役割分担、基本的なルール、アイスブレイク ③【テーマ解説】大テーマ背景説明(「地域活性化」,「地域生活の課題」) ④【紹介】レクチャーフィールド(ヒアリング先)の紹介 ⑤フィールドの決定 ⑥【GW】自己紹介、フィールドについて事前学習しておく内容を相談する ★宿題:フィールドについての事前学習を次回までに行う
フィールドの基礎知識を学び地域課題を自分なりに想定する			
2回目	5月2日(木) 13:00-16:15 (3・4限)	最初は1教室に集合。 ③以降は2教室に分かれる。	①進行確認とGWの手順説明 ②【GW】質問項目のカテゴリーをつくる ③整理した大・小カテゴリー、質問項目について全体報告し、質疑を受ける(各教室毎) ④次回のアナウンスと班の確認作業 ★宿題:ヒアリングシート案を作成、フィールド・テーマの学習の継続
3回目	5月16日(金) 13:00-16:15 (3・4限)	最初は1教室に集合。 ③以降は2教室に分かれる。	①進め方の確認 ②【手法の解説と体験】質問紙の作り方とヒアリング手法のレクチャー ③【GW】事前学習内容の共有と、項目別に聞くべき具体的内容の検討 ④ヒアリングの具体的内容を全体報告し、質疑を受ける(各教室毎) ★宿題:ヒアリングシートの完成 →アポイント(授業終了後速やかに)→一次ヒアリング調査の実施(6/6までに)
フィールドにのっての地域課題にふれ、問いを深めて課題を構造化する			
4回目	6月6日(金) 13:00-16:15 (3・4限)	最初は1教室に集合。 ③以降は2教室に分かれる。	①進め方の確認 最終プレゼンに向けての中間とりまとめ ②【手法の解説と体験】ヒアリングの内容分析と課題(自己・地域)の構造化と深い問いへの気づき プレゼンテーションのポイント(書いてある文章を読むのではない!) ③【GW】②を踏まえて、他のグループに向けて、ヒアリング内容のプレゼンテーション(フィールドにとって何が地域課題であったか。更に聞くべきポイントはなにか。)の準備(ボード、黒板を利用) ④プレゼンテーション(各教室毎) ⑤【GW】今後の取り組み方について ★宿題:深い問いを聞くための地域課題学習・二次ヒアリングの実施(7/11までに)
5回目	6月20日(金) 13:00-14:30 (3限)	2教室毎	①経過の確認・個別相談
地域課題を実感を持って理解し、自分(自分たち)ができることを考える			
6回目	7月4日(金) 13:00-16:15 (3・4限)	2教室毎	①【手法の解説と体験】プレゼンテーションの内容・作り方・伝え方 ②グループ内ラウンドテーブル(個人として何を感じたか[1人15分]→グループとして感じたことの議論) ③【GW】ラウンドテーブルを踏まえたヒアリング内容の整理、報告会の準備 ★宿題:報告会で用いるPPTや配布資料等の完成
7回目	7月18日(金) 13:00-16:15 (3・4限)	2教室毎	①【手法の解説と体験】報告する意味・意義、他者へコメントする意味・意義 ②報告会(「①自分たちの活動内容」、「②課題の背景・原因」、「③地域の解決策や取組」、「④個人にとっての発見・驚き・共感したこと」ができること、「⑤グループとしての結論、できること」)
8回目	8月1日(金) 13:00-14:30 (3限)	最初は1教室に集合。 ③以降は2教室に分かれる。	①【手法の解説と体験】学習・課題意識の定着と更なる学習と地域貢献への動機づけ ②ラウンドテーブル(各教室6グループをシャッフル) ③授業振り返りと評価アンケート

(産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業 平成 26 年度福井大学事業報告書より抜粋)

■ 「地域課題テーマと各フィールド」(平成 26 年度)

大テーマ	フィールドテーマ	受入先
地域の活性化	①まちなか A (事業者の視点)	駅前商業者
	②まちなか B (まちづくり活動の視点)	宮永不動産, 商工会青年部, きちづくり福井
	③郊外 A (新興住宅地)	社南公民館
	④郊外 B (伝統的住宅地)	田原町デザイン会議
	⑤里山 A (元気な過疎自治体)	池田町
	⑥里山 B (獣害と集落のコミュニティ)	福井県奥越農林総合事務所
地域生活の諸課題	①まちに暮らす外国人との共生	インターナショナル・クラブ
	②高齢者・障がい者の生活と医療	オレンジホームケアクリニック
	③地域・家族と医療をつなぐ	林病院
	④子どもの居場所と遊び	特定非営利活動法人福井県子ども NPO センター
	⑤子育てをめぐる諸問題	福井市市民生活部男女共同参画・子ども家庭センター
	⑥市民による文化・芸術活動推進	福井芸術・文化フォーラム

(事務局資料)

資料 1-2-38 「地域創生ワークショップ（地域科学課程）」の概要

「地域創生ワークショップ」

地域創生ワークショップは、平成 25 年度から開講された新しいワークショップです。この授業は「地域創生」をテーマとして、福井県内の行政木かんっや福井県内の中小企業をフィールドとして、調査・発表を行うものです。学内での学習だけでなく学外での調査・分析活動を複数の学生が協力しながら行うことによって、多岐にわたる地域創生に関する課題を理解するとともに、各学生の個別の研究テーマをより深く分析できる能力を身につけることを目標としています。

本年度は、福井県の「観光」を取り上げることにしました。提携の相手は、公益財団法人福井観光コンベンションビューローです。同法人の山北氏及び木村氏と相談の上、コンベンションビューローが今年行う予定であった福井県内観光地の外国人モニター調査を、創生 WG の参加学生とともに行うことになりました。これはえちぜん鉄道沿線の 6 市町村庁の観光担当者でつくる「ふくきたエリア WG」のメンバーとともに、外国から福井に来る観光客にお勧めの観光プランを提案し、そのプランをもとに実際の学生の案内のもとに外国人のモニターが福井県の観光地を回り、その感想等についてアンケートに回答してもらい、外国人からみた福井県の観光地の評価・問題点の指摘を行うという取組です。また今回、福井大学の創生WGとのコラボレーションによって、創生WGの参加学生が最初の旅行プランを提案することで、大学生（女子学生）が勧める福井県観光地の魅力を紹介するという取組の一つとなりました。

スケジュール

事前調査：①福井観光コンベンションビューローとの打合せ ②福井県の観光地の学習

旅行プランの作成：①福井市内プラン ②大野市プラン ③三国・あわらプラン 1

④三国・あわらプラン 2 ⑤勝山プラン ⑥永平寺プラン

旅行モニタリング（3月）

アンケート集計・分析と報告書作成

（産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業 平成 26 年度福井大学事業報告書より抜粋）

資料 1-2-39 グループワーク・ガイド



Chapter 1 グループワークの意義

1-1 グループワークの意義
—グループでの学びを次の学びにつなげよう—

- **これからの社会で生きていくために**
皆さんがこれから働くことになる仕事の現場や、またそれを取り巻く社会は、先行が見えにくい状況にさらされています。常に正解のない問題に直面しているといっても過言ではありません。皆さんには、大学の4年間を、こうした状況に対処できる力を少しでも身につけておくことを目指して過ごしてほしい、と考えています。
- **ジェネリック・スキル（汎用的能力）**
では、どのような力が社会では求められるのでしょうか。中学・高校までに身につけていくはずの基礎学力、大学の講義や自ら習得などで求める専門知識が必要なのは言うまでもありません。しかし、社会に出ると、仕事や地域社会で直面する具体的な課題に、それぞれ臨機応変に取り組みが必要になります。このように基礎学力や専門知識を、言葉や行動の異なるさまざまな現場に活かすために必要なことを「ジェネリック・スキル（汎用的能力）」と呼びます。
「ジェネリック・スキル」は、企業が採用したいと思う人材にも重要となっています。



① 基礎学力・専門知識・ジェネリック・スキル
② The Univ. of Fukui, Faculty of Education & Regional Studies

Chapter 2 グループワークの技術

2-1 グループワークの基本的な流れ
—全体像と4つのステップで把握する—

グループワークには様々な形がありますが、基本的な流れと活動内容は、下図のようにまとめることができます。



「問いを立てる」から「発表する」は、螺旋状に何度も繰り返されながら、発展してゆくプロセスです。
1回の授業の中でひとつのサイクルが回ることもあります。15回の授業全体を大きなひとつのサイクルとして捉えることもできます。
その態度「振り返り」、自分たちの到達点を確認しながら進めましょう。

8 ©The Univ. of Fukui, Faculty of Education & Regional Studies

2-6 様々なファシリテーション・グラフィック
—議論の内容や目的に応じて使い分け—

ファシリテーション・グラフィックには様々なフォーマットがあります。議論の内容や目的に応じて使い分けができると、意見が出しやすい、アイデアをまとめやすいなどの効果が生まれます。

- **グループヒンギス・関係図型**
KJ法で、付せん紙に書き出したアイデアや意見をグループ化して見出しをつけた後、線で囲み、各グループの関係を線でつなぐのがこの型です。
グループディスカッションのまとめ方として一般的な型です。そのまま発表用のポスターとして活用でき、その際には、指し示しながら説明することができます。
- **線図切り型**
ボードの中央に線1本を引くだけで、スペースを左右に区切り「メリット・デメリット」「賛成意見・反対意見」を左右に書き分けるだけで、意見を整理しながら議論を進めることができます。
- **4象限型・2軸型**
軸を2つとって、「+」で受け取ります。「4象限シート」とも呼ばれます。また意見が出にくいポイントを発見したり、出てきたアイデアや情報を図上に配置してバリエーションを見たり、整理・検討して結論を導くなどに使えます。
例えば、「効果性が高くて簡単なことから取り組もう」と決められた場合、縦軸に「効果性（低い・高い）」、横に「実行性（困難・簡単）」を設定します。「効果性が高く実行性が簡単」が高くて困難「低くて簡単」で低くて困難の4つのエリアができます。アイデアを配置していくと取組む優先順位が決められます。
- **マトリクス型**
軸を2つとって、情報の引き出しです。縦横の両軸で表を書き、ひとつひとつの枠に内容を記入する。縦の1行目、横の1行目に項目を設定します。空枠時に、設定した縦横の項目に応じて、情報を書き入れています。
遅れなく、ダラダラとアイデアを出したい、アイデアや意見を整理したい、作業内容を役割分担したいなど、項目立て次第で様々な活用できるフォーマットです。



16 ©The Univ. of Fukui, Faculty of Education & Regional Studies

(教員・学生のためのグループワーク・ガイド～チームで養う学ぶ力：全32頁、2014年9月発行より抜粋)

② コア科目以外においても、ワークショップ型科目の占める割合が高く、少人数教育・対話討論型授業など多様な教育方法がとられ、学生の評価も高い(資料 1-2-40, 41, P1-56 前掲資料 1-2-27)。

資料 1-2-40 主体的学習を意識した授業形態と指導方法の工夫

■ 主体的学習を意識した授業形態 (平成 26 年度開講科目)

課程	科目数	ワークショップ型科目		テュートリアル教育科目		グループ学習を導入した卒業研究		その他	
		科目数	割合	科目数	割合	有	無	科目数	割合
学校教育課程	544	157	28.9%	41	7.5%	40%	7.4%	0	0.0%
地域科学課程	210	70	33.3%	11	5.2%	20%	9.5%	0	0.0%

※平成 26 年度開講科目を対照に調査し教員から解答のあった科目の総数である。割合はその科目数に対する % で示す。
 ※※地域課題ワークショップ、地域創生ワークショップ、教職実践演習、特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」の実践科目(学校-コミュニティ共生)などの主要なワークショップ型科目は全て第 2 期に導入されたものであり、学生の主体的な学習が促進されている。

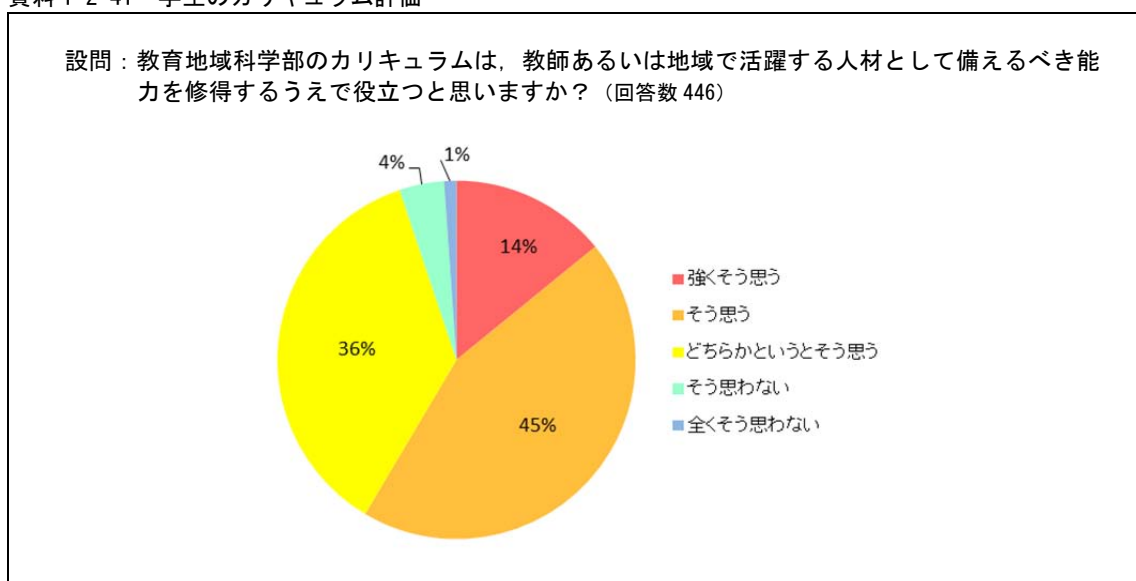
■ 授業における学習指導方法の工夫 (平成 26 年度開講科目)

課程	授業区分	科目数	学習指導法上の工夫									
			少人数教育		対話・討論型		フィールド型		メディア活用		T A 活用	
			科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合
学校教育課程	講義	293	135	46%	127	43%	41	14%	183	62%	14	5%
	演習	111	82	74%	75	68%	35	32%	45	41%	16	14%
	実験・実習	140	123	88%	80	57%	34	24%	44	31%	22	16%
地域科学課程	講義	130	51	39%	42	32%	17	13%	83	64%	4	3%
	演習	72	54	75%	43	60%	33	46%	20	28%	2	3%
	実験・実習	6	5	83%	1	17%	6	100%	0	0%	0	0%

※平成 26 年度開講科目を対照に調査し教員から解答のあった科目の総数である。割合はその科目数に対する % で示す。

(事務局資料)

資料 1-2-41 学生のキャリアム評価



(平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識満足度調査」結果より抜粋)

【単位の実質化】

各学年とも各学期に履修できる専門教育科目は30単位以内としている(資料1-2-42)。様々な方策によって授業時間外の自主的学習を奨励しており、授業時間外の学習時間の確保を図っている(資料1-2-43)。本学部生の1週間あたりの授業外学習時間の平均は3.7時間(平成22年度)から6.1時間(平成25年度)と1.65倍に増加しており、全国の文系学部平均を上回っている(資料1-2-44)。

資料1-2-42 教育地域科学部学生の各学期における履修単位数の制限に関する取扱(抜粋)

教育地域科学部学生の各学期における履修単位数の制限に関する取扱いについて	
教育地域科学部規程第4条第3項に定める履修単位数の制限に関する取扱いについては、次のとおりとする。	
(1) 各学期において履修する授業科目の単位数の制限は、専門教育科目を対象とする。	
(2) 各学年とも、各学期に履修できる専門教育科目は、30単位以内とする。	
(3) 特別な理由により、上記(2)の単位数を超えて履修を希望する者は、助言教員の承認を得るものとする。	

(事務局資料)

資料1-2-43 授業時間外学習を促す工夫

課程	科目数	レポート		ミニテスト		中間テスト		授業外の学習指示		その他	
		科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合
学校教育課程	544	281	51.7%	68	12.5%	32	5.9%	341	62.7%	41	7.0%
地域科学課程	208	92	44.2%	18	8.7%	12	5.8%	114	54.8%	30	14.4%

※平成26年度開講科目を対照し調査し教員から解答のあった科目の総数である。割合はその科目数に対する%で示す。

(取組の実例)

- ・受講学生に英語で書かれた教科書の担当箇所についてオーラルレポートを課している。授業時間外で1時間程度内容についての質問時間を設けている。
- ・毎回、質問や要望事項を提出させ、次回授業の冒頭で回答とミニ討論を開催している。
- ・個人レポートの作成以外に、グループでの研究計画、中間発表、最終発表とその際のレジュメ、パワーポイント等の作成を指示している。
- ・TOEIC受験を促している。
- ・関係する学外催事への参加を促している。
- ・半期に何回か、レポーター、コメンターを務めさせ、その際レジュメ作成を指示している。

(事務局資料)

資料1-2-44 授業時間外学習時間

	教育地域科学部	医学部	工学部
本学学生(時間)	6.1	9.7	5.8
全国平均※(時間)	3.31 ¹⁾	6.08 ²⁾	5.63 ³⁾

※全国大学生生活協同組合連合会による全国の国立及び私立大学の学部学生調査(2012年10月～11月,回収数8,609)

1) 文系の平均 2) 医歯薬の平均 3) 理系の平均

(平成25年度学生生活実態調査より抜粋)

【教室外学修プログラム等の提供】

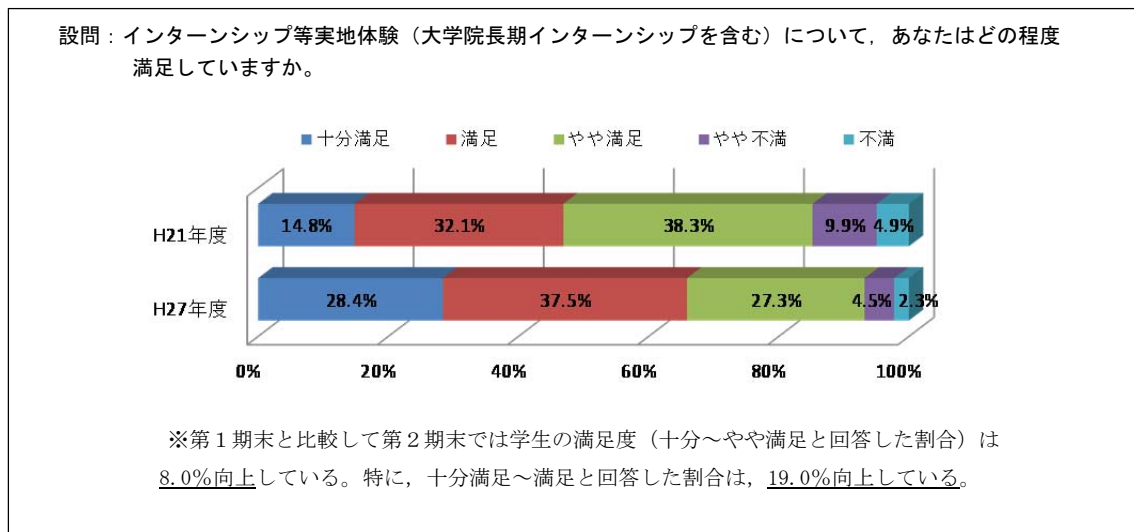
職業的意識の喚起や実社会体験の機会拡大を図るため福井県インターンシップ制度を活用した企業等インターンシップを実施しており、学生からの評価も概ね高い（資料1-2-45、46）。

資料 1-2-45 福井県経営者協会を通してのインターンシップ参加状況

■ 福井県インターンシップの参加状況							
平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度	
(長期)	(一般)	(長期)	(一般)	(長期)	(一般)	(長期)	(一般)
0	18	0	29	1	28	0	33
<p>※平成 24 年度に福井県インターンシップ制度が変更（長期インターンシップが追加）されたため平成 24 年度以降の状況を掲載</p>							
■ 学生のコメント							
年度	学生	派遣先	派遣学生の感想				
平成25年度	A	民間企業	社会人の経験ができてとてもよかった。自分の無知さを改めて実感し、将来について深く考える良い機会となった。				
	B	官公庁	園芸センターというインターンシップ以外では体験できない施設に行けて非常にいい経験になった。実際に体験してみて園芸センターで働きたいとかがえるようになった。園芸センターに就職体験できている学生は県外含めても私一人で少し心細かったのですが、次回からはできれば複数人を受け入れてもらって互いに交流したり協力したりできると良いと思った。				
平成26年度	C	官公庁	今回のインターンシップの参加を通じて、社会で実際に働くことの大変さや、やりがいを学ぶことができました。社会にでたら、複数の人と協力して、人との関わりの中で仕事をする環境がほとんどだと思うので、学生のうちに複数の人と協力して一つのことを達成する経験を数多く積んでおく必要があると実感しました。そのため、ボランティア活動などに積極的に参加していこうと思います。また、自分の興味関心のある分野に就職することが大切だということを教えていただいたので、これからの学生生活を通して自分の興味関心はどの分野にあるのかということを考え、見つけていきたいです。そのために、様々な経験を積んで、見識を広げて選択肢を幅広いものにしていきたいです。これから先の学生生活でたくさん本を読んで、幅広い教養を身につけられるようになりたいです。今回のインターン体験はとても刺激になり、私の当初の動機である「就職について深く考える機会を得たい」という願いは達成され、今後の人生設計をより深めることができました。今回のインターン体験で学んだことを無駄にすることなく、今後の学生生活を有意義なものとし、今後の人生をより実り深きものにしていきたいと思っています。				
	D	官公庁	インターンシップに参加して、自分が将来何をしたいかや働く大変さを学び、自分自身と向き合うとても良い経験になった。イメージだけでは分からない職場の仕事内容や雰囲気を感じることができたし、実際に働いている人の話を聞いたりして大変良かった。職員の方が「今の学生は就活の準備は面接の受け答えや、ESもとても完璧にできているが、実際に社会人としての準備ができていないかな」と言っており、コミュニケーションや、分からない事は躊躇せずに分かると伝えることが大切だと学んだ。また今回のインターンシップに参加して、一日中パソコンに向かうより、現場に出たりするような仕事に就きたいと感じた。このことは参加しなかったら分からなかった事なので、インターンシップに参加して将来の職業選択のヒントを得ることができ、とても良い経験になった。				
	E	官公庁	今回のインターンシップで学んだことは、私は公務員を就職の第一志望にしているが、一概に役所においてもどのような仕事をするのかは分からないし、福井ではジョブローテーションによって配属された課でも3~4年で異動となってしまうので様々な知識が必要になってくるということである。インターンシップを通じ公務員の仕事に実際に触れ、どのような業務を行っているのか、どういう仕組みで成り立っているのか、さらに実際に働いている人たちはどのような気持ちで仕事をしているのかを知ることができた。また基本的なことだが、大学では学べない、上司への挨拶やお世話になった方々へのお礼など社会人としてのマナーを身につけることができた。今回の体験を通じて明確に自分の目標を公務員に定めることができた。目標を達成するためにも今回の体験を将来に活かすためにも、公務員試験に向けてこれからの勉強を頑張っていきたい。				
平成27年度	F	官公庁	今回のインターンシップを通して、健康福祉センターでは、人前に出て講演をするような目立つことから、事務作業のような地味な仕事までこなしていることを知りました。健康福祉センターの方々はそのような仕事でもきっちりこなしていました。きっと他の会社でも同じであると思うので、社会に出たとき仕事の大小や内容に関わらず、何事においても真摯に取り組むようにしたいと思いました。今回のインターンシップで、今まで知らなかった保健所の仕事内容や雰囲気について学ぶことができ、とても良い機会であったと思います。今回は官公庁へのインターンシップだったので、次のインターンシップでは民間の企業で経験したいと考えています。				
	G	官公庁	今回のインターンシップ研修を通して学んだことは、市役所の業務内容などでは無く、市職員の人柄や業務に対する思いなどを聞いたことが重要だったと思います。研修中にも職員と接する機会が多く、右も左も分からない私に優しく接してくれました。また、市民の少々無理不届きな問い合わせに対しても一から丁寧に説明していました。このような人柄の良さや、業務に対する強い思いが市職員を務める上で必要なことなのだと感じました。私の周りにも公務員を目指す仲間がいます。その人たちになぜ公務員を目指すのか？と聞かけるとほとんどの人が安定しているからと答えます。私も以前はその中の一人でした。しかし今回の研修を終えて、公務員は決して安定しているからという理由で務まる職業ではないことを痛感しました。市民のために、市のために、将来を担う子ども達のために働きたいという強い思いを持つことが必要だと分かりました。これからの学校生活、公務員試験の対策で時間を追われる日々が続きますが、その中でも自分の町のために働きたいという思いをどんどん伸ばしていきたいです。				

(事務局資料)

資料 1-2-46 インターンシップ等実地体験についての満足度（教育地域科学部）



（平成 21 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【学習意欲向上方策】

学業、学内外での諸活動、社会貢献について優れた業績を残した学生を卒業時に学長表彰または学部長表彰する制度を設けている（資料 1-2-47）。その他、意欲の低下した学生に対して助言教員、教務課、学生総合相談室と連携した対応を行っており、学生支援に対する学生の満足度は高い（資料 1-2-48, 49）。

資料 1-2-47 教育地域科学部における表彰学生の選考に関する申合せ

教育地域科学部における表彰学生の選考に関する申合せ

教育地域科学部長表彰学生の選考及び「福井大学学生表彰要項」及び「福井大学学生表彰に関する申合せ」に基づく学長表彰学生の選考について次のとおり申し合わせる。

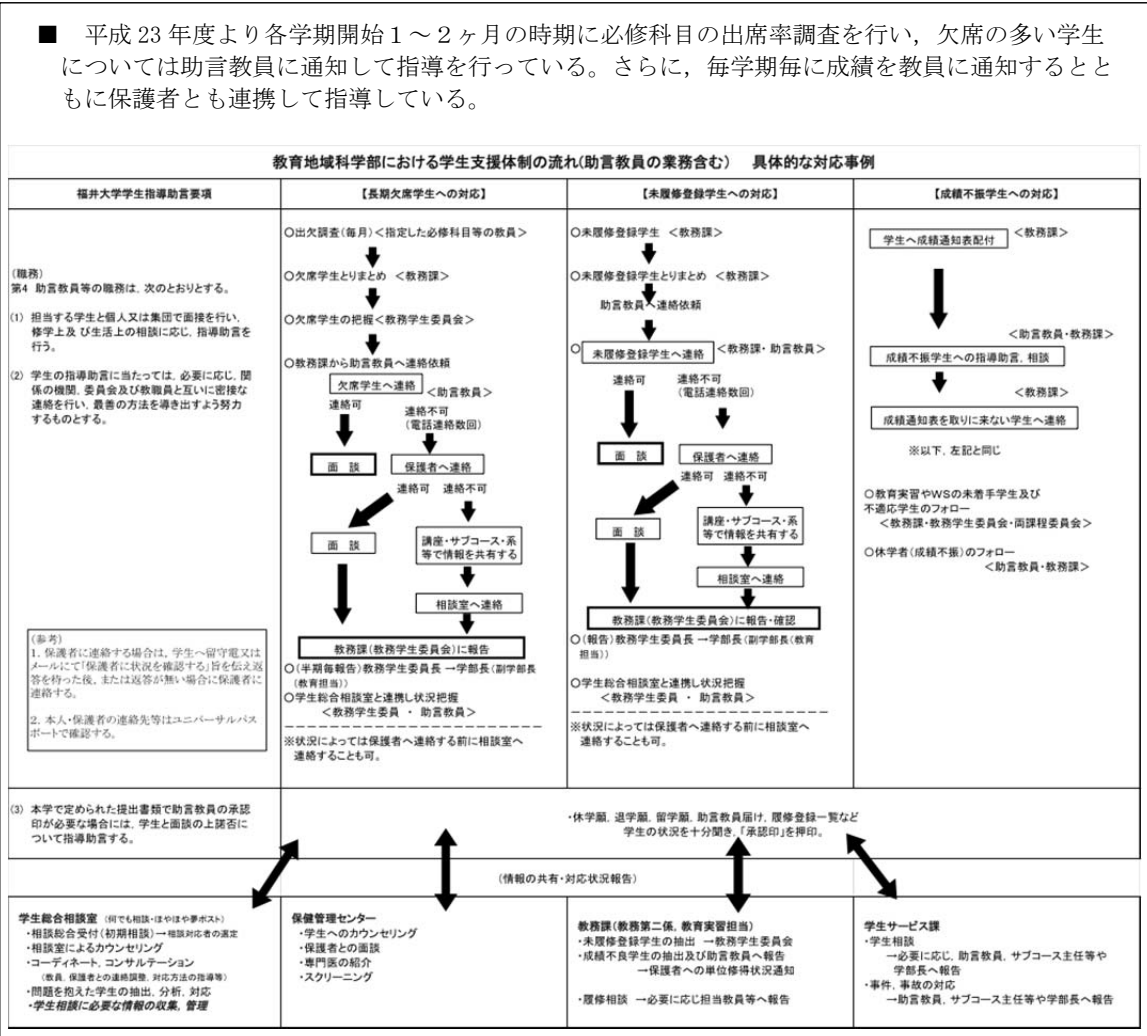
1. 優秀学生の選考方法

優秀学生の選考について、次のとおり取扱う。

 - (1) 講座主任等は、各コース（サブコース）の当該年度卒業予定学生から、優秀学生 1 名を選考し、別紙様式の推薦書を添えて教務学生委員会に推薦するものとする。なお、推薦にあたっては、学業成績のみならず人物並びに学内外での諸活動、社会貢献等にも留意するものとする。
 - (2) 学部長は、(1) により推薦のあった優秀学生を表彰するものとする。ただし、(3) の学長表彰学生は除く。
 - (3) 教務学生委員会は、各講座等から推薦のあった優秀学生の中から、次の方法により学長表彰学生（成績優秀学生）1 名を選考するものとする。
 - ① 4 年次前期までの成績について「優」、「良」、「可」を「3 点」、「2 点」、「1 点」として読み替え、それぞれ単位数を乗じたうえで集計し、合計点を総取得単位数で除した数値が最も高い者。
 - ② 同点の場合は、(1) の推薦理由を考慮して選考する。
 - (4) 教務学生委員会は、選考した学長表彰学生 1 名を「推薦書」を添えて、学部長に推薦するものとする。
 - (5) 教務学生委員会は、各コース（サブコース）の優秀学生名及び選考の経緯を教授会に報告するものとする。

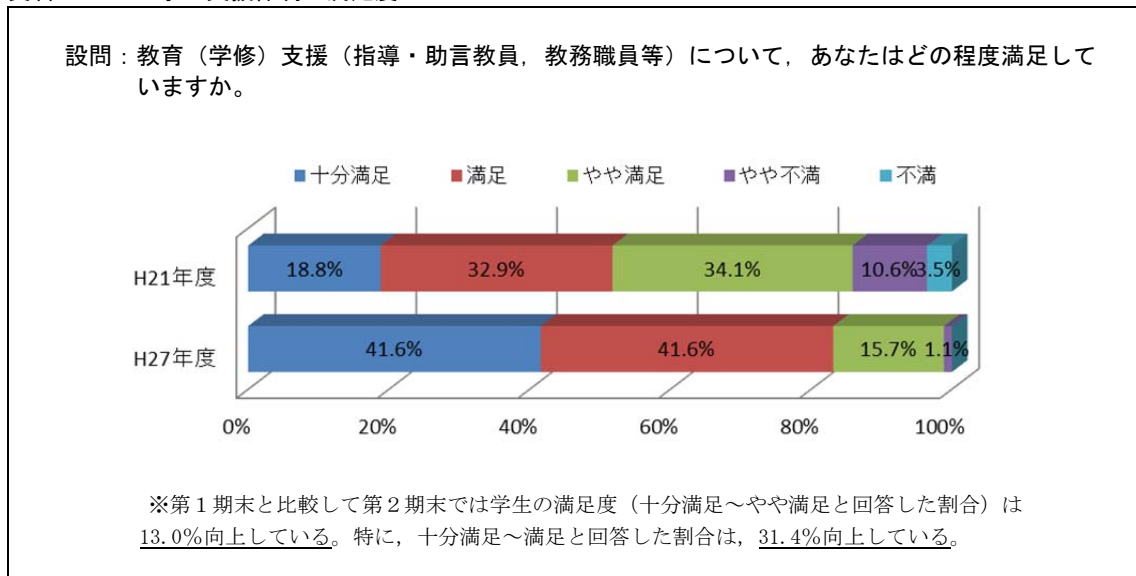
（事務局資料）

資料 1-2-48 教育地域科学部の学生支援体制



(事務局資料)

資料 1-2-49 学生支援体制の満足度



(平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋)

【学習環境の整備】

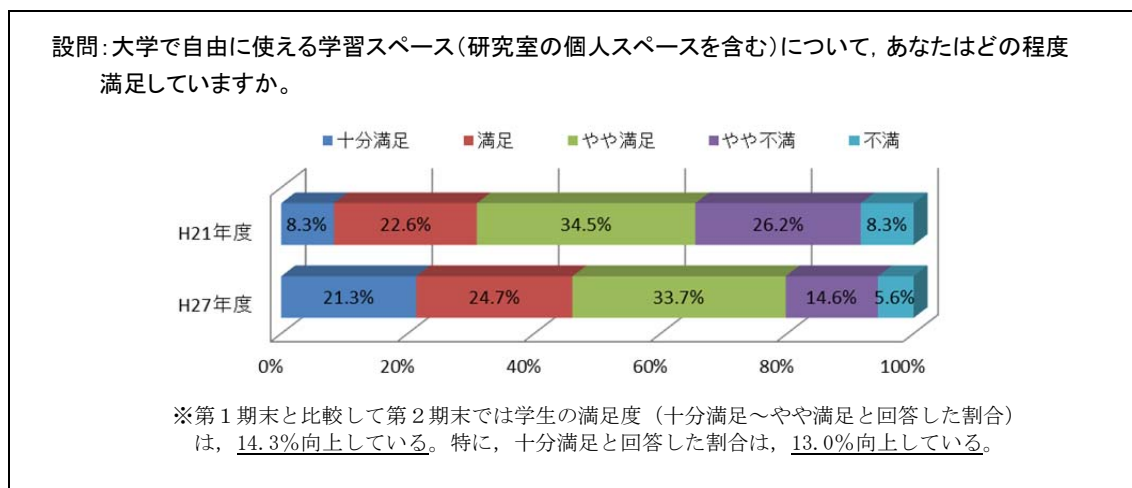
図書館利用時間拡大や、自習にも活用できる少人数用教室や語学学習のための e-ラーニングシステムの整備等、授業時間外学習・自主的な学習の場を積極的に提供している。修学環境についての学生の満足度も概ね高く、第1期に比して、向上した(資料 1-2-50, 51)。

資料 1-2-50 自主的学習環境の整備状況

学部等	施設名		設置数	利用時間	備考
総合情報基盤センター	総合情報基盤センター (第1端末室)		1室 (パソコン62台等)	平日 8:30~20:00	
	総合情報基盤センター (第2端末室)		1室 (パソコン10台等)		
総合図書館	第一閲覧室		1室 (パソコン8台等)	平日 6:00~22:00 土日休日 9:00~16:00 (試験期間中の土日休日は18:00まで)	
	第二閲覧室		1室 (パソコン4台等)		蔵書検索用パソコン1台含む
	グループ学習室		3室 (ホワイトボード)		
	展示ホール		1室 (ホワイトボード)		グループ学習室の補助的役割として、展示ホールの一部を学習の場として提供
	マルチメディアコーナー		1箇所 (パソコン15台等)		
	ラウンジ		1箇所 (パソコン5台等)		蔵書検索用パソコン1台含む
	カウンター		1箇所 (パソコン20台, iPad9台等)		平日 9:00~22:00 土日休日 13:00~16:00 (試験期間中の土日休日は18:00まで)
語学センター	言語開発センター	DVDステーション	1箇所, 12席 (DVD視聴TV12台等)	平日 11:00~20:00 夏期・春期休業中 11:00~17:00	文京キャンパス (総合図書館内)
		リーディング・ラウンジ	1箇所, 15席		
		個人語学演習室	24室 (e-learningシステム等)		
		多目的演習室	4室		
	Global Hub	1室	平日 9:00~17:00	SA貸出用パソコン1台 テレビ(英語ニュース放映) 英字新聞, 留学情報誌配置	
大学会館	談話室	1室	平日 8:30~20:00	学生が憩いの場として随時利用。留学情報誌配置	
教育地域科学部	学生研究室		26室	24時間	
	総合情報処理演習室		1室 (パソコン101台等)	平日 8:30~19:30	
	コンピュータ演習室		1室 (パソコン25台等)	24時間	
	講義室		29室	—	講義が行われていない場合に利用可能

(事務局資料)

資料 1-2-51 学習スペースについての満足度



(平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋)

●その他、教育内容・方法に関する例

【インクルーシブな教育環境】

学生支援、メンタルヘルス等に関する FD を定期的実施するとともに (P1-27 前掲資料 1-1-31)、特別な支援が必要と考えられる留学生については国際交流センター、発達障害など気がかりな学生に対しては学生総合相談室が中心となって、個別的な支援を行う体制が整備されている (資料 1-2-52)。

資料 1-2-52 特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への支援の実施例

実施組織	対象者	実施事項
教育地域科学部	留学生	<ul style="list-style-type: none"> 国際交流センターによる、日本語教育や修学上及び生活上の指導助言の実施 学生チューター(日本人学生、先輩留学生)の配置 日本語補講による学習支援
	障害のある学生	<ul style="list-style-type: none"> 施設設備のバリアフリー化(スロープ、多目的トイレなど)
	発達障害	<ul style="list-style-type: none"> 発達障害学生(診断書有)に対し、助言教員、保健管理センター、教務課及び学生総合相談室で支援チームを組み、支援方法を協議及び個別の支援計画を作成し、定期的(学期の始まる前)にサポート会議を実施

障害のある学生数(平成 26 年度)

学部	人数	区分	障害の種類
教育地域科学部	4	発達障害 その他	高機能自閉症等 3 病弱・虚弱 1

(事務局資料)

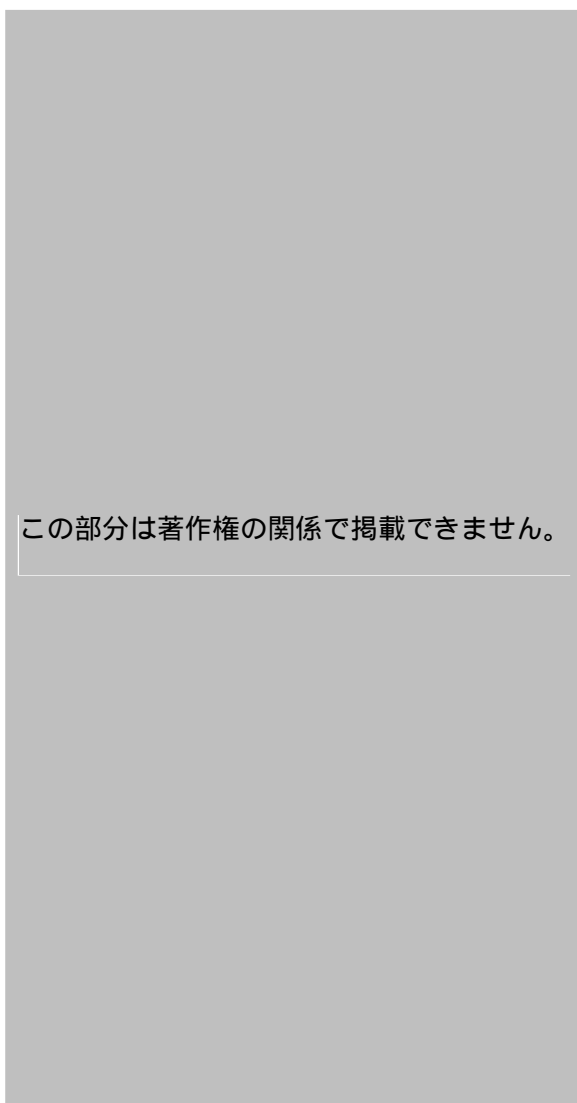
【高大連携】

高校からの依頼を受けて大学教員が高校に出向き専門分野の講義を行う「訪問講義」を実施している(資料 1-2-53)ほか、平成 25 年度より高校生と大学生が交流する授業「教職実践研究公開クロスセッション」を実施しており、県内の高校生の参加者は増加している(資料 1-2-54)。

福井大学教育地域科学部 分析項目 I

資料 1-2-53 高校での訪問講義（平成 25～27 年度分のみ掲載）

(平成 25 年度)			
訪問先	内容	学年	大学教員数
足羽高校	専門講義	2・3 年	教育 1 名
美方高校	専門講義	2 年	教育 1, 工 1 名
美方高校	専門講義(10/30)	1 年	教育 1, 工 1 名
高志高校	専門講義	2・3 年	教育 1, 医 1, 工 1 名
武生高校	専門講義	2 年	教育 1, 医 1, 工 1 名
羽水高校	専門講義	2 年	教育 3, 医 1, 工 5 名
三国高校	専門講義	2・3 年	教育 1, 医 1, 工 2 名
武生東高校	専門講義	3 年	教育 2, 医 1, 工 1 名
敦賀高校	専門講義	2 年	教育 2, 工 3 名
鯖江高校	専門講義	2・3 年	教育 1, 工 1 名
丸岡高校	専門講義	2 年	教育 1, 工 1 名
藤島高校	専門講義	2 年	教育 1, 医 2 名
大野高校	専門講義	2 年	教育 1, 医 2, 工 1 名
仁愛女子高校	専門講義	1・2 年	教育 1, 医 1, 工 1 名
若狭高校	専門講義	1 年	教育 2, 医 1, 工 1 名
金津高校	専門講義	2 年	教育 2, 工 3 名
丹南高校	専門講義	1・2 年	教育 1 名
丹生高校	専門講義	2 年	教育 1, 工 1 名
(平成 26 年度)			
訪問先	内容	学年	大学教員数
美方高校	専門講義	2 年	教育 1, 工 1 名
羽水高校	専門講義	2 年	教育 3, 医 1, 工 5 名
三国高校	専門講義	2・3 年	教育 1, 医 1, 工 1 名
高志高校	専門講義	2・3 年	教育 1, 医 1, 工 1 名
勝山高校	専門講義	2 年	教育 1, 医 1, 工 1 名
武生東高校	専門講義	2 年	教育 3, 医 1, 工 5 名
三国高校	専門講義	2・3 年	教育 1, 医 1, 工 2 名
武生東高校	専門講義	3 年	教育 2, 医 1, 工 1 名
敦賀高校	専門講義	2 年	教育 2, 工 2 名
若狭高校	専門講義	1 年	教育 2, 医 2 名
美方高校	専門講義	1 年	教育 1, 工 1 名
鯖江高校	専門講義	2・3 年	教育 1, 工 1 名
丸岡高校	専門講義	2 年	教育 1, 工 1 名
大野高校	専門講義	2 年	教育 1, 医 2, 工 1 名
藤島高校	専門講義	2 年	教育 1, 医 2 名
仁愛女子高校	専門講義	1・2 年	教育 1, 医 1 名
金津高校	専門講義	2 年	教育 2, 工 3 名
丹生高校	専門講義	2 年	教育 1, 工 1 名
丹南高校	専門講義	1・2 年	教育 1 名
(平成 27 年度)			
訪問先	内容	学年	大学教員数
武生高校	専門講義	2 年	教育 1, 医 1, 工 1 名
美方高校	専門講義	2 年	教育 1, 工 1 名
羽水高校	専門講義	2 年	教育 3, 医 1, 工 5 名
三国高校	専門講義	2・3 年	教育 1, 医 1, 工 2 名
高志高校	専門講義	2 年	教育 1, 医 1, 工 1 名
武生東高校	専門講義	3 年	医 1, 工 1 名
若狭高校	専門講義	1 年	教育 2, 工 1 名
敦賀高校	専門講義	2 年	教育 1, 医 1, 工 2 名
金津高校	専門講義	2 年	教育 3, 工 2 名
美方高校	専門講義	1 年	教育 1, 工 1 名
鯖江高校	専門講義	2・3 年	教育 1, 工 1 名
丸岡高校	専門講義	2 年	教育 1, 工 1 名
武生東高校	専門講義	2 年	工 1 名
大野高校	専門講義	1・2 年	教育 1, 医 2, 工 1 名
藤島高校	専門講義	1・2 年	教育 1, 医 2 名
仁愛女子高校	専門講義	2 年	教育 1 名
丹生高校	専門講義	1～3 年	教育 1, 工 1 名
丹南高校	専門講義	1～3 年	教育 1 名



クロスセッション参加者数

【平成25年度】

高校生22校から117名（県内66名，県外51名）
その他21名（学校教員，他大学教員）
本学学生296名（授業受講者）
本学教員22名
本学院生20名

【平成26年度】

高校生13校から77名（県内）
その他 8名（学校教員，他大学教員，他大学院生，研究者）
本学学生439名（授業受講者）
本学教員23名
本学院生18名

【平成27年度】

高校生17校から98名（県内）
その他 6名（学校教員，他大学生，県教育委員）
本学学生424名（授業受講者）
本学教員38名
本学院生 5名

（平成 25 年 12 月 22 日 日刊県民福井）

（事務局資料）

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

① 体系的な教育課程の編成

教養教育と専門教育のバランスの取れたカリキュラムを構築するとともに、学習指導方法も工夫され、ディプロマ・ポリシーに沿った人材養成が行われており¹⁾ 学生の評価も第1期より向上している²⁾。教員養成については県教育委員会と協議の上教員養成スタンダードを策定して修得すべき能力を明示しており、教育関係者の期待に応えている³⁾。

- | | | | |
|----|-----------|------------------|-------|
| 1) | 資料 1-2-2 | : ディプロマ・ポリシー | P1-38 |
| | 資料 1-2-3 | : カリキュラム・ポリシー | P1-39 |
| | 資料 1-2-7 | : カリキュラム・マップ | P1-44 |
| | 資料 1-2-8 | : 共通教育と専門教育の関係 | P1-45 |
| | 資料 1-2-12 | : 教養・共通教育に対する満足度 | P1-47 |
| | 資料 1-2-41 | : 学生のカリキュラム評価 | P1-67 |
| 2) | 資料 1-1-32 | : 学部教育に対する学生の評価 | P1-28 |
| 3) | 資料 1-2-5 | : 教員養成スタンダード | P41 |

② 実践能力の育成

教育実践研究や地域課題ワークショップ等のコア科目を中心に多様な教育方法や履修形態が取り入れられ⁴⁾、協働して課題を解決する能動的学習を通して実践力が涵養され、第1期と比して学生の評価も高い⁵⁾。

- | | | | |
|----|-----------|---|----------|
| 4) | 資料 1-2-13 | : 教育実践コア科目の概要 | P1-48 |
| | 資料 1-2-15 | : 学生の意見等 (探求ネットワーク・ライフパートナー) と教職実践演習報告書 | P1-49~50 |
| | 資料 1-2-36 | : 実践コア科目における能動的学習 | P1-63 |
| | 資料 1-2-39 | : グループワーク・ガイド | P1-66 |
| 5) | 資料 1-2-16 | : コアカリキュラムの評価 | P1-50 |
| | 資料 1-2-27 | : 多様な教育方法・履修形態の導入に対する学生の評価 | P1-56 |
| | 資料 1-2-28 | : 実践的能力の自己評価 | P1-57 |
| | 資料 1-2-29 | : 教職実践演習報告書に記述された実践の省察 | P1-57 |

③ 多様な学修・研修機会

大学だけでなく地域や教育委員会等と連携した実践的教育プログラムが第2期から増加し、多様な学修機会の提供により社会が求める実践力の育成に役立っている⁶⁾。

- | | | | |
|----|-----------|--------------------------------------|-------|
| 6) | 資料 1-1-13 | : CST (コア・サイエンスティチャー) 事業の概要 | P1-12 |
| | 資料 1-2-31 | : 初級 CST 学校インターンシップ参加者数 | P1-58 |
| | 資料 1-2-32 | : 初級 CST 博物館等インターンシップ参加者数 | P1-58 |
| | 資料 1-2-34 | : EMP 実行委員会活動実績 (平成 22~26 年度) と報告書の例 | P1-59 |
| | 資料 1-2-35 | : E&C ギャラリー主催企画展 (平成 24~27 年度) | P1-62 |
| | 資料 1-2-37 | : 「地域課題ワークショップ I」の概要 | P1-64 |
| | 資料 1-2-38 | : 「地域創生ワークショップ (地域科学課程)」の概要 | P1-65 |
| | 資料 1-2-45 | : 福井県経営者協会を通してのインターンシップ参加状況 | P1-69 |
| | 資料 1-2-46 | : インターンシップ等実地体験についての満足度 (教育地域科学部) | P1-70 |

④ 自主的学習を促す取組

様々な方策によって自主的学習を促し⁷⁾, 授業時間外学習時間が第1期に比べ増加している⁸⁾。

⁷⁾ 資料 1-2-43 : 授業時間外学習を促す工夫 P1-68

⁸⁾ 資料 1-2-44 : 授業時間外学習時間 P1-68

⑤ 高大連携・附属学校との連携

第1期に比べ, 高大連携の取組が拡充するとともに⁹⁾, 附属学校園と連携した教育活動も増加している¹⁰⁾。

⁹⁾ 資料 1-2-54 : 教育実践研究公開クロスセッション P1-75

¹⁰⁾ 資料 1-2-30 : 附属学校園を活用した卒業研究 P1-58

⑥ 学修環境と学生支援体制の改善

第1期に比べ学修環境及び学生支援体制が改善され¹¹⁾, 学生の満足度も向上している¹²⁾。

¹¹⁾ 資料 1-2-48 : 教育地域科学部の学生支援体制 P1-71

¹²⁾ 資料 1-2-49 : 学生支援体制の満足度 P1-71

資料 1-2-51 : 学習スペースについての満足度 P1-73

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点到に係る状況)

●履修状況から判断される学習成果の状況

【学習成果の評価方法】

- ① 学校教育課程では、第2期中に策定した独自の教員養成スタンダード（P1-41 前掲資料1-2-5）において、新しい評価方法への転換を図った（資料2-1-1）。これは、「高い専門性と実践力を備えた教員を養成する」という学校関係者の期待や、そのための能力の涵養に対する学生の期待に応える取組である。

資料2-1-1 教員養成スタンダードにおける新しい評価方法への転換

●新しい評価へ

福井大学教育地域科学部の教員養成カリキュラムにおいて育まれている能力は、従来の標準化されたペーパーテストに見られるような、個別的な知識や技能の有無をチェックするという方法では評価することができません。そもそも、専門職としての教師の能力は、そのような方法で評価すべきではありません。

私たちは人間の能力を、複数の知識や技能や態度が組み合わされて状況に応じて発揮されるもの、新しい状況の中で何度も使い直されることによって全体的に習熟されていくもの、そして個人に宿るだけでなく集団の人間関係の中で発揮されるものと捉えています。そして、このような能力は、一人では解決できないような難しい課題を協働で探究するような学習の中で育まれるものであると考えています。

したがって、教師に必要となる能力の評価は、第一に、探究を支援する機能を持っている必要があります。一人では解決できないような課題に向かっていく協働的な探究は、試行錯誤し、時には失敗しながら進んでいくものです。しかし、試行錯誤だけでは探究は進んでいきません。大切なことは、要所で自身の学習の過程を振り返り、学び直し、まとめ直し、そしてその意味を問い直すことを通して、次の新たな探究をデザインすることです。評価は探究や学習を促進するための道具であるのはもちろん、評価自体も探究や学習の重要な柱なのです。

このような評価は、第二に、能力が育まれた状況を豊かに表現するものである必要があります。どのような目標を目指した学習なのか。また、どのような状況において、どのような課題に向かい、どのように解決したのか。さらに、どのような環境や集団の中で学習を進めてきたのか。これらの情報が豊かに残された記録は、厳密な体制のもとで行われたテストよりもはるかに能力の育ちを読み手に伝えてくれます。また、能力が育まれた状況そのものを吟味することにもなります。つまり評価は、目標と学習そのものを問い直す道具でもあるのです。私たちは、先に述べた学習個人誌が、まさにこれら評価の二つの機能を担うものであると考えています。

以上のような考えに基づいて、私たちは教員養成を担う学部として共通スタンダードとコース別スタンダードという二種類の教員養成スタンダードを策定しました。いずれのスタンダードも、これからの時代の教師に求められる能力を目標として掲げ、その目標に向かって行われるべき学習経験を保障し、その証拠となる学習成果物を組織するという理念に貫かれています。

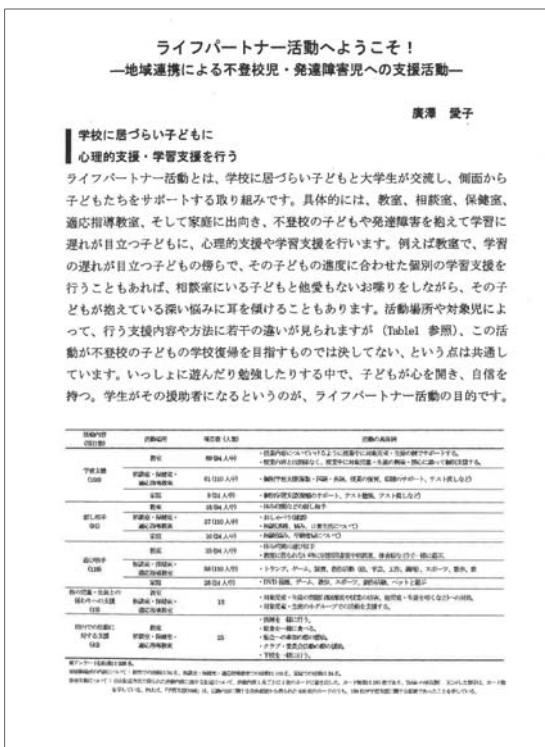
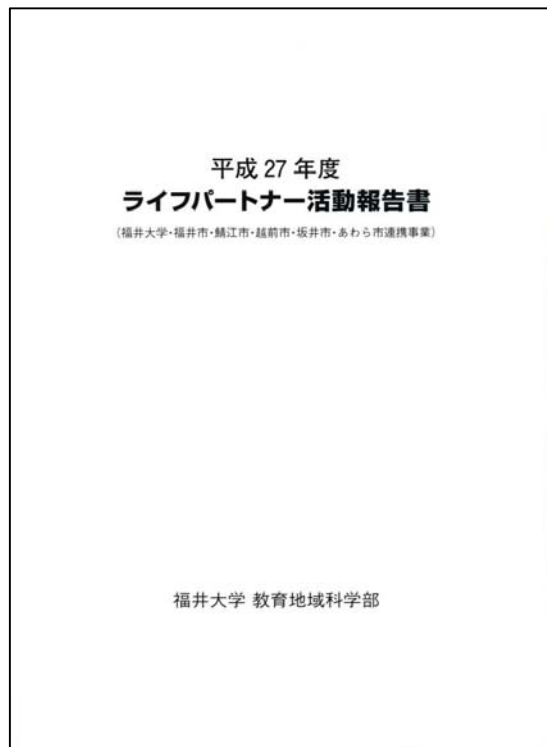
(「平成27年度教育地域科学部教員養成スタンダード」より抜粋)

- ② このような評価方法を導入した実践コア科目（P1-48 前掲資料1-2-13, 14）においては、前年度までの学生の成果を蓄積し、学習の前提を高度化したうえで学習成果を報告書等にまとめさせ、それらの成果物による成績評価を行っている（資料2-1-2, P1-49 前掲資料1-2-15）。

資料 2-1-2 探求ネットワーク（教育実践研究 B）とライフパートナー（教育実践研究 C）報告書



(探求ネットワーク（教育実践研究 B）報告書より抜粋)



(ライフパートナー（教育実践研究 C）より抜粋)

(事務局資料)

③ このような学習成果とその評価方法は、学生からも好評価を得ている（資料 2-1-3）。

資料 2-1-3 教育実践研究 A と教職実践演習に対する学生の評価例

学年	コメント
1 年次生	チームワークで協議探究していくことによって他のメンバーからいろいろな意見を聞くことができ、教育についての考えが大学入学前よりも深まったため、本当に良かったと思った。ただ授業で知識を教えるだけではないことを知ることができた。また先輩たちの実習の話聞いて、私もそれらに向けて準備をしていかないといけないと思った。また 2 年生からは文献をもっと真剣に読みたいと思う。
	他の学年に知り合いができ、レポートのアドバイスなどを聞くことができた。他の人の考えを知れて、自分もこのままではダメだと思うようになった。もっと深く考えなきゃと思った。レポートは大変だけど、とても楽しい授業でした。レポートの評価や添削があったらもっとやる気が出ると思います。
	異なる学年やコースの人と同じテーマについて議論することで、さまざまな意見が取り入れられて面白かったです。
	先輩方からいろいろな意見や話を聞くことができ、1 年生にとってはそういった学校生活の導入をいう点では良かったと思う。
	4 年生、3 年生、2 年生と話す機会がもてたので、福井大学の取り組みを知ることや、教育についての知識をつけること、このような先輩になりたいという意欲をつけることができた。話し合う時間が非常に良かった。チームテーマについて話すことも深くでき、他にも様々な取り組みについても知ることができた。改善すべき点はとくにありません。
	上学年の先輩方の経験談をリアルに聞ける。教育実習や介護等体験への意気込みが強くなった。
2 年次生	学年をこえたつながりができたこと。3 年生や 4 年生の実習の内容をきいて、来年へのイメージができた。
	他学年、他コースの人と話すことで、コミュニケーション能力が付き、視野も大きくなった。
	先輩の実践について知ることができたり、自分の実践に対していろいろな視点からコメントをもらえたり、これまで学んできたことを振り返ることができてよかったです。
	資料や文献を読みとってレポートを書く（まとめる）能力が向上したと思う。この能力はこれから先も大変重要であるため、この授業を受けて良かった。
	自分の考えや思いを持ち、授業に臨み、他者と共有し、自分がやってきたことがそれでよかつと思う場合と、もっと改善していかないといけない点を見つける良い機会になったと感じる。毎年私の中の確かな学びの場として培われていると思う。
1～4 年までが集まって話すので、それぞれの学年の視点から考えが出てきてよかつたし参考になった。	
3 年次生	毎回の授業でたくさんの気づきを得ることができた。ありがとうございます。公開授業をふやしてほしい。著名な教育学者（ex. 秋田さん・荒瀬さん）のお話をきく機会がほしい!!
	個人誌づくりで専門教科に分かれて学べたことはよかつたと思います。
	色々な話が聞け、話ができ、すごく良い時間だったと思う。ただレポートを「読む」だけでなく「話す」時間をたくさんとってもらえると、さらに学べると思うし、新しい発見があると思う。
	3 年生になってやっとこの授業の大切さに気付くことができた。自ら学ぼうとする姿勢が大切だということ、実際に経験できた。
	1 年間話し合う機会をいただき、ありがとうございます。メンバーに恵まれて、また先生方の新チャレンジや工夫のおかげで、楽しく、学びが多い時間を過ごすことができました。他の子も指摘していますが、卒論とこの授業のまとめが被ると厳しいので、課題の量や時期の調整をよろしく願います。
様々な視点からの意見が聴けて、自分の考えが深まったと思う。	
4 年次生	いろんな人のそれぞれの経験を聞くことができてよかつたです。
	今後、4 年生も参加していくことに対して、意義があると思います。教職大学院性との関わりはおもしろかつたです。
	教育に関して向き合う時間になり、とても良かった。反省・考察等、しっかり行うことができた。
	学年を超えて話し合いをする機会はこの授業しかないの、素晴らしいと思います！
	多くの人とコミュニケーションをとることができ、視野を広げることができました。実践の機会がもっと多くあるとよかつたです。
公開クロスセッションがたのしかつたです。チームテーマについての話し合いはちょっと難しいと思いました。	

(平成 26 年度及び平成 27 年度学部授業評価アンケートより抜粋)

④ 地域科学課程では、中核的科目である「地域課題ワークショップ」科目において、平成 25 年度から「育成する能力」を設定し、学生に自己評価を行わせている。その結果、すべての項目で能力獲得について肯定的な評価を得られた（資料 2-1-4）。また、これらの科目に対しては、学生から高評価を得ている（資料 2-1-5）。

資料 2-1-4 「育成する能力」に関する学生の自己評価例（平成 27 年度前期）

集計方法：身につかなかった（-2）、あまり身につかなかった（-1）、ある程度身についた（+1）、かなり身についた（+2）、わからない（±0）で評価し、質問項目の評定値の平均を科目ごとに算出する。

科目名 地域課題ワークショップⅠ (回答者数59名)	平均点	科目名 地域課題ワークショップⅡ (環境マネジメント系) (回答者数8名)	平均点
①前に踏み出す力		①前に踏み出す力	
プレゼンテーション能力	0.97	プレゼンテーション能力	1.13
リーダーシップ	0.37	リーダーシップ	0.25
②考え抜く力		②考え抜く力	
情報を収集する能力	0.98	情報を収集する能力	1.63
情報を分析する能力	0.86	情報を分析する能力	1.25
③チームで働く力		③チームで働く力	
コミュニケーション能力	1.22	コミュニケーション能力	1.25
④社会人基礎力以外の資質		④社会人基礎力以外の資質	
民主的に合意形成できる資質	0.95	民主的に合意形成できる資質	1.38
全体平均点	0.89	⑤その他の能力	
		科学的視点と客観的な態度	1.25
		主体的・自律的な暮らしができる能力	1.5
		全体平均点	1.21
科目名 地域課題ワークショップⅡ (地域分析系) (回答者数7名)	平均点	科目名 地域課題ワークショップⅡ (生涯学習系) (回答者数17名)	平均点
①前に踏み出す力		①前に踏み出す力	
プレゼンテーション能力	1.14	プレゼンテーション能力	1
リーダーシップ	0.71	リーダーシップ	0.71
②考え抜く力		②考え抜く力	
情報を収集する能力	1.71	情報を収集する能力	1.18
情報を分析する能力	1.29	情報を分析する能力	1.18
③チームで働く力		③チームで働く力	
コミュニケーション能力	1	コミュニケーション能力	1
④社会人基礎力以外の資質		④社会人基礎力以外の資質	
民主的に合意形成できる資質	1	民主的に合意形成できる資質	1.35
⑤その他の能力		全体平均点	1.07
調査計画を立てる能力	1.29		
フィールドワークを含む調査を行える能力	1.43		
調査結果に基づき提案できる能力	1.43		
全体平均点	1.22		
科目名 地域課題ワークショップⅡ (公共政策系) (回答者数6名)	平均点	科目名 地域課題ワークショップⅡ (言語コミュニケーション系) (回答者数6名)	平均点
①前に踏み出す力		①前に踏み出す力	
プレゼンテーション能力	1.17	プレゼンテーション能力	0.67
②考え抜く力		リーダーシップ	0.5
情報を収集する能力	1.67	②考え抜く力	
情報を分析する能力	0.83	情報を収集する能力	1.5
③チームで働く力		情報を分析する能力	1.33
コミュニケーション能力	1.17	③チームで働く力	
④社会人基礎力以外の資質		コミュニケーション能力	1.67
民主的に合意形成できる資質	1.67	⑤その他の能力	
全体平均点	1.30	地域、言葉、言語、外国語、コミュニケーションなどをキーワードに、現在どのようなことが問題となっているのかということについて、自ら問題意識を持って課題設定できる能力	0.67
		設定した課題について、それを解決するためには、何をどうやって調べればよいのか、ということについて、基本的なリサーチスキル	0.83
		全体平均点	1.02

科目名	地域課題ワークショップⅡ (国際文化系) (回答者数17名)	平均点
①前に踏み出す力		
プレゼンテーション能力		0.29
②考え抜く力		
情報を収集する能力		0.71
③チームで働く力		
コミュニケーション能力		0.59
④社会人基礎力以外の資質		
民主的に合意形成できる資質		1.18
全体平均点		0.69

(平成27年度前期「育成する能力」アンケートより抜粋)

資料2-1-5 地域課題ワークショップ科目に対する学生の評価例

科目名	コメント
地域課題ワークショップⅠ	あまり面識のない人達と協調性を高めて課題に対して研究していくことができたのは良い経験となった。
	KJ法やブレインストーミング法をGWで用いることで、意見を言いやすい雰囲気が出てきたと思うので、今後も活用してほしい。
	初対面の同級生と全く知らなかったテーマについて学ぶことができて、とても楽しかった。今回学んだことを今後全てに活かしていきたい。
	人によって考えや意見は全く違うことを改めて知ることができ、他者の意見尊重が大事だと学んだ。1人だけではうまくいかないこともたくさんあり、協力は必要不可欠であることが分かった。通常の講義では学べないので良かった。
	新しい体験ができたし、いろいろな視点から考えることが大切である、ということを知ることができた。
	グループワークを通して、以前よりも積極性やコミュニケーション能力が上がったので良かった。
	この授業を受けて、コミュニケーション能力や、内容を端的にまとめる力がついたので良かったです。
	今後、社会に出ていくときに必要な多くの力が身につけることができ良かった。
地域課題ワークショップⅡ	自分たちがこれからのようなスキルをつけていけなかつたのかを学ぶことができた。
	様々な視点からの意見を知ることができた。認知する課題も多く、発見することも多かった。地域の課題に興味を持てた。以上が良かったこと。
	たのしかったです！前期とは充実感がちがいました。大変だったけど、その分、身になるものが多かった。
	発表の中でも言いましたが、形に残るものをつくってよかったです。芸術班なので、今回のような形がこれからもできるといいと思います。
	作品を残せて嬉しかった。先生からたくさんの助言を頂けたからだと感じています。ありがとうございます。
	研究の中で、つまづくことが前期のワークショップと比べて多かったが、つまづいたことをもとにして、得ることができる情報をくみとれたことが良かった。
	論理的に結論を出したり提案を出せるようになった。
	ふれたことのないデータにふれて、考察する機会が多くあり、関心が深まった。
地域課題ワークショップⅢ	担当の先生がワークショップの活動で適切にアドバイスをくれてうれしかったです。
	この授業は、4年生の先輩の卒業研究に関わっており、先輩が最初、授業をして下さった。先輩の授業は分かりやすく、資料もみやすいと感じた。また、その分野に対する興味関心も高まったと思う。
	自分がやるべき役割や課題が明確だったので。それを1つ1つやることで少しは皆の役に立てたと思う。
	研究として、初めて触れた分野のテーマなので、行き詰ることは多々ありましたが、それでも進む力は身についたように感じました。
	情報公開制度を理解できるきっかけになったことがよかったです。中間発表を多く行ったので、発表する力は前期よりも向上できたのではと思います。
	企画書一指摘をうける一企画書改訂の流れをくりかえし、実習ごとに企画のクオリティも上がっており(慣れてきて?)いいサイクルだと思った。
	子どもと接する際に気をつけることなど、普段の生活では気がつかないことを学べて良かったです。
	時間外に用意を行うことの重要性を考える機会になった。仕事を分担する等のバランスの取り方等等、他人とチームを組んで作業・計画を進めていくことの演習として有益であった。
地域課題ワークショップⅣ	計画的に物事を進めていくことの必要性を強く感じた。
	普段関わることのない人達と一緒に活動することで自分にはない考え方や発想を知ることができて勉強になっています。
	主体的に考え、企画実行していく力をつけることができ、有意義な時間になった。
	自分の力で企画立案、運営を行っていくことの難しさ楽しさを学べました。
	インタビュー内容が興味深く、楽しかった。
	自分の研究した分野への興味が増した。
	自分達で興味・関心のあるテーマを選んで論文を書くということが、自分の卒業論文を書くための準備として最適なものでした。今回の授業で学んだこと、論文の書き方や考察の仕方などを活かして、卒業論文執筆に取りかかりたいと思います。
	共同論文を皆で各自担当をしながら、やってきたことが私にとって非常に役に立ったと思いました。
地域課題ワークショップⅣ	物事を深く考える、多方面から考える力がついた。また、テーマは違うものの、ゼミで同じように頑張る仲間とはげまあいながら課題ができ、充実感があつた。
	自分の研究テーマに対する理解が深まった。
	卒業研究で、自分の興味のあることを調べるのが楽しくもあり、新しい発見につながっています。
	地域分析系の専門分野や調査研究について学び、自分で地域の諸課題を卒論に向けて分析できて良かったです。
	論文の発表を通して、自身の卒業研究の参考になるものがたくさんあって、有意義なものだった。
	自分の探究力が特に向上したと感じた。
	自分達だけでなく、地域もまき込んで、活動ができて良かった。
	地域の方との関わりがもててよかった。
先輩の卒論の発表を見て、とても参考になった。	
担当の教員が非常に親身になって様々な相談を聴いて下さった。参考にすべき文献も的確に教えていただけた。	
自分の興味のある事を深く掘り下げて、研究を進めることができたので良かった。	

(平成26年度及び平成27年度学部授業評価アンケートより抜粋)

⑤ 「地域課題ワークショップ科目」単位修得者の評価点（秀4，優3，良2，可1に換算）平均値も3前後の高い値を示している（資料2-1-6）。

資料2-1-6 地域課題ワークショップ科目単位修得者の評価点平均値

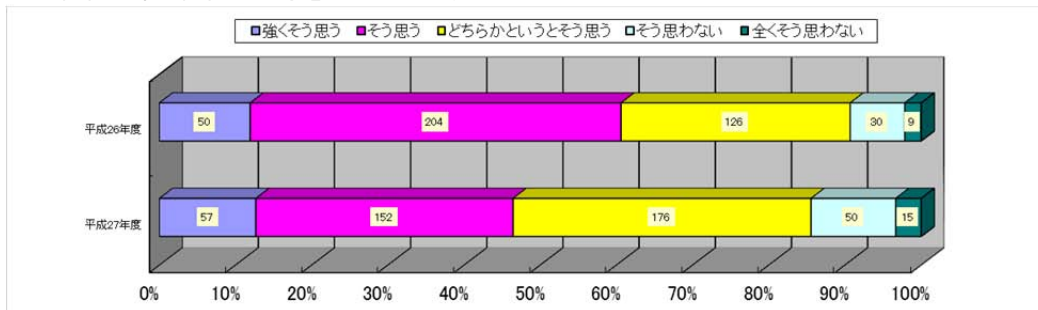
(単位数: 取得者数×単位数)					(評価点換算: 取得者数×評価点)					換算値計(B)	評価点平均値(B/A)
年度	秀	優	良	可	単位数計(A)	秀(4)	優(3)	良(2)	可(1)		
平成25年度											
地域課題ワークショップⅠ	24	94	6	0	124	96	282	12	0	390	3.15
地域課題ワークショップⅡ	46	290	26	12	374	184	870	52	8	1114	2.98
地域課題ワークショップⅢ	0	248	6	0	254	0	744	12	8	764	3.01
地域課題ワークショップⅣ	0	208	36	0	244	0	624	72	4	700	2.87
平成26年度											
地域課題ワークショップⅠ	20	94	12	0	126	80	282	24	0	386	3.06
地域課題ワークショップⅡ	34	288	44	32	398	136	864	88	8	1096	2.75
地域課題ワークショップⅢ	6	244	4	12	266	24	732	8	8	772	2.90
地域課題ワークショップⅣ	2	194	10	2	208	8	582	20	4	614	2.95
平成27年度											
地域課題ワークショップⅠ	22	100	0	0	122	88	300	0	0	388	3.18
地域課題ワークショップⅡ	16	294	52	8	370	64	882	104	8	1058	2.86
地域課題ワークショップⅢ	30	192	12	8	242	120	576	24	8	728	3.01
地域課題ワークショップⅣ	10	250	14	4	278	40	750	28	4	822	2.96

(事務局資料)

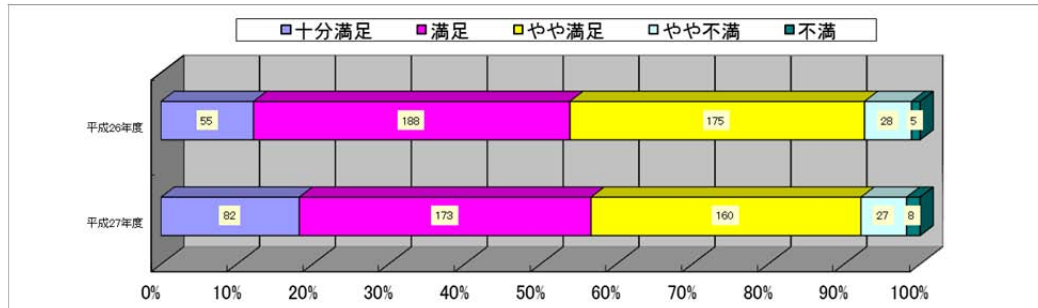
⑥ このような成績評価基準に対する学生の認知度や評価方法の適切性に対する肯定的評価は80～90%台と高い値を示した（資料2-1-7）。また、これらの科目の効果や履修意欲に関する肯定的な回答は、この質問項目を導入した平成26年度と平成27年度を比較した場合、明確に上昇した（資料2-1-8）。これらの結果は、学生の能力形成に対する期待に応えた証左と言える。

資料2-1-7 成績評価基準・成績評価方法に関する学生の評価

設問：学生便覧やシラバスに成績評価基準や評価方法等が記載されています。あなたはこれらの成績評価基準や評価方法等を知っていますか？



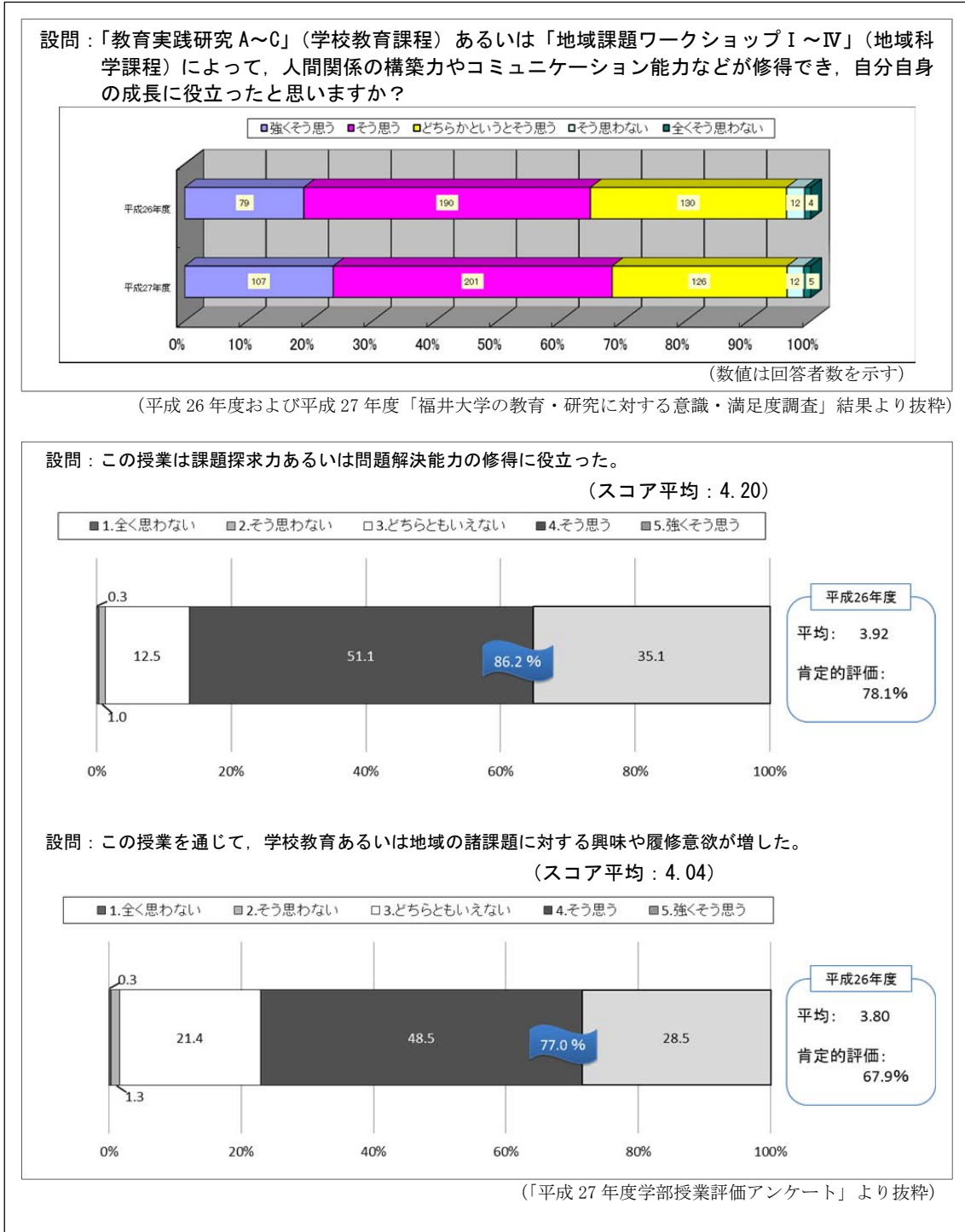
設問：成績の評価方法の適切性について、あなたはどの程度満足していますか。



(数値は回答者数を示す)

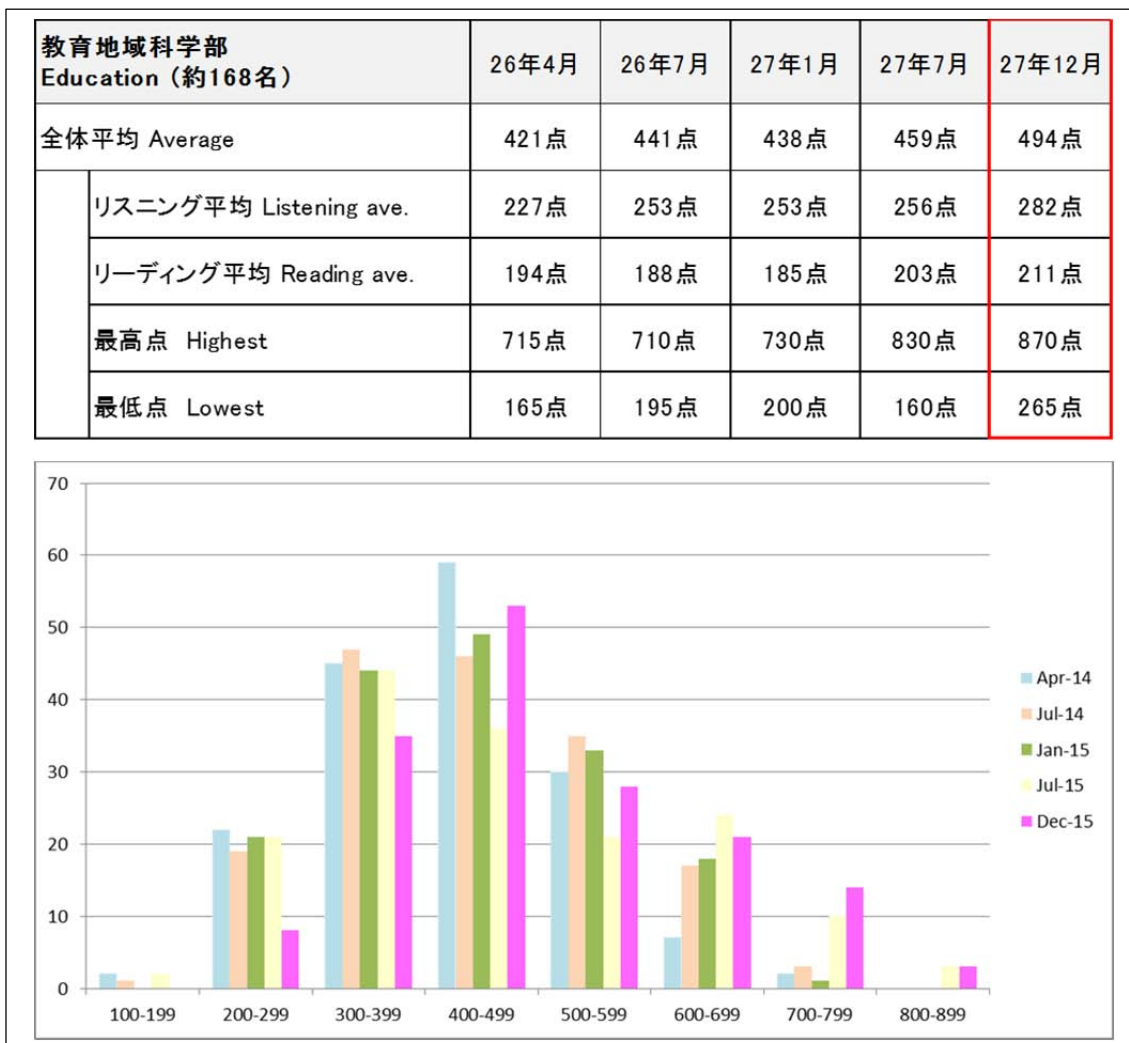
(平成26年度及び平成27年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋)

資料 2-1-8 実践コア科目及び地域課題ワークショップ科目に対する学生の評価



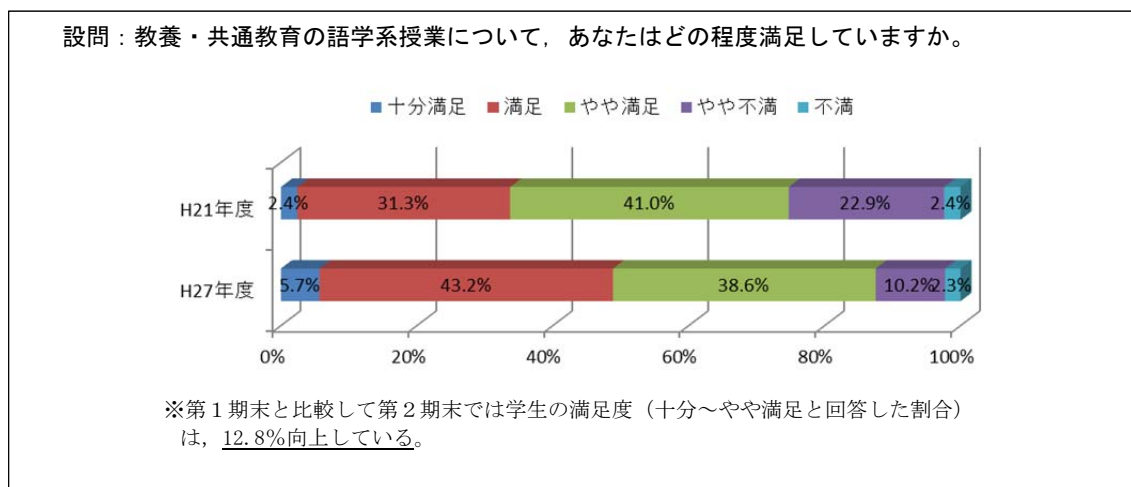
⑦ 平成 26 年度入学生より、共通教育の英語科目の強化改善を図り (P1-18 前掲資料 1-1-20, P1-54 前掲資料 1-2-24), TOEIC の定期受験を義務付けたところ、着実な成績の上昇が見られた (資料 2-1-9)。また、語学系科目に対する学生の満足度も第 1 期と比べて明確に向上した (資料 2-1-10)。

資料 2-1-9 平成 26 年度入学生の TOEIC 結果の推移



(事務局資料)

資料 2-1-10 教養・共通教育（語学系）に関する学生の満足度



(平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋)

【単位取得・成績・学位授与状況】

- ① 第2期中の単位修得率は、教科・専門科目で90%前後、教職科目で90%弱と、第1期とほぼ同程度の高い比率で安定的に推移した。また、ほぼすべての年度において、単位を修得した学生の90%以上が「秀」,「優」または「良」と判定された(第1期は83~90%)
(資料2-1-11)。これらのデータから、大部分の学生は第1期と同程度あるいはそれ以上に4年間で単位を着実に修得し、卒業時に十分な資質・能力を身につけていると判断できる。

資料2-1-11 第2期中の単位の修得状況

年度	課程	専門教育科目																						
		教科・専門科目										教職科目												
		授業科目数	履修学生数	単位修得者数	成績						単位修得率	授業科目数	履修学生数	単位修得者数	成績						単位修得率			
秀	優				良	可	不可	保留	不受	秀					優	良	可	不可	保留	不受				
平成22年度	学校教育課程	389	3939	3628	0	2447	855	326	147	0	164	92.1%	139	3634	3235	0	2399	554	282	236	0	163	89.0%	
	地域科学課程	270	3062	2713	0	2095	434	184	88	0	261	88.6%												
	合計	659	7001	6341	0	4542	1289	510	235	0	425	90.6%	139	3634	3235	0	2399	554	282	236	0	163	89.0%	
平成23年度	学校教育課程	384	3984	3514	0	2284	918	312	225	0	245	88.2%	116	3749	3338	0	2464	550	324	265	1	145	89.0%	
	地域科学課程	252	2923	2609	0	2097	356	156	93	0	221	89.3%												
	合計	636	6907	6123	0	4381	1274	468	318	0	466	88.6%	116	3749	3338	0	2464	550	324	265	1	145	89.0%	
平成24年度	学校教育課程	393	4030	3592	229	2206	830	327	163	0	275	89.1%	115	3566	3150	123	2084	632	311	256	0	160	88.3%	
	地域科学課程	216	2926	2582	273	1616	465	228	99	1	244	88.2%												
	合計	609	6956	6174	502	3822	1295	555	262	1	519	88.8%	115	3566	3150	123	2084	632	311	256	0	160	88.3%	
平成25年度	学校教育課程	397	3975	3583	430	1986	892	275	185	7	200	90.1%	110	3594	3147	544	1772	557	274	235	5	207	87.6%	
	地域科学課程	203	2872	2591	409	1452	472	258	109	0	172	90.2%												
	合計	600	6847	6174	839	3438	1364	533	294	7	372	90.2%	110	3594	3147	544	1772	557	274	235	5	207	87.6%	
平成26年度	学校教育課程	364	3666	3403	662	1581	812	348	116	16	131	92.8%	109	3428	3083	698	1456	618	311	218	29	98	89.9%	
	地域科学課程	213	2993	2721	523	1437	487	274	109	0	163	90.9%												
	合計	577	6659	6124	1185	3018	1299	622	225	16	294	92.0%	109	3428	3083	698	1456	618	311	218	29	98	89.9%	
平成27年度	学校教育課程	381	3737	3419	765	1518	836	300	137	77	104	91.5%	103	3255	2889	632	1372	586	299	166	122	78	88.8%	
	地域科学課程	204	2883	2614	568	1313	486	247	90	14	165	90.7%												
	合計	585	6620	6033	1333	2831	1322	547	227	91	269	91.1%	103	3255	2889	632	1372	586	299	166	122	78	88.8%	

(事務局資料)

- ② 第2期中には平均 84.2%の学生が標準修業年限(4年)内で所定の単位を修得して卒業し、標準修業年限×1.5年での卒業した学生は90%近くに達した(資料2-1-12, 13)。

資料2-1-12 標準修業年限(4年)内の卒業率及び標準修業年限×1.5年内卒業率の状況

入学年度	入学者数(a)	標準修業年限内卒業者数(b)	(b)の卒業率(b/a)	標準修業年限×1.5年内卒業者数(c)	(c)の卒業率(c/a)
平成19年度	177	153	86.4%	167	94.4%
平成20年度	172	143	82.6%	158	91.9%
平成21年度	172	137	79.7%	158	91.9%
平成22年度	161	138	85.7%	154	95.7%
平成23年度	172	145	84.3%	155	90.1%
平成24年度	172	148	86.0%	—	—
平均	171	144	84.2%	158	92.4%

(事務局資料)

資料2-1-13 第2期中の卒業認定者数の課程別内訳

	卒業認定者数				未定者数			
	学校教育課程	地域科学課程	地域文化課程	地域社会課程	学校教育課程	地域科学課程	地域文化課程	地域社会課程
平成22年度	95		25	33	12		7	1
平成23年度	91	52			19	7		
平成24年度	83	54			24	6		
平成25年度	82	56			17	3		
平成26年度	90	55			19	7		
平成27年度	91	57			14	7		

(事務局資料)

③ 学士課程の在学生数に対する留年，退学，および休学率は，それぞれ5%，1%，3%程度であり，ごく少数に留まっている（資料2-1-14）。

資料2-1-14 留年・退学・休学の状況

平成22年度			平成23年度			平成24年度			平成25年度			平成26年度			平成27年度			6年間平均
学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	留年率
693	29	4.2%	697	36	5.2%	705	42	6.0%	712	35	4.9%	710	33	4.6%	704	36	5.1%	5.0%

平成22年度			平成23年度			平成24年度			平成25年度			平成26年度			平成27年度			6年間平均
学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	退学率
693	5	0.7%	697	4	0.6%	705	5	0.7%	712	8	1.1%	710	11	1.5%	704	11	1.6%	1.0%

平成22年度			平成23年度			平成24年度			平成25年度			平成26年度			平成27年度			6年間平均
学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	休学率
693	12	1.7%	697	22	3.2%	705	15	2.1%	712	28	3.9%	710	22	3.1%	704	19	2.7%	2.8%

(事務局資料)

【実践研究】

実践コア科目及び地域課題ワークショップ科目の学習成果を毎年報告書の形で公表しており（資料2-1-15, P1-49 前掲資料1-2-15, P1-79 前掲資料2-1-2），後者に関しては，毎年度末に発表会を実施している（資料2-1-16）。

資料2-1-15 地域課題ワークショップ実施報告書

<p>2015（平成27）年度</p> <p>地域課題ワークショップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ</p> <p>実施報告書</p> <p>2016年3月</p> <p>福井大学教育地域科学部 地域科学課程委員会</p>	<p style="text-align: center;">目 次</p> <p>はじめに</p> <p>第Ⅰ部 地域課題ワークショップⅠ（入門）・・・1</p> <p>1 今年度の実施概要・・・1</p> <p>2 学生最終発表から・・・6</p> <p>第Ⅱ部 地域課題ワークショップⅡ（基礎）・・・23</p> <p>1 科目の位置づけと履修方法・・・23</p> <p>2 各系の実施概要・・・24</p> <p>(1) 地域分析系・・・24</p> <p>(2) 公共政策系・・・36</p> <p>(3) 環境マネジメント系・・・45</p> <p>(4) 生涯学習系・・・55</p> <p>(5) 国際文化系・・・66</p> <p>(6) 言語コミュニケーション系・・・76</p> <p>第Ⅲ部 地域課題ワークショップⅢ（応用A）（応用B）・・・87</p> <p>1 科目の位置づけと履修方法・・・87</p> <p>2 各系の実施概要・・・88</p> <p>(1) 地域分析系・・・88</p> <p>(2) 公共政策系・・・97</p> <p>(3) 環境マネジメント系・・・110</p> <p>(4) 生涯学習系・・・120</p> <p>(5) 国際文化系・・・130</p> <p>(6) 言語コミュニケーション系・・・140</p> <p>第Ⅳ部 地域課題ワークショップⅣ（総合A）（総合B）・・・151</p> <p>編集後記</p>
--	--

(事務局資料)

資料 2-1-16 地域課題ワークショップⅢ発表会の例

平成 27 年度「地域課題ワークショップⅢ」
合同成果報告会

1. 日時：平成 27 年 2 月 15 日（月） 13 時 00 分～15 時 20 分

2. 場所：大 1 講義室（教育系 1 号館 2 階）

3. 参加学生：地域科学課程 1 年生～3 年生

4. 次第：

(1) 開会の挨拶（13:00～13:05）

(2) 地域課題ワークショップⅢ成果報告（13:05～15:15）
（※各系の持ち時間：質疑応答を含めて 20 分）

地域分析系 (13:05～13:25)

公共政策系 (13:25～13:45)

環境マネジメント系 (13:45～14:05)

～10 分間休憩～

生涯学習系 (14:15～14:35)

国際文化系 (14:35～14:55)

言語コミュニケーション系 (14:55～15:15)

(3) 閉会の挨拶（15:15～15:20）

（事務局資料）

●資格取得状況

【資格取得】

第 2 期中の教員免許取得者数の年平均は 468.7 名であり、第 1 期の 342.5 名より大幅に増加した（資料 2-1-17）。また、第 1 期と比較可能な学芸員及び社会教育主事の年平均資格取得者は、16.7 名から 20.8 名へと増加した（資料 2-1-18）。これらのことから、学生の資格取得に対する意欲及び実績は明確に高まっており、学生及び社会からの期待に応えたと言える。

資料 2-1-17 卒業時の教員免許取得状況

（人）

区分	幼稚園			小学校			中学校			高等学校			特別支援学校 (18 年度までは養護学校)		
	計	専修	1 種・2 種	計	専修	1 種・2 種	計	専修	1 種・2 種	計	専修 ※	1 種 ※※	計	専修	1 種・2 種
平成 22 年度	22	4	18	133	31	102	133	39	94	158	50	92	30	4	26
平成 23 年度	16	5	11	128	35	93	142	45	97	153	45	91	19	5	14
平成 24 年度	13	2	11	120	28	92	123	37	86	143	43	76	29	7	22
平成 25 年度	16	3	13	135	37	98	147	55	92	190	59	89	25	5	20
平成 26 年度	14	0	14	132	39	93	148	51	97	173	51	90	25	6	19
平成 27 年度	15	0	15	123	29	74	132	40	86	155	44	89	20	2	18

（事務局資料）

資料 2-1-18 卒業時の各種資格取得状況

(人)

区分	学芸員	社会教育主事	社会調査士
平成 22 年度	9	11	3
平成 23 年度	16	14	4
平成 24 年度	5	8	3
平成 25 年度	9	9	4
平成 26 年度	12	17	8
平成 27 年度	4	11	3
合計	55	70	25

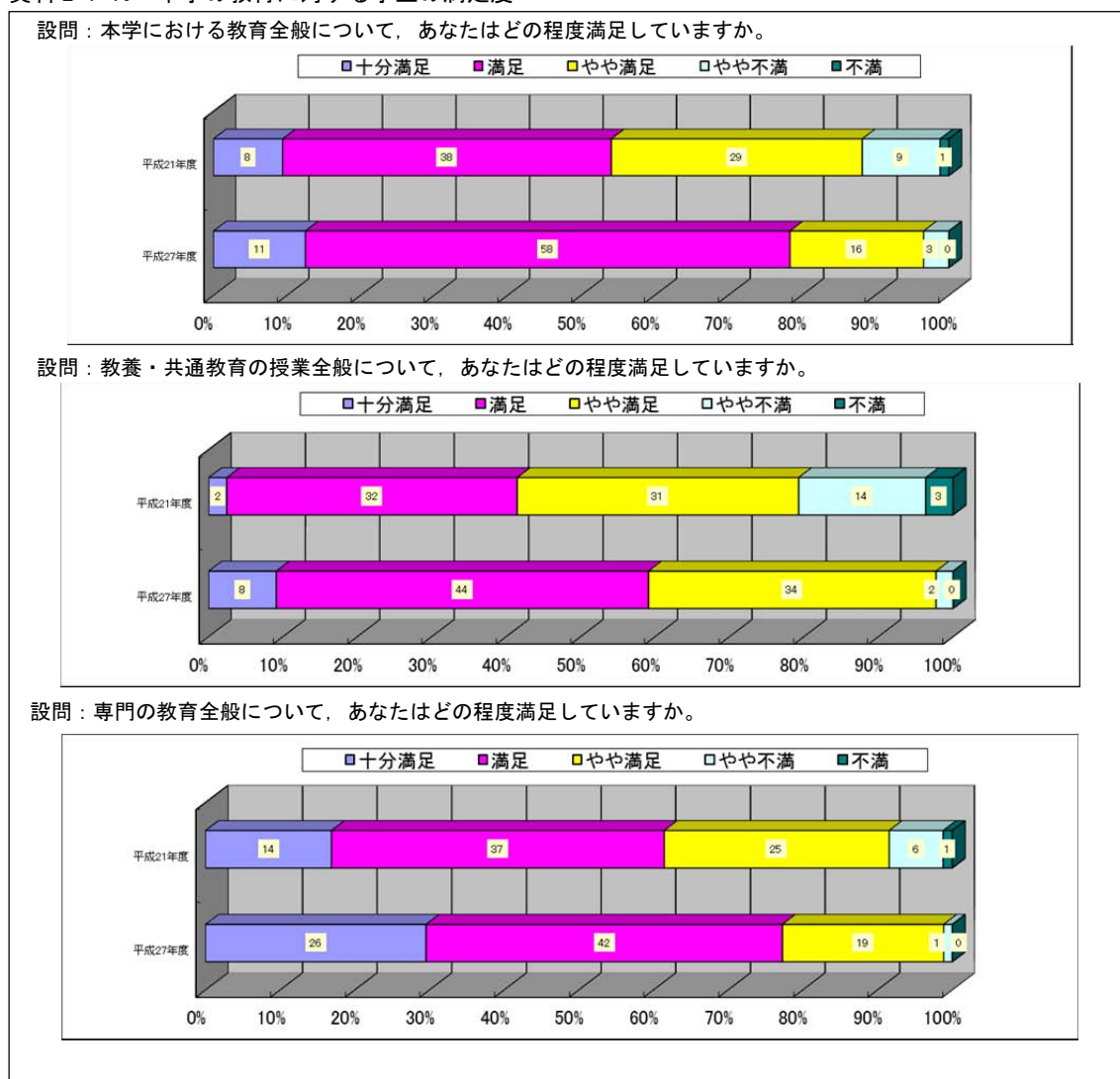
(事務局資料)

●学業の成果の達成度・満足度に関する学生アンケート等の結果と分析

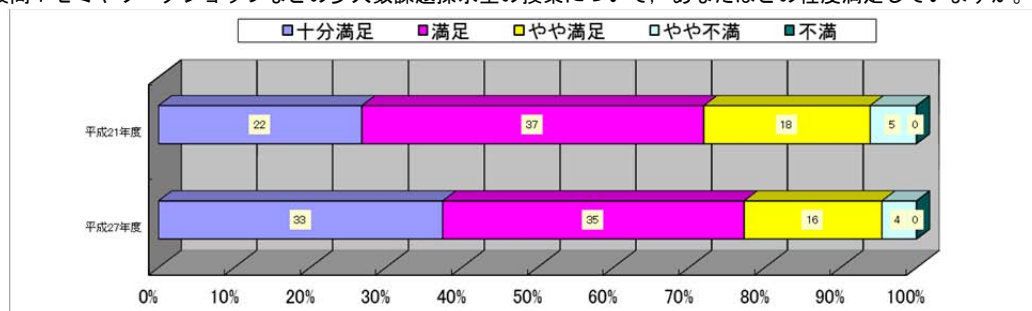
【学生アンケートの内容】

- ① 学生アンケートの回答結果では、本学の教育や授業，卒業研究指導，教育支援等に対する満足度がいずれも第 1 期よりも上昇し，80～90%台の高い値となった(資料 2-1-19)。これらの結果は，第 2 期において，本学部の教育が学生の要望に応じて改善されてきたことを示すものである。

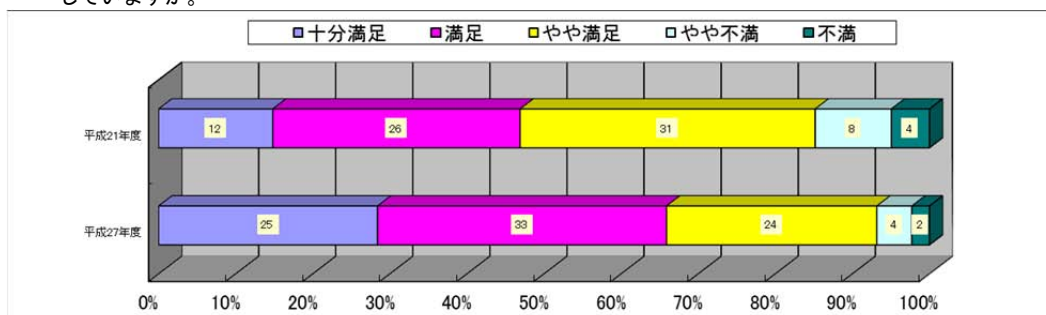
資料 2-1-19 本学の教育に対する学生の満足度



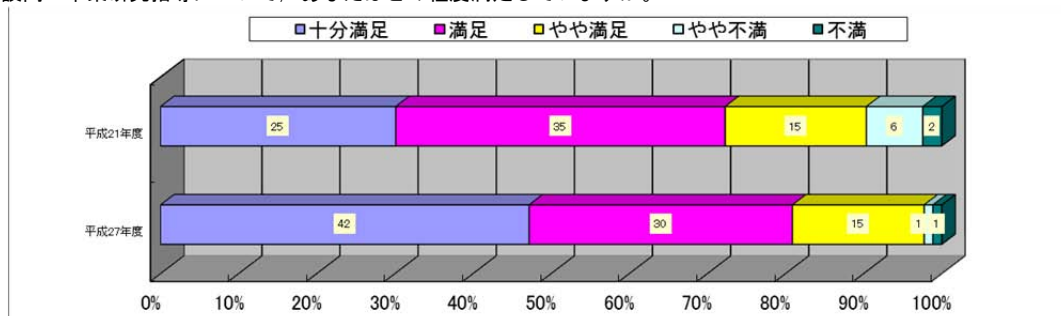
設問：ゼミやワークショップなどの少人数課題探求型の授業について、あなたはどの程度満足していますか。



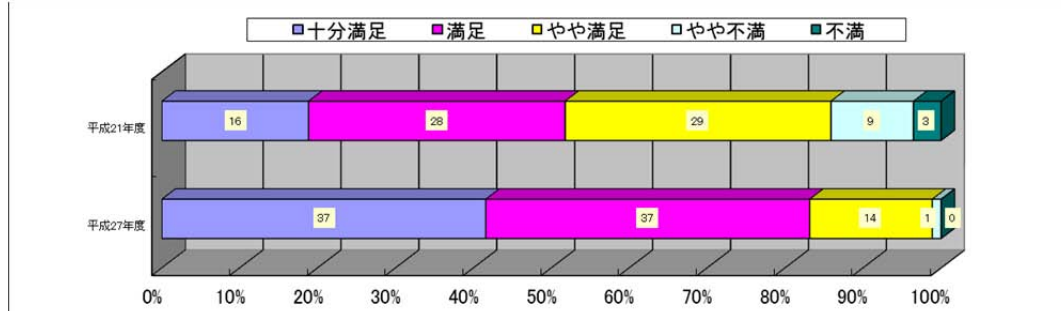
設問：インターンシップ等の実地体験（教育実習や拠点校等での実践を含む）について、あなたはどの程度満足していますか。



設問：卒業研究指導について、あなたはどの程度満足していますか。



設問：教育（学修）支援（指導・助言教員、教務職員等）について、あなたはどの程度満足していますか。

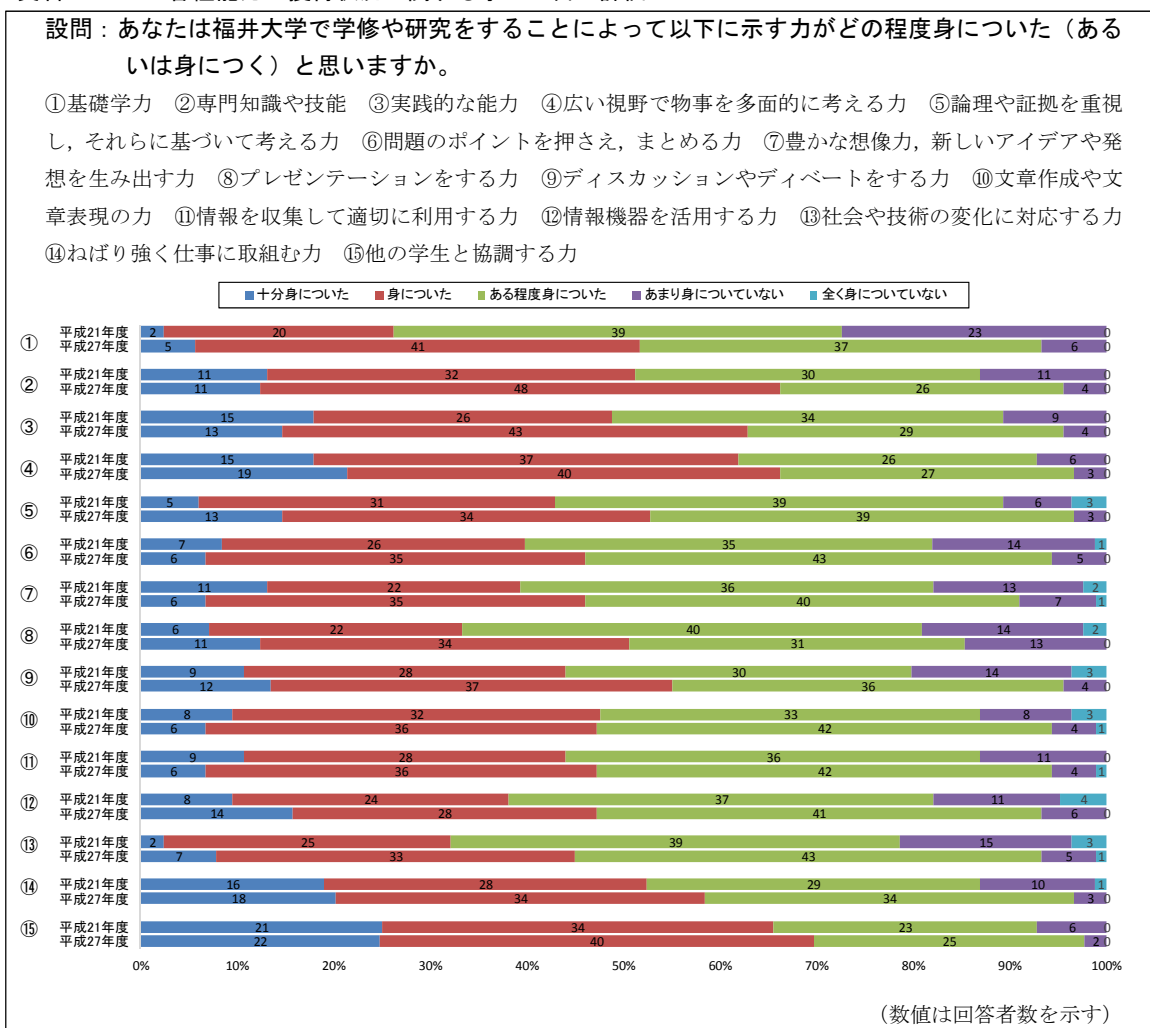


（数値は回答者数を示す）

（平成 21 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

② 本学部における学習・研究による各種能力の獲得状況に関する自己評価に関しても、ほとんどの項目で第1期と比較して評価が向上し、高い値となった(資料2-1-20)。

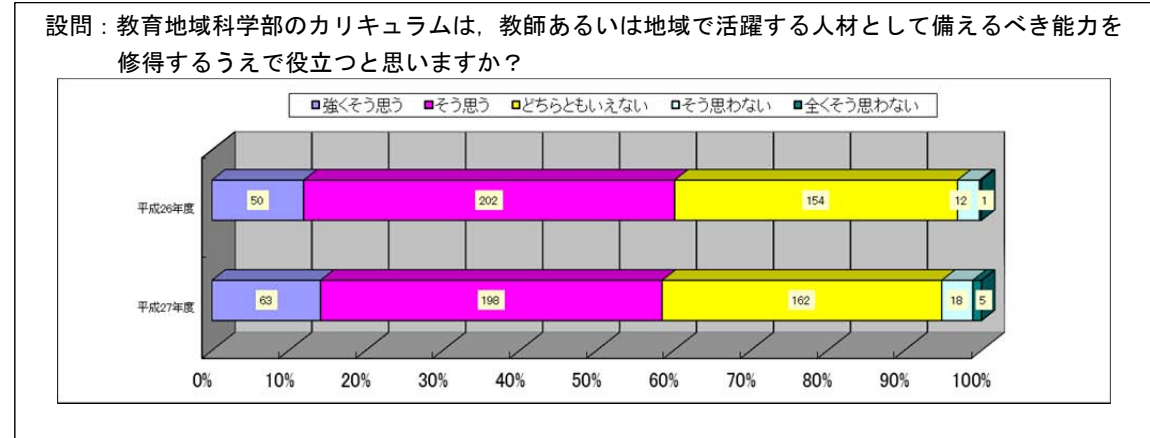
資料2-1-20 各種能力の獲得状況に関する学生の自己評価



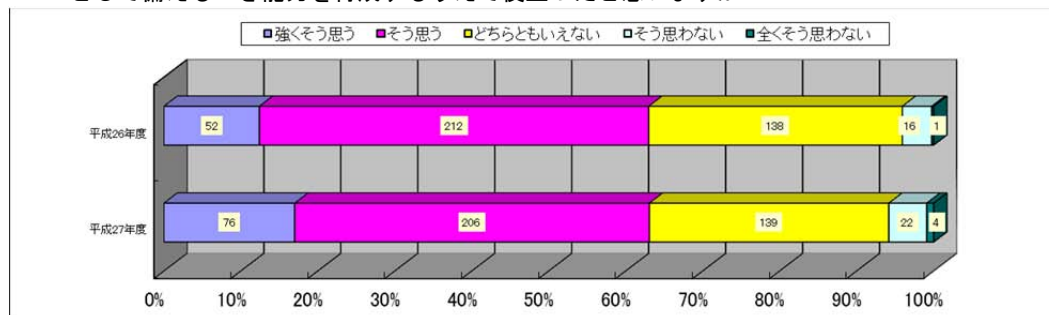
(平成21年度及び平成27年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋)

③ カリキュラムの有効性や効果、それによる学習意欲向上に関する質問項目においても、好評を得た(資料2-1-21, 22)。

資料2-1-21 カリキュラムの有効性・効果に対する学生の評価



設問：教育地域科学部では、さまざまな教育方法・履修形態（アクティブラーニング型授業、少人数教育、統合型講習、実習など）を取り入れています。これらは教師あるいは地域で活躍人材として備えるべき能力を育成するうえで役立ったと思いますか？

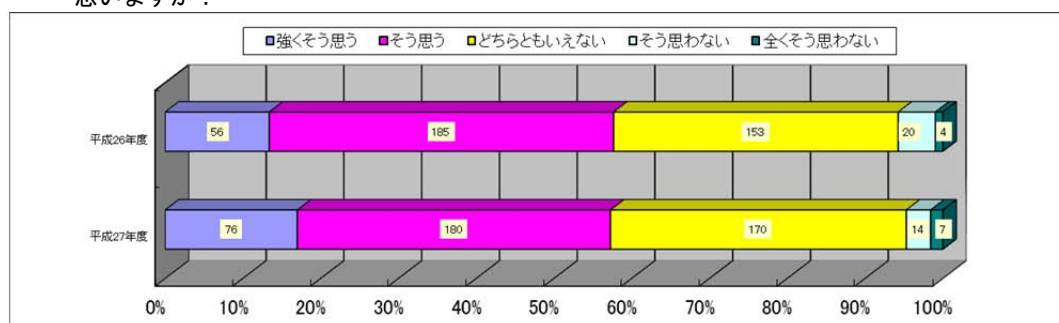


(数値は回答者数を示す)

(平成 26 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋)

資料 2-1-22 学習意欲の向上に関する学生の自己評価

設問：これまでの授業を通して、学校教育あるいは地域の諸課題に対する興味や履修意欲が増したと思いますか？



(数値は回答者数を示す)

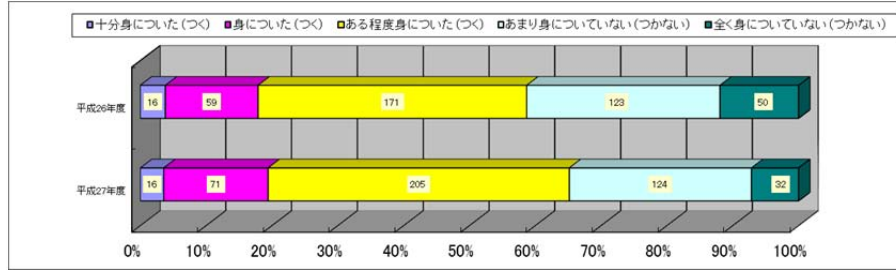
(平成 26 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋)

- ④ 第2期における本学の目標である「グローバルな視野を有する高度職業専門人」の養成に関する学生の自己評価に関しては、平成 26 年度と平成 27 年度を比較した場合、すべての項目において自己評価が向上し、特に「コミュニケーション能力」と「グローバル化社会での活躍を志向する態度」について、大幅な向上が見られた(資料 2-1-23)。

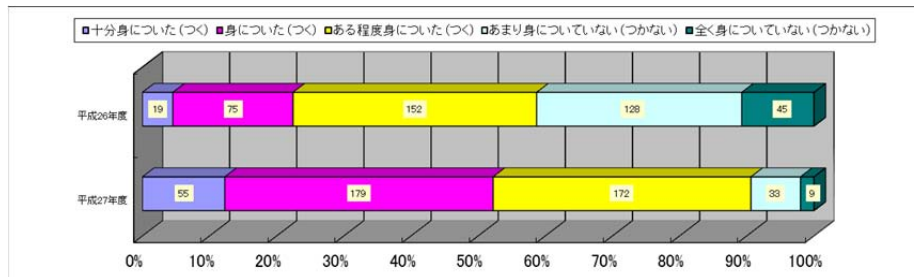
資料 2-1-23 「グローバルな視野を有する高度職業専門人」の養成に関する学生の自己評価

設問：本学では、みなさんが“グローバルな視野を持った高度専門職業人”となることを教育の大きな目標としています。福井大学での学修をとおして、以下の力などがどの程度身についた、あるいは卒業・修了時までには身につくと思いますか？

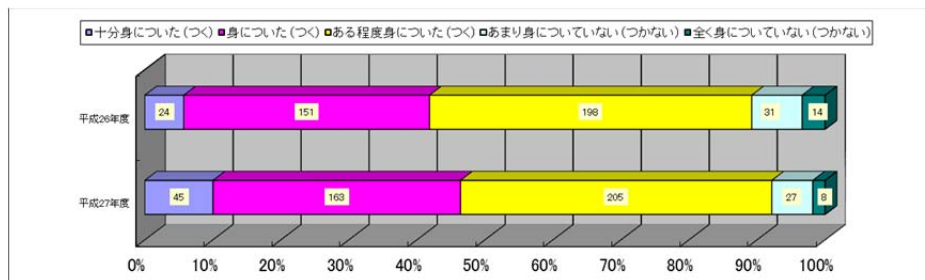
①使える英語力（語学力）



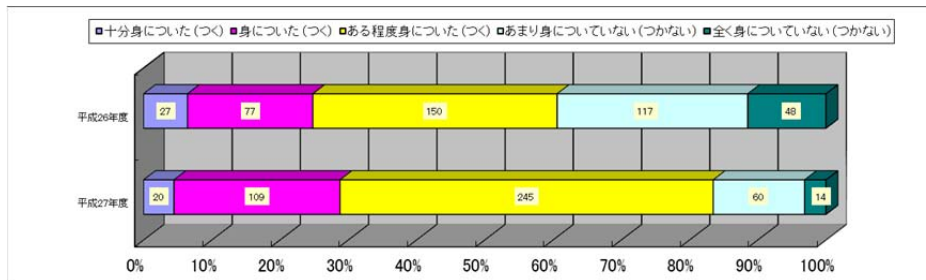
②コミュニケーション能力



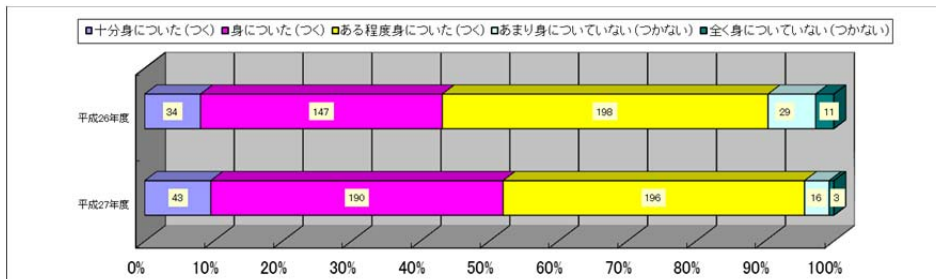
③社会人として備えるべき社会的責任感



④グローバル化社会での活躍を志向する態度



⑤課題探究・問題解決能力，自己学習力



(数値は回答者数を示す)

(平成 26 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋)

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

- ① 学校教育課程においては、第2期中に策定した教員養成スタンダードにおいて新しい評価方法への転換を図り¹⁾、地域科学課程においてもアクティブ・ラーニング科目に「育成する能力」指標を導入した²⁾。これらの新しい評価方法や、それを適用した科目に対しては、学生からも高い評価を得ており³⁾、関係者からの期待に応えた。

- 1) 資料 2-1-1 : 教員養成スタンダードにおける新しい評価方法への転換 P1-78
 2) 資料 2-1-4 : 「育成する能力」に関する学生の自己評価例 (平成 27 年度前期) P1-81
 3) 資料 2-1-3 : 教育実践研究 A と教職実践演習に対する学生の評価例 P1-80
 資料 2-1-5 : 地域課題ワークショップ科目に対する学生の評価例 P1-82
 資料 2-1-7 : 成績評価基準・成績評価方法に関する学生の評価 P1-83

- ② グローバル人材育成事業の一環として共通教育の英語科目の強化を図った結果⁴⁾、TOEIC 試験における平均点の着実な上昇を達成し⁵⁾、語学授業に対する学生の満足度も第1期と比べて明確に上昇した⁶⁾。本学の目標である「グローバルな視野を有する高度職業専門人」の養成に関しても、学生の自己評価の着実な上昇が見られた⁷⁾。

- 4) 資料 1-1-20 : 語学センター概要 P1-18
 5) 資料 2-1-9 : 平成 26 年度入学生の TOEIC 結果の推移 P1-85
 6) 資料 2-1-10 : 教養・共通教育 (語学系) に関する学生の満足度 P1-85
 7) 資料 2-1-23 : 「グローバルな視野を有する高度職業専門人」の養成に関する学生の自己評価 P1-93

- ③ 第2期中の学生の単位修得率及び成績は第1期と同程度あるいはそれ以上の水準で安定的に推移し⁸⁾、留年、退学及び休学率はわずかにとどまった⁹⁾。また、教員免許をはじめとした学生の資格取得に対する意欲及び実績は第1期と比較して明確に高まった¹⁰⁾。

- 8) 資料 2-1-11 : 第2期中の単位の修得状況 P1-86
 資料 2-1-12 : 標準修業年限 (4 年) 内の卒業率及び標準修業年限×1.5 年内卒業率の状況 P1-86
 9) 資料 2-1-14 : 留年・退学・休学の状況 P1-87
 10) 資料 2-1-17 : 卒業時の教員免許取得状況 P1-88
 資料 2-1-18 : 卒業時の各種資格取得状況 P1-89

- ④ 本学部の教育に対する学生の満足度及び能力獲得に関する自己評価の結果は、第1期と比較して上昇し、高い値となった¹¹⁾。また、カリキュラムの有効性やそれによる学習意欲の向上に関しても、学生から好評価を得た¹²⁾。

- 11) 資料 2-1-19 : 本学の教育に対する学生の満足度 P1-89~90
 資料 2-1-20 : 各種能力の獲得状況に関する学生の自己評価 P1-91
 12) 資料 2-1-21 : カリキュラムの有効性・効果に対する学生の評価 P1-91
 資料 2-1-22 : 学習意欲の向上に関する学生の自己評価 P1-92
 資料 2-1-23 : 「グローバルな視野を有する高度職業専門人」の養成に関する学生の自己評価 P1-93

観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

●進路・就職状況等から判断される在学中の学業の成果の状況

【キャリア支援の取組】

- ① 全国的にも高く評価されている本学の就職支援体制のもとで(資料2-2-1, 2), 本学部においても就職委員会が就職支援室と密接に連携しつつ, 年間を通じて多岐にわたる就職支援活動を行っている(資料2-2-3)。

資料2-2-1 高い就職率の維持

福井大学 8年連続 国立大学就職率 No.1

年度	1位		2位		3位		4位		5位	
	大学名	就職率	大学名	就職率	大学名	就職率	大学名	就職率	大学名	就職率
2015	福井大	96.1	群馬大	94.0	九州工大	93.9	一橋大	93.8	三重大	93.0
2014	福井大	96.7	九州工大	94.4	東京工業大	93.8	名古屋大	93.4	岐阜大	93.1
2013	福井大	95.8	名古屋大	94.2	東京工業大	93.5	九州工大	93.4	群馬大	89.5
2012	福井大	95.8	九州工大	95.3	名古屋大	93.5	岐阜大	93.1	東京工大	92.1
2011	福井大	94.7	岐阜大	93.1	名古屋大	93.0	東京工大	92.3	九州工大	90.5
2010	福井大	94.3	九州工大	93.9	東京工業大	91.3	岐阜大	91.3	名古屋大	90.1
2009	福井大	97.2	長岡技科大	95.9	九州工大	95.8	名古屋工大	94.9	電気通信大	93.0
2008	福井大	95.3	九州工大	94.6	豊橋技科大	91.9	長岡技科大	91.4	岩手大	90.4

全国大学就職率ランキング 大学送付調べ

(事務局資料)

資料2-2-2 福井大学における就職支援活動に対するメディアからの反響

福井大学の取り組みは、マスコミも注目

この部分は著作権の関係で掲載できません。

◀ 2013.11.6 NHK全国ニュース

【おはよう日本】
就職率95%！注目される
福井大学の就活支援

2013.11.22 NHK東海北陸 ▶

【ナビゲーション】
とことんやります就職支援
～就職率1位 福井大学の秘密～

この部分は著作権の関係で掲載できません。

福井大学の支援内容について

- 就職率全国1を達成した就職支援室のチームワーク
- 内定学生が実名告白！「私たちはコレで就職しました」
- 福井大学生はなぜ企業に人気なのか
- 企業との信頼を築く様々な試み

財界展望新社 2012/3/2 発売

4年連続 就職率全国 No.1
福井大学「強さの秘密」

FUKUI UNIVERSITY

(事務局資料)

資料 2-2-3 平成 27 年度就職支援活動状況

月	日	ガイダンス名	各講演名
4月	10日 (金)	教職ガイダンスキックオフセミナー	教員採用試験の出願について
5月	1日 (金)	県外教員採用試験についての説明会	京都府教員採用試験説明会
			京都市教員採用試験説明会
			名古屋市教員採用試験説明会
			石川県教員採用試験説明会
5月	8日 (金)	インターンシップ説明会	インターンシップの意義とマナー 自己分析と業界企業研究について
			インターンシップの極意 ～参加メリットと心構えについて～
			福井県インターンシップ制度について
			県外でインターンシップをする場合
5月	22日 (金)	教職ガイダンス	教員採用試験の最新動向について
6月	5日 (金)	インターンシップ事前講座	就活が優勢になる決め手 ～知らないと出遅れる!?就活のスケジュール～
	14日 (日)	学内合同企業説明会	
	15日 (日)	学内合同企業説明会	
7月	2日 (木)	SPI 3 模擬試験	SPIとは?+模擬試験に挑戦!!
	17日 (金)	SPI 3 模擬試験	SPIとは?+模擬試験に挑戦!!
8月	21日 (金)	就職活動再スタート講座&相談会①※	これからの就職活動について
			相談会
9月	2日 (水)	企業訪問	企業訪問in福井(福井銀行)
	8日 (火)	企業訪問	企業訪問in福井(福井県庁)
	11日 (金)	就職活動再スタート講座&相談会②※	これからの就職活動について
			相談会
	14日 (月)	企業訪問	企業訪問in愛知(住友電装&アイシン・エイ・ダブリュ)
	17日 (木)	企業訪問	企業訪問in愛知
	18日 (金)	SPI 3 模擬試験 (全学対象)	SPIとは?+模擬試験に挑戦!!
	28日 (月)	企業訪問 合同企業説明会	企業訪問in福井(フクビ)
	29日 (火)	企業訪問	企業訪問in福井(前田工織)
30日 (水)	企業訪問	企業訪問in福井(松浦)	
30日 (水)	進路選択スタートアップ講座	就職活動の概要・今後のスケジュール	
10月	1日 (木)	進路選択スタートアップ講座	就職活動の概要・今後のスケジュール
	3日 (土)	進路選択スタートアップ講座	就職活動の概要・今後のスケジュール
	13日 (火)	(材料対象)WEB筆記試験対策講座	(材料対象)WEB筆記試験対策講座
	16日 (金)	教職ガイダンス 業界・企業研究講座 輝く女性の未来予想講座	教採試験の最新動向と学習対策
			業界・企業研究の意義と方法について
			働く女性のための講座・マナー等
	23日 (金)	自己分析講座 内定者による就職活動体験報告会①	自己分析って何?
			内定者が教える就職活動のイロハ
	29日 (木)	エントリーシート作成講座 第1弾	エントリーシート作成講座～基礎編～
	30日 (金)	エントリーシート作成講座 第2弾 内定者による就職活動体験報告会②	エントリーシート作成講座～実践編～
内定者が教える就職活動のイロハ			

福井大学教育地域科学部 分析項目Ⅱ

11月	6日(金)	就活マナー・身だしなみ講座	就活マナー講座
		メイクアップ講座	女子学生のためのメイクアップ講座
	11日(水)	(材料対象)WEB筆記試験対策講座	(材料対象)WEB筆記試験対策講座
	13日(金)	筆記試験対策講座	筆記試験対策講座
		ブラック企業の傾向と対策	ブラック企業の傾向と対策
	16日(月)	(物理対象)WEB筆記試験対策講座	(物理対象)WEB筆記試験対策講座
	16日(月)	(生物対象)WEB筆記試験対策講座	(生物対象)WEB筆記試験対策講座
	18日(水)	SPI 3 模擬試験	SPIとは?+模擬試験に挑戦!!
	19日(木)	SPI 3 模擬試験	SPIとは?+模擬試験に挑戦!!
	20日(金)	面接対策講座 第1弾	面接対策講座～基礎編～
新聞の読み方講座		新聞の読み方について	
27日(金)	面接対策講座 第2弾	面接対策講座～実践編～	
	OB・OGとの座談会	地元で活躍するOGとの座談会	
12月	1日(火)	キャリアカフェ	キャリアカフェ
	4日(金)	集団グループディスカッション体験講座	集団グループディスカッション体験講座
	10日(木)	(材料対象)WEB筆記試験対策講座	(材料対象)WEB筆記試験対策講座
	11日(金)	人事担当者による業界・企業研究会	人事担当者が本音を語る～人事のぶっちゃけトーク～
	18日(金)	産学官連携本部主催 キャリアアップセミナー	キャリアアップセミナー
1月	8日(金)	企業内定者による就職相談会	企業内定者による就職相談会
	12日(火)	(材料・電電)WEB筆記試験対策講座	WEB筆記試験対策講座
	13日(水)	(生物・建築)WEB筆記試験対策講座	WEB筆記試験対策講座
	14日(木)	(情報・知能)WEB筆記試験対策講座	WEB筆記試験対策講座
	18日(月)	(物理・機械)WEB筆記試験対策講座	WEB筆記試験対策講座
	22日(金)	公務員合格者による就職相談会	公務員合格者による就職相談会
2月	12日(金)	就職活動のためのマナー講座	就職準備セミナー
	26日(金)	合説直前!就活総まとめ講座	合説直前!就活総まとめ講座
	27日(土)	合説直前!就活総まとめ講座	合説直前!就活総まとめ講座
3月	14(月)～18(金)	学内合同企業説明会	

(事務局資料)

- ② 学部独自の取組として、教員志望者に対する教員採用試験対策講座を行っている(資料2-2-4)。

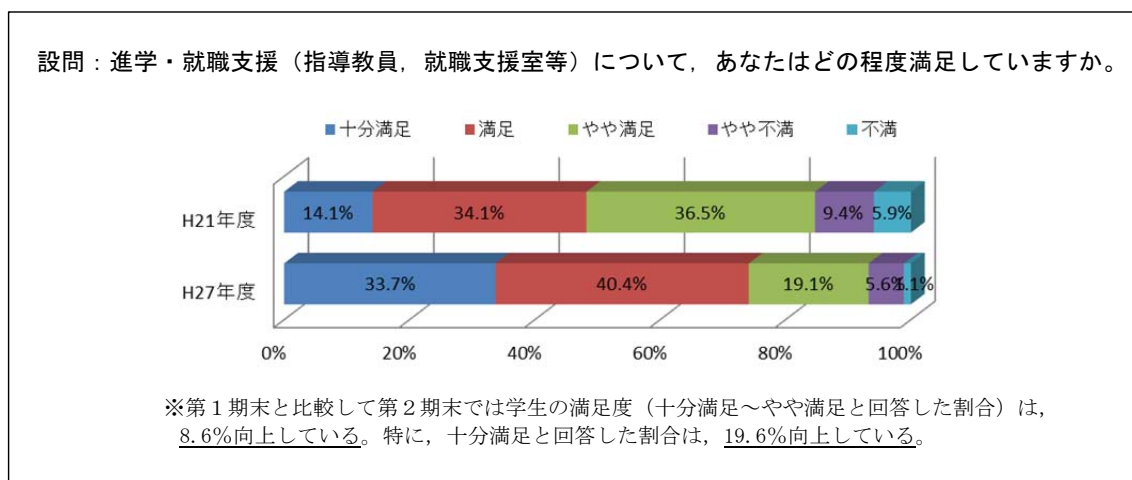
資料2-2-4 教員採用試験対策講座参加者数 (人)

年度	年間延べ参加者数
平成23年度	280
平成24年度	296
平成25年度	232
平成26年度	230
平成27年度	338

(事務局資料)

③ 卒業年次の本学部学生の 90%以上は、これらの就職支援に対して肯定的な評価を寄せており、第1期と比較しても、学生の満足度は明確に向上した（資料 2-2-5）。これらのことは、就職支援に対する学生からの期待に応えた証左である。

資料 2-2-5 進学・就職支援に対する学生の満足度



(平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋)

【就職・進学率】

卒業者に対する進路決定率は93%台から99%台と第1期中に続いて高い比率を維持しており、本学の高い就職率に対する学生と保護者の期待に応えている（資料2-2-6）。

資料2-2-6 教育地域科学部卒業生進路状況

年度	進路 課程等	卒業・ 修了者 数	大学 院進 学者 数	他 大学 ・専 門学 校等	就 職 者 数	そ の 他 ・帰 国者 数	講 師 待 ち	未 定 者 数	就職者内訳							卒 業 者 に 対 す る 進 路 決 定 率	
									企業					施 設 団 体	教 員		公 務 員
									製 造 業	卸 ・小 売業	金 融・ 保 険業	情 報 関 連業	そ の 他				
平成22年度	学校教育課程	101	23		77		1		2	1	2	2	6	9 (2)	51 (39)	4	
	地域文化課程	25			24			1	4	5	7		5	3 (1)			
	地域社会課程	33	2	2	25			4	2		6		6	4		7 (1)	
	合 計	159	25	2	126		1	5	8	6	15	2	17	16 (3)	51 (39)	11 (1)	96.2%
平成23年度	学校教育課程	103	27	1	69	1		5	1	1	2	1	5	3	51 (35)	5 (1)	
	地域文化課程	4			4				3			1					
	地域科学課程	52	2	1	47			2	4	5	6	2	20	2 (1)		8	
	合 計	159	29	2	120	1		7	8	6	8	4	25	5 (1)	51 (35)	13 (1)	95.6%
平成24年度	学校教育課程	95	24		66	1	2	2	3	3			6	4 (2)	47 (33)	3	
	地域文化課程	2						2									
	地域科学課程	58		2	52			4	7	13	5	1	20			6	
	合 計	155	24	2	118	1	2	8	10	16	5	1	26	4 (2)	47 (33)	9	93.5%
平成25年度	学校教育課程	100	23		76			1	1	1	1	2	3	4	60 (49)	4 (1)	
	地域科学課程	58		1	57				6	12	6	2	5	5		21 (2)	
	合 計	158	23	1	133			1	7	13	7	4	8	9	60 (49)	25 (3)	99.4%
平成26年度	学校教育課程	102	19	2	75	1	2	3	3	2	2		4	4	52 (35)	8	
	地域科学課程	59	1		55	1		2	7	5	9	4	6	8		16	
	合 計	161	20	2	130	2	2	5	10	7	11	4	10	12	52 (35)	24	95.7%
平成27年度	学校教育課程	104	17		79			8	1	2	5	3	2	3	55 (33)	8	
	地域科学課程	60	2		54	1		3	7	5	14	1	7	4		16	
	合 計	164	19		133	1		11	8	7	19	4	9	7	55 (33)	24	93.3%

※卒業後の就職と進学状況については、学校教育課程からの大学院の進学率は20%～30%弱、進学者を除く教員就職者（非常勤を含む）の比率は65%～75%程度で推移している。また、大学院進学者も修了後には教職に就くことを希望する傾向が強い。地域科学課程からの大学院の進学率は、2%～6%付近で推移しており、就職者のうち公務員（非常勤を含む）が12%～35%程度、一般企業等が70%～90%程度であり、年度により多少の傾向の違いが生じている。

（事務局資料）

【就職先の特徴】

- ① 福井県公立学校教員採用に占める福井大学出身者の平均比率は、第1期中には35.6%であったが、第2期中のそれは38.7%へと上昇しており、この結果は、福井県内の公立学校への採用を望む多くの学生やその家族の期待に応えたものであると言える（資料2-2-7）。

資料2-2-7 福井県公立学校教員採用状況

採用年度	福井県全体		福井大学出身者		福井大学出身者
	(A)	(B)	内訳		採用率 (B/A * 100)
			新卒計	既卒者	
平成27年度	190 <12>	72 <1>	26	46	37.9%
平成26年度	180 <11>	56 <0>	15	41	31.1%
平成25年度	180 <11>	67 <0>	15	52	37.2%
平成24年度	180 <9>	81 <1>	20	61	45.0%
平成23年度	155 <8>	65 <1>	13	52	41.9%
平成22年度	143 <9>	57 <2>	11	46	39.9%

※< >は養護教諭採用数で外数
 ※※卒業後数年間は非常勤講師として経験を積み、その後、正規に採用されるのが近年の傾向となっている。

(事務局資料)

- ② 卒業生の就職先は県内が多数を占めており、第2期中の平均では80%弱となっている（資料2-2-8）。この結果は、若者の県外流出を防ぐという地域の期待に応えるものであると言える。

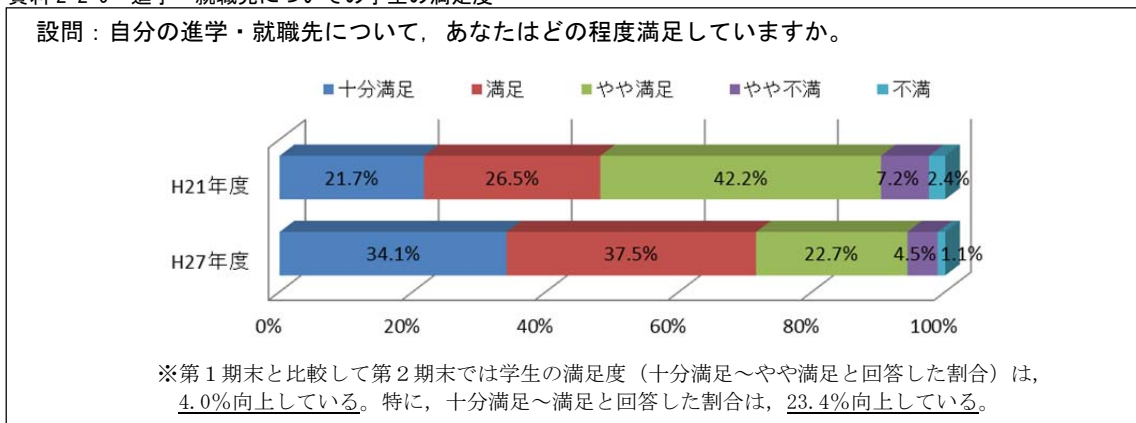
資料2-2-8 課程別県内・県外の就職状況推移

	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成22～27年度	
	福井県	県外	福井県	県外	福井県	県外	福井県	県外	福井県	県外	福井県	県外	福井県	県外
学校教育課程	65 84.4%	12 15.6%	57 82.6%	12 17.4%	55 83.3%	11 16.7%	68 89.5%	8 10.5%	53 70.7%	22 29.3%	67 84.8%	12 15.2%		
地域社会課程	22 88.0%	3 12.0%												
地域文化課程	19 79.2%	5 20.8%	3 75.0%	1 25.0%										
地域科学課程			36 76.6%	11 23.4%	38 73.1%	14 26.9%	47 82.5%	10 17.5%	40 72.7%	15 27.3%	33 61.1%	21 38.9%		
就職者合計	106	20	96	24	93	25	115	18	93	37	100	33	603	157
県内外比率	84.1%	15.9%	80.0%	20.0%	78.8%	21.2%	86.5%	13.5%	71.5%	28.5%	75.2%	24.8%	79.3%	20.7%

(事務局資料)

- ③ 学生の就職先に関する満足度に関しては、肯定的な回答が 94.3%を占めており、就職先に関するミスマッチの問題はごく少数に留まっている。第1期との比較でも満足度は向上しており、本学部の就職支援体制が良好に機能していることを示している（資料 2-2-9）。

資料 2-2-9 進学・就職先についての学生の満足度



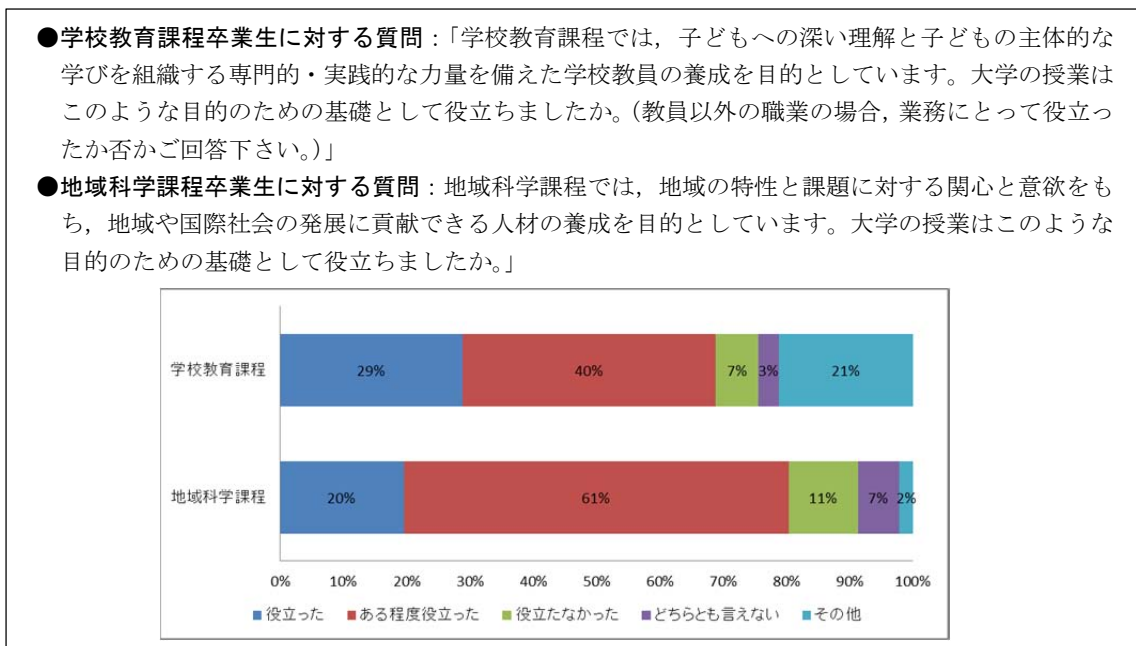
（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

●在学中の学業の成果に関する卒業・修了生及び就職先等の関係者への意見聴取の結果及び分析

【卒業生調査内容】

本学部卒業生（平成 22～25 年度卒業）に対して平成 26 年度末に実施したアンケート結果では、在学中に受けた教育が本学部の人材養成に関する目的に照らして適切なものであり、社会人基礎力の形成に役立ったかとの質問に対して、回答者の多数から肯定的な評価を得られた（資料 2-2-10, 11）。また、自由記述欄の回答には、本学部の教育内容に関して、多くの肯定的意見が寄せられた（資料 2-2-12）。これらの結果は、本学部の教育が人材養成に関する目的に沿ったものであることの証左である。

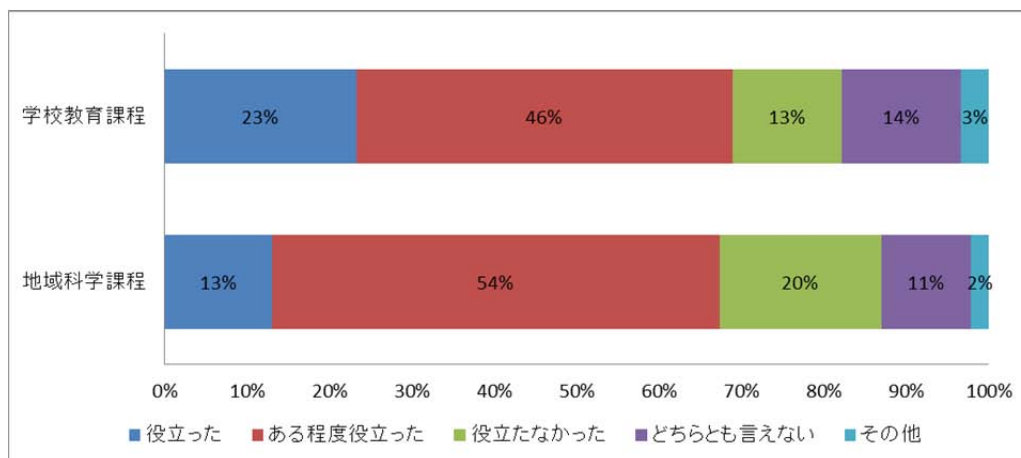
資料 2-2-10 教育地域科学部卒業生の在学中の授業の有効性に対する評価



（「平成 26 年度教育地域科学部卒業生アンケート」結果より抜粋）

資料 2-2-11 社会人基礎力の形成に対する評価

設問内容：「社会人基礎力（「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力から構成される）」の形成に関して大学で受けた教育は役立ちましたか。



(「平成 26 年度教育地域科学部卒業生アンケート」結果より抜粋)

資料 2-2-12 教育地域科学部卒業生アンケート自由記述欄の回答

学校 教育 課程 卒業 生	教育課程での授業で、グループで授業内容を検討して、自分たちで授業をしたこと。実践的でとても勉強になった。やはり、実践的に勉強しないと、現場では役に立たない。
	探究ネットワーク活動はとても役立ったと思います。ぜひ続けていってほしいです。
	教育実習だけでなく、探究ネットワークやライフパートナー事業など実際の子どもに触れる機会が多いのがよかった。医療の現場で、発達障害のある子どもと接することもあって大変役立った実感がある。
	直接学校現場に入れる機会が多かったのは、非常に良かった。
	〈よかったこと〉先生方や学友たちと、公私にわたって様々な関わりをもてたことで、人間的に成長できた。教育課程の中で、自分が主体的になることで様々な分野に触れることができ、見識を広げることができた。
	〈後悔していること〉自分の主体性が足りず、卒業研究に向けてテーマを見つけていくことが上手くできなかった。
	地域密着型の実習や卒業論文を行ったことで、就職した後もその話題を口にするのも多く、非常に有意義な大学教育であったと感じる。
	探究ネットワークやライフパートナー事業、模擬授業、教育実習など、体験的に学ぶことができたのが今の仕事に役立っています。
	たくさんの仲間と出会い、同じ目的に向かって共にがんばることができたこと。
	・野外実習で実物に触れ、見た経験はかけがえのない物だと思う。 ・教育実践研究の講義は、学生時代には課題の多さを負担に感じていたが、社会人となってから振り返ると、実力に結びついたと感じられた。 ・一般教養の中でも、憲法の講義は知識のみならず論理的思考力や文章を書く能力も鍛えられ、社会人となってからも役立った。 ・教育実践研究のグループワークは、構成メンバーにより議論の質の差が大きく、雑談をして終わってしまうグループもあった。議論が形式のみにならないよう学生の意識としても反省すべき点があった。 ・教員として働く上で、心理学等の理論の重要性は教職に就いて初めて実感したが、学生時代は軽視していた為、もっと興味をもって学ぶべきであったと思う。
	グループ活動やグループ討論などは、コミュニケーション能力や自分の意見を発する力を養うことに関して役立ったと思います。
	探究ネットワークやライフパートナー、教育実習など実際の子どもと関われる機会が豊富にあり、教師として具体的なイメージを持って実践経験を積むことができた。
	教育実習だけでなくライフパートナーなど、いろんな視点から教育現場を体験する事ができて良かったです。ゼミでも自分の興味のある臨床心理に触れることができてきました。ただ専門科目の中で開講されなかった授業があり、結局そのまま卒業してしまったのが心残りでした。現在、大学院にて臨床心理学を学んでいます。大学時代とは異なる視点をもって大学教育を振り返ることで、4年間の経験は確かな力になっていると感じることができています。

地域 科学 課程 卒業 生	少人数の講義が多かったため、教官との距離が近く、多くのことを教えていただいた。卒業後もその関係は変わっていない。大学のときに多くの先生に出会えたことが今の生活にも役立っている。
	研究室の先生方がとても熱心に、かつ親身になり、教えてくださったことが、本当に良かったです。
	・大学で恩師と出会い、教員の道にいます。障害児教育の先生方に大変お世話になりました。 ・探究ネットワークやライフパートナーは、実習よりも現場でやっていく基礎だと感じています。 ・私は教職大学院にも行きました。本当に学び多き、良いところでした。
	私は正直、大学に入学するまで、教育関係の職業に就くとは思っていませんでした。英語が好き、という理由で言語教育コースを志望しましたが、大学生活を通して教育の魅力を感じることができ、将来の職業として「教員になる」という具体的な目標を持つようになりました。これも福井大学での充実した学び・経験のおかげです。4月から福井県の教員として採用され、人生の新たな一歩を踏み出します。私の将来を形づくって下さった大学のご支援に心から感謝いたします。本当にありがとうございます！
	学びの面で言うと、自身の専門においては概ね満足だった。今の職において非常に役立っており、「もっと真面目に取り組んでおくべきだった」という思いもある。課外活動においても、非常に有意義な経験だったように思う。「他の人との生活・活動が面倒だ」という理由でサークルや部活動に参加しない人も多くいたが、私の大学で過ごした時間の中で最も大きく成長できた実感したのが部活動で過ごした時間だったと思っている。仲間とぶつかったり、1つの目標に向かって一緒に頑張った時間は、かけがえのないものだったと感じている。寮生活に関しても同じことが言えると思う。多数の人々と共に過ごす時間は、決して楽しいことばかりではない。だが、大きな自治組織を運営していくという、一般的な一人暮らしでは経験できないことに携わることができたのは、とても幸運だった。一つお願いがあるとするれば、大学生活の中で、もっと学生たちに「自主的な運営・活動」のできる場を与えてほしい。部活動・寮生活とも、学生の自主的な活動でなりたっているものである。学問的な学びも大切だが、社会に出る前にこのような経験をさせて良かったな、と私は常々感じている。在学中の福大生にも、大学生の間にしかできないことをたくさん経験してほしい。
	探究ネットワークやライフパートナーなど、実践的な学びができたことはよかった。もっと実践的な、学生自身が主体となって学べる、探究できる大学教育の学びの場や機会ができるといいと思う。
	卒業研究やゼミの授業でまちづくりや、ある地域に密着したが、福井で仕事をしたこともあり、そのような内容は有意義で福井のことについて知れてよかったと思う。地域科学課程は2年生ぐらいまでは、コースに分かれず色々な分野を広く学べるものだったけれど、入った時から進みたいコースは決まっていたためあまり広く学ぶというより、深く1つのことを学びたかった。
	やる気・意欲があれば、自分の専攻している分野以外のことも学べる環境があったことが良かったと思います。大学で学んだ内容が現在の仕事に直結しているとは言えませんが、学んだ全てのことが間接的にも、社会人となった今の自分に活きていると感じています。
	話し合う授業が多かったので、相手の意見を尊重しながら自分の考えを訴えて、ひとつの答を導き出そうと努めることができた。
	地域課題ワークショップは、チーム内で協力し合って活動することが中心だったので、コミュニケーション能力の向上に役立ったと感じた。
	地域科学課程のワークショップは自身の成長に大きくつながった。専門的に深く調べることで、その題材に興味をもてし、自分の進路を決めるきっかけにもなった。
	地域密着型の実習や卒業論文を行ったことで、就職した後もその話題を口にするのも多く、非常に有意義な大学教育であったと感じる。
	やる気・意欲があれば、自分の専攻している分野以外のことも学べる環境があったことが良かったと思います。大学で学んだ内容が現在の仕事に直結しているとは言えませんが、学んだ全てのことが間接的にも、社会人となった今の自分に活きていると感じています。
	話し合う授業が多かったので、相手の意見を尊重しながら自分の考えを訴えて、ひとつの答を導き出そうと努めることができた。
地域課題ワークショップは、チーム内で協力し合って活動することが中心だったので、コミュニケーション能力の向上に役立ったと感じた。	
地域科学課程のワークショップは自身の成長に大きくつながった。専門的に深く調べることで、その題材に興味をもてし、自分の進路を決めるきっかけにもなった。	

(「平成 26 年度教育地域科学部卒業生アンケート」より抜粋)

【就職先調査内容】

- ① 本学部卒業生が勤務する学校園の管理職者を対象に行った記述式アンケートの結果では、卒業生の教員としての勤務遂行状況について、全般的に良好な評価を得られた（資料 2-2-13）。

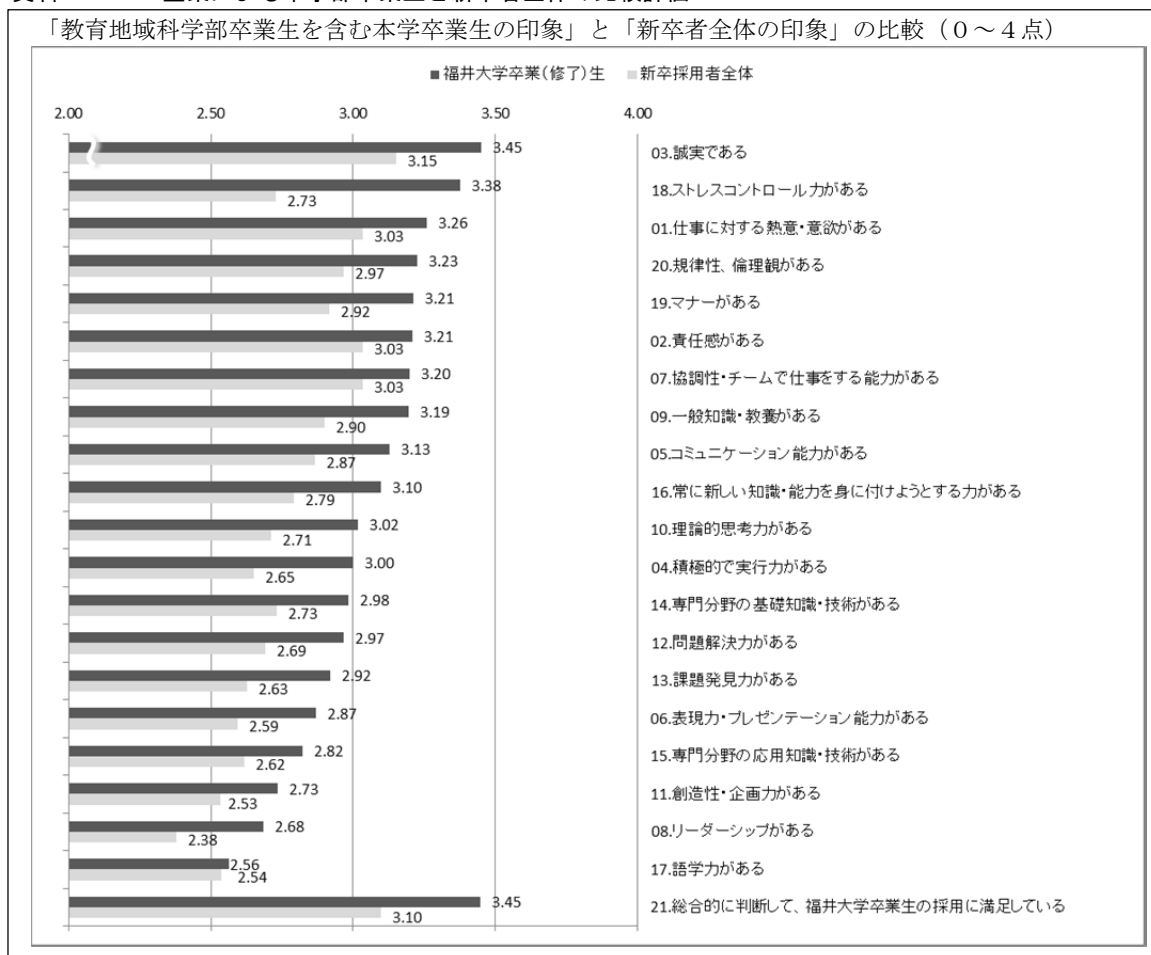
資料 2-2-13 本学部卒業生の勤務校管理職者に対するアンケート結果の例

卒業生A(平成24年度卒業)の勤務校	福井市P幼稚園
回答者(卒業生の上司)	副園長
Aの勤務遂行状況に対する評価	<p>(1)保育 これまで3歳児を中心に担当し、今年度で本園勤務4年目を迎え、毎日いきいきと職務を遂行している。入園期の個人差が大きい3歳児に対して、一人一人の特性を丁寧に見取り、スキンシップをとりながら、受容・共感を大切にして援助を行っている。そして、見守るという姿勢で保育に当たっている。そのことが、幼児の心の安定につながり、主体性や自分らしさを発揮して十分遊び込める幼児に育つ原動力となっている。本園では、豊かな幼児教育の推進を掲げており、玉村特命教諭は、日々、研究実践を積み重ね、毎年開催の研究集会等においても実績を残してきた。</p> <p>(2)園務 園務分掌では、親子運動会やクリスマス会の企画運営をはじめ、図書主任として絵本の管理を行なった。特に、園児一人一人が絵本に親しみ、豊かな言葉をはぐくめるよう、絵本を選定したり、図書を整えたりなど、その仕事ぶりは高く評価できる。また、長期的な見通しを持ち、保護者や関係機関との連携を図りながら計画的に進めることができ、行事等の推進に努めた。3歳児用の園庭を活用して開催している未就園児とその保護者対象の「子育て広場」においては、未就園児のお子さんと温かな関係を築きながら遊んだり、保護者の子育ての相談に乗ったりなど、地域の子育て支援にも取り組んできた。同僚を慮る温かな心遣いができ、チーム幼稚園の一員として、お互いに協力し合い、助け合いながら職責を果たしていく姿勢がよく身についている。</p> <p>(3)保護者対応 毎日の生活の様子や成長の過程をつぶさに見つめ肯定的に捉える目を持ち、家庭と園がともに協力しながら幼児の成長を見守り支えていく保育を積み重ねてきた。また、その誠実な姿勢は、保護者からの厚い信頼を得ており、常に、きめ細かな対応ができています。</p>
卒業生B(平成25年度卒業)の勤務校	名古屋市Q小学校
回答者(卒業生の上司)	教務主任
Bの勤務遂行状況に対する評価	<p>特別支援学級の担任として、2年目(本校では1年目)になる。4月に赴任して、慣れない環境の中で緊張していたようだが、特別支援学級の主任や年齢の近い教員との会話が増えるにつれ、職場の雰囲気にも少しずつ慣れてきたようだ。</p> <p>本校の特別支援学級は10名の児童が在籍し、二人の学級担任で指導している。多くの支援を必要とする児童が多い中、学級の児童と積極的に関わり、児童一人一人の個性を的確に捉えて指導にあたることを心掛けている。また、一つ一つの事柄に対して自分の考えを明確にし、前向きな姿勢で仕事に取り組んでいることは評価できる。今後も、こうした姿勢を忘れず、職務に邁進することで確実に力を付けていってほしい。</p> <p>学部で学んだ知識や、体験的・実践的に身に付けた技能を、実際の仕事の中で生かそうとする場面が多く見られる。また、大学での専門的な学びが仕事を上での支えにもなっている。大学で学んだことと学校現場での指導とは、大きな隔りがあることも多いだろうが、新たな知識や経験を多く積むことができる機会でもある。大学で学んだ知識を学校現場での経験と結び付けることで、教師としてより確かな力を育んでいってほしい。</p>
卒業生C(平成26年度卒業)の勤務校	あわら市R小学校
回答者(卒業生の上司)	校長
Cの勤務遂行状況に対する評価	<p>(1)学習指導 学力の基礎となる音読活動や作文活動、算数の計算学習等を積極的に行うことができた。学校全体で進めている算数科の研究では、自身の研究授業に向け、熱心に取り組んでいた。学年末には、受け持りのクラスのほとんどの児童が「算数が好き」と答えられるようになり、本人もかなり自信がついたようである。また、自ら校長に何度も授業観察を依頼するなど、授業改善への意欲は極めて高い。</p> <p>(2)学級経営 個人懇談を通して児童の悩みを早期に発見し、適切に対応することができた。「ほめる」「しかる」のメリハリがある指導ができ、大学を出たばかりの若い教師としては、珍しく安定した学級経営を行うことができた。児童や保護者との信頼関係も良好である。</p> <p>(3)学校運営 校務分掌は、専門の理科主任ではなく体育主任を担当しており、今年が2年目である。体育主任は、運動会や球技大会など学校全体を動かす事が多く、新採用教員がその任に当たることはなるべく避けるのが学校の常識である。しかし、男性のクラス担任が彼しかいないという本校の事情から、困難は承知で彼に担当してもらうことになった。全体指導の機会も多く、初めの頃はかなり指導に戸惑ったようである。しかし、休日出勤や夜遅くまで残って頑張ることに加えて、周りの先生方の協力やアドバイスを素直に受け、体育的行事をスムーズにこなすことができた。</p> <p>(4)総合評価 社会人としての態度、授業力や学級経営力に関して、採用からの一年間の成長ぶりは著しいものがある。その一因として、自分が納得するまで頑張る熱意、周囲の同僚から多くのことを吸収しようとする態度・素直さ、与えられた仕事だけでなく学校全体のために貢献しようとする態度等が挙げられる。今後の更なる成長・活躍が楽しみである。</p>

(「平成 27 年度学部卒業生勤務先校関係者アンケート」より抜粋)

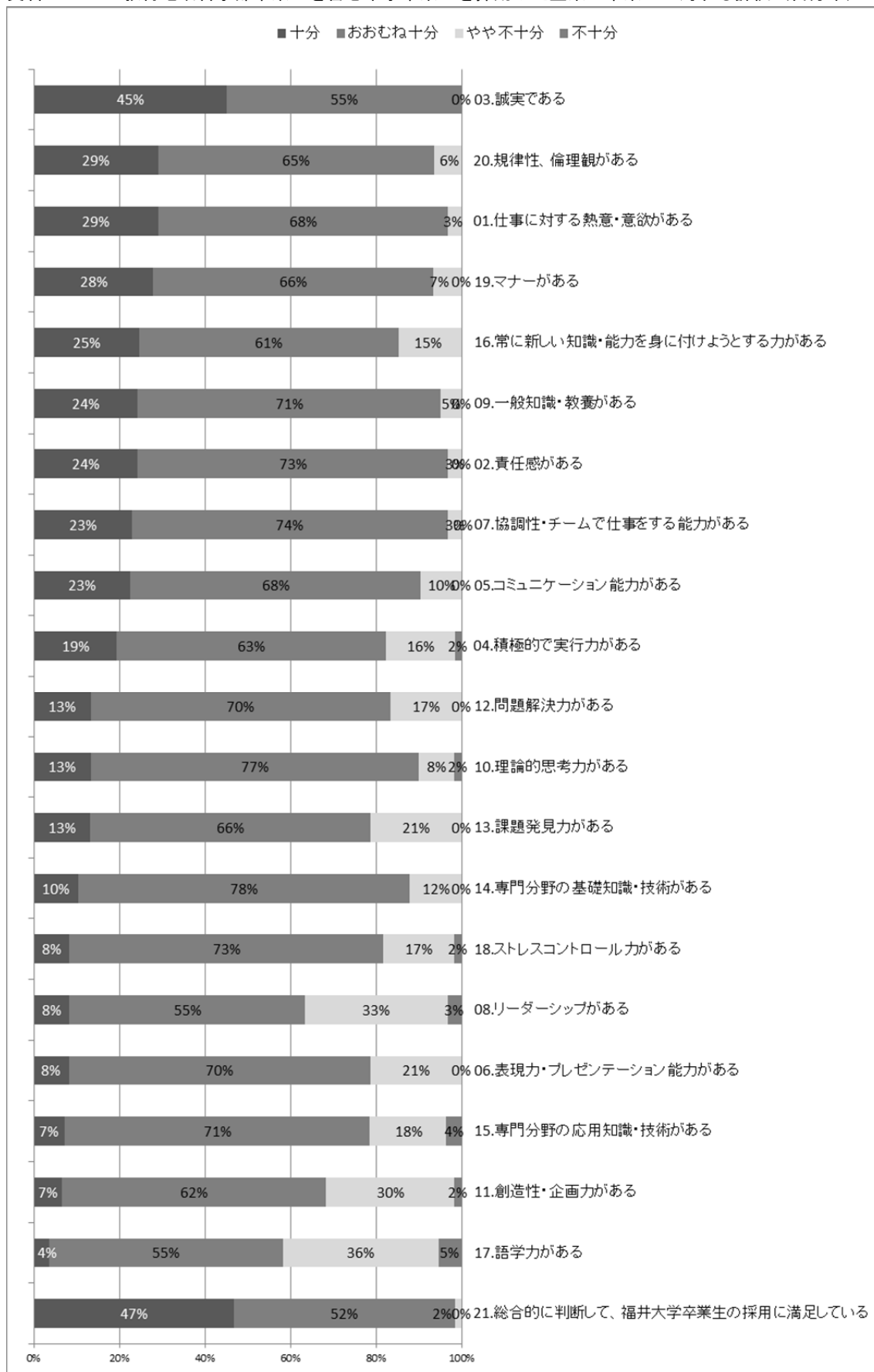
② 本学卒業生を採用した企業等を対象に行われたアンケートの結果でも、教育地域科学部卒業生を含む本学卒業生を採用した企業の卒業生に対する評価は多くの項目で新卒採用者全体のそれを上回っており、ほとんどの企業が総合的に見て満足している（資料2-2-14～16）。これらの結果は、人材育成に関する企業等からの期待に応えた証左であると言える。

資料 2-2-14 企業による本学部卒業生と新卒者全体の比較評価



（「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査 2013」より抜粋）

資料 2-2-15 教育地域科学部卒業生を含む本学卒業生を採用した企業の卒業生に対する評価（百分率）



(「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査 2013」より抜粋)

資料 2-2-16 自由記述欄における卒業生に対する企業の評価

	学生に対する評価
A社	個性や能力の発揮をより前面に出してほしい。
B社	勤勉な学生が多いと感じますが、やや消極的でおとなしい印象を受けます。
C社	★頭の回転が良く、頑張っておられます。また、良い方をご紹介します。
D社	★福井大の学生は総じてレベルが高く、将来幹部候補になる人物もおりますので、これからも質の高い学生を輩出して頂ければと思っております。
E社	多様な人材を求めていますので、大学教育を通じて学生一人ひとりの個性を発揮させて頂ければと思います。
F社	★今後も学内の企業説明会にはぜひ参加させて頂きたいと考えております。よろしくお願ひします。
G社	恐縮ながら、御校の学生は平均的な学生が多く、個性に乏しいと感じております。もっと、個性を伸ばすカリキュラム（例：ディベート等、価値観を養うカリキュラム）があるとよいかと存じます。引き続きよろしくお願ひいたします
H社	★明るく、積極性があり採用させて頂き、大変満足した状態で活躍頂いています。
I社	地元志向が強い学生が多い印象がありますので、もっと幅広い視野で就活をしてほしいと思います
J社	真面目で地頭が良い。ただし人を押しのけて前に出る力は弱い（特に男性、引っ込み思案タイプ）
K社	★能力の高い学生さんだなという印象です。引き続きよろしくお願ひいたします
L社	意欲的かつまじめに仕事に取り組む姿勢があり好感が持てます。また理論的にきちんと話をする事ができます

*教育地域科学部学生を含む本学学生を採用し、自由記述欄で学生に対する評価を記述した12社の回答。そのうち、★は教育地域科学部学生のみを採用した企業による評価。

（「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査2013」より抜粋）

③ 教育地域科学部就職委員会が学部卒業生の県内就職先企業に対して行った聞き取り調査でも、卒業生について具体的な回答をした企業の評価は、概ね良好であった（資料2-2-17）。

資料 2-2-17 教育地域科学部卒業生を採用した県内企業に対する聞き取り調査結果

年度	企業	内容
平成 25 年度	A社	今年の内定者で言えば、英語が得意でグローバルな視点を持っている。周りに流されず、きちんと主張できる。
	B社	最近採用した女性で言えば、積極性と明るさで評価が高い。
	C社	教育地域科学部学生は、数年に1名であるが、経理に2年前入社した女性は英語ができ、スキルが高い。
	D社	熱心である印象。
	E社	まじめに取り組んでいる。一本気過ぎるぐらい。
	F社	近年退職者はなく、入社していただいた学生について不満はない。
平成 26 年度	A社	仕事に対する熱意が高い人を採用しているので満足している。 福大生は真面目でおおむね評価は高い。 組織を運営するスタッフとしての能力は十分満足している。 今後も、幅広い知識を持つ人を採用していきたい。
	B社	受身の若者が多い中で、主体的に行動できる人材が多い。
	C社	基礎学力は十分あるが、主体性をさらに身につけてほしい。 学生時代にアルバイトを経験していた人は社会性が身につけている様に見える。
	D社	福井大学学生の評価は高い。 安定性があり、真面目で素直である。 学生のうちにコミュニケーション力を身につけておいてほしい。
	E社	真面目で誠実であり安心して仕事を任せられることができる。 資格取得についてもポテンシャルは高い。 社会性もあり、マナーもしっかりできている。 自分カラーが出せればもっと良い。
	F社	コミュニケーションがとれ、明るい性格が多い。

（事務局資料）

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

- ① 全学体制のもとで年間を通じてきめ細かい就職支援の取組を行っており¹⁾、これらの就職支援に対する学生の満足度も第1期と比べて明確に上昇し、高い水準に達した²⁾。

¹⁾ 資料 2-2-3 : 平成 27 年度就職支援活動状況 P1-96

²⁾ 資料 2-2-5 : 進学・就職支援に対する学生の満足度 P1-98

- ② 卒業者に対する進路決定率は第1期に続いて極めて高い比率を維持し³⁾、本学全体として第2期を通じて全国有数の高い就職率⁴⁾を達成することに寄与した。また、学生の就職先に関する満足度は高く、第1期との比較でも向上し⁵⁾、本学部を含む全学の就職支援体制が有効に機能していることを示した。

³⁾ 資料 2-2-6 : 教育地域科学部卒業者進路状況 P1-99

⁴⁾ 資料 2-2-1 : 高い就職率の維持 P1-95

資料 2-2-2 : 福井大学における就職支援活動に対するメディアからの反響 P1-95

⁵⁾ 資料 2-2-9 : 進学・就職先についての学生の満足度 P1-101

- ③ 県内公立学校教員の採用において本学部卒業生は平均4割近くを占め⁶⁾、学部卒業生の約80%は県内に就職しており⁷⁾、地域の期待に応え、若者の県外流出を防ぐという本学部の目標に沿った結果を達成した。

⁶⁾ 資料 2-2-7 : 福井県公立学校教員採用状況 P1-100

⁷⁾ 資料 2-2-8 : 課程別県内・県外の就職状況推移 P1-100

- ④ 本学部卒業生に対するアンケートにおいて、在学中の教育内容が卒業後の業務の基礎として役立ったとする肯定的回答が多数寄せられたこと⁸⁾は、能力の涵養に関する学生・卒業生の期待に応えた証左と言える。

⁸⁾ 資料 2-2-10 : 教育地域科学部卒業生の在学中の授業の有効性に対する評価 P1-101

資料 2-2-11 : 社会人基礎力の形成に対する評価 P1-102

資料 2-2-12 : 教育地域科学部卒業生アンケート自由記述欄の回答 P1-103

- ⑤ 卒業生の就職先関係者に対するアンケートでは、新卒者全体と比較しても本学部卒業生に対する評価は全般に高く⁹⁾、個別的聞き取り調査においても概ね良好な評価を得ており¹⁰⁾、高い能力を持つ人材の育成に対する関係者の期待に応えたと言える。

⁹⁾ 資料 2-2-14 : 企業による本学部卒業生と新卒者全体の比較評価 P1-105

¹⁰⁾ 資料 2-2-13 : 本学部卒業生の勤務校管理職者に対するアンケート結果の例 P1-104

資料 2-2-15 : 教育地域科学部卒業生を含む本学卒業生を採用した企業の卒業生に対する評価 P1-106

資料 2-2-16 : 自由記述欄における卒業生に対する企業の評価 P1-107

資料 2-2-17 : 教育地域科学部卒業生を採用した県内企業に対する聞き取り調査結果 P1-107

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

- ① 教科指導に関して地域と連携した実践的な教育活動を目指し、教育委員会と共同して申請した、平成 21 年度科学技術振興機構「理数系教員(CST)養成拠点構築事業」に採択された CST 養成・支援システムの構築を第 2 期中に進め、平成 25 年度からは文部科学省 COC 事業の一環としてさらに継続・推進した¹⁾。この取組は認証評価においても高く評価されており、教育活動に関する質の大きな向上を達成していると判断できる。

¹⁾ 資料 1-1-13	: CST (コア・サイエンスティチャー) 事業の概要	P1-12
資料 1-2-31	: 初級 CST 学校インターンシップ参加者数	P1-58
資料 1-2-32	: 初級 CST 博物館等インターンシップ参加者数	P1-58
資料 1-2-33	: CST シンポジウム (初級 CST 受講者の発表例)	P1-59

- ② カリキュラム改善の一環として、平成 22 年度文部科学省「大学生の就業力育成支援事業 (就業力 GP)」及び平成 24 年度文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に申請・採択された取組において、就業力を高めることを目的とした教育プログラムを展開し、成果があがった²⁾。これら取組が GP に採択され、外部評価や認証評価においても高く評価されたことは、教育プログラムの実施体制に関する質の向上を示すものと判断できる。

なお、更なる教育の改善と、より高度な専門職業人育成を目指し、県内の高等学校、企業及び自治体に対して、人材需要や関係者ニーズに関する意見聴取を実施し³⁾、その結果も参考に地域科学課程の発展型として構想された、国際地域学部の平成 28 年度設置⁴⁾が認められたことは、第 2 期中の教育活動の質の高さが認められたものと判断できる。

²⁾ 資料 1-1-16	: 地域共生プロジェクトセンターの概要	P1-15
資料 1-1-17	: 産業界ニーズ GP の概要	P1-16
³⁾ 資料 1-1-40	: 国際地域学部の設置に繋がった関係者意見 (平成 26 年度)	P1-33
⁴⁾ 資料 1-1-41	: 「国際地域学部」および「教育学部」の概要	P1-34

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

- ① 第 2 期中に、学校教育課程においては「教員養成スタンダード」を策定し、学業成績の新たな評価方法への転換を図った¹⁾。また、地域科学課程のアクティブ・ラーニング型科目においても「育成したい能力」指標を導入した²⁾。その結果、これらの科目に対する学生の評価が向上し、学業成績も良好であったこと³⁾は、中核的科目における評価方法・授業内容の改善に関する質の向上を実現したものと判断できる。

¹⁾ 資料 1-2-5	: 教員養成スタンダード	P1-41
資料 2-1-1	: 教員養成スタンダードにおける新しい評価方法への転換	P1-78
²⁾ 資料 2-1-4	: 「育成する能力」に関する学生の自己評価例 (平成 27 年度前期)	P1-81
³⁾ 資料 2-1-6	: 地域課題ワークショップ科目単位修得者の評価点平均値	P1-83
資料 2-1-7	: 成績評価基準・成績評価方法に関する学生の評価	P1-83

- ② 共通教育の英語科目の内容につき 4 技能をバランスよく育成するものへと改善するとともに、科目数を倍増させた⁴⁾。その結果、TOEIC の平均点の着実な上昇を実現し、学生からの評価も向上したこと⁵⁾は、本学の長期目標に沿って、英語教育の内容・方法を質的に向上させたものと判断できる。

- | | | | |
|----|-----------|----------------------------|-------|
| 4) | 資料 1-2-24 | : 共通教育における英語教育 | P1-54 |
| 5) | 資料 1-2-25 | : 英語力の自己評価 | P1-54 |
| | 資料 2-1-9 | : 平成 26 年度入学生の TOEIC 結果の推移 | P1-85 |
| | 資料 2-1-10 | : 教養・共通教育（語学系）に関する学生の満足度 | P1-85 |